

# コミュニケーション論

講師:松尾 康弘

単位数:1単位

時間数:15時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

## ■科目目標

言語聴覚士はコミュニケーションに障害のある方々やその家族へ専門的に支援を行う。さらに医療においてはチームアプローチが必要であり、介護・福祉・教育の分野においても多職種との連携、つまりコミュニケーションが必要になる。本科目では対人関係の感性と能力を磨き、臨床現場で円滑にコミュニケーションを図ることができるようになることを目標とする。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	コミュニケーションの基本的な心構えを理解する	講義・TBL	
2	他者との関係を築くコミュニケーション方法を理解する	TBL	
3	演習を通しラポールテクニックを習得することができる	TBL	
4	演習を通しラポールテクニックを習得することができる	TBL	
5	非援助者の理解と情報交換、行動化の支援について理解できる	講義・TBL	
6	チームワークとコミュニケーションについて理解できる	講義・TBL	
7	・視覚障害・聴覚障害のある被援助者とのコミュニケーション ・認知症のある被援助者とのコミュニケーション ・人生の最期を迎える被援助者とのコミュニケーションについて理解できる	講義・TBL	
8	試験・解説	試験・解説	

## ■受講上の注意

### ■成績評価の方法

講義への参加態度(40%)・最終試験(60%)により総合的に評価し、本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

### ■テキスト参考書など

必要に応じ資料を配布する

### ■備考

### ■実務経験

本科目は言語聴覚士、公認心理師として実務経験のある教員による授業である。

# ことばとシンボルの世界

講師:上江 七美、戌亥 啓一

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

## ■科目目標

手話は聴覚障がい者にとって見える言語であり、大切なコミュニケーションの手段である。本講義で聴覚障がいについての基本的な理解と手話で日常会話と伝える能力を習得する。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	聴覚障がいとは？ 指文字を覚えよう 自己紹介など	演習・グループワーク	
2	指文字 自己紹介、家族などの手話表現	演習・グループワーク	
3	あいさつ、返事あいづちなど	演習・グループワーク	
4	現在、未来、過去 一週間	演習・グループワーク	
5	数の表し方、時間	演習・グループワーク	
6	天気、気候 今日の天気は？	演習・グループワーク	
7	誘い、約束など	演習・グループワーク	
8	気持ち 感情をあらわす表現	演習・グループワーク	
9	尋ねる 対になる手話	演習・グループワーク	
10	都道府県、いろいろな地名など	演習・グループワーク	
11	体調、病気、医療に関する表現	演習・グループワーク	
12	総復習	演習・グループワーク	
13	コミュニケーション手段①	演習・グループワーク	
14	コミュニケーション手段②	演習・グループワーク	
15	試験とまとめ	試験、解説	

## ■受講上の注意

授業活動の状況によって上記の内容や順番を変更することがあります。

## ■成績評価の方法

実技含む試験

## ■テキスト参考書など

オールカラーやさしくわかるはじめての手話. ナツメ社

## ■備考

授業では適宜資料プリントを配付する。

## ■実務経験

# 情報科学

講師:小牧 祥太郎

単位数:2単位

時間数:45時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

## ■科目目標

昨今、医療現場においても適切な情報活用・管理が求められている。適切な管理・運用が行えない場合、情報漏洩リスクが高まり、施設・個人に対して脅威を与えることとなる。本講義では、情報活用に関する運用や管理について学び、情報モラルに関する理解を深めた後、昨今医療機関でも通常業務として使用が一般的となっているコンピューターの使用に関して基本的な操作を習得していく。また、本校の情報通信環境を活用するほか、個人所有のパーソナルコンピューター、スマートフォンを学習や情報取得手段として有効活用し、AIを活用した次世代のツールへの造詣も深め、情報リテラシーの向上を図る。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	学内の情報通信環境 (Free Wi-Fi、コンピューター室の利用、アクセス手段、端末・電源等の管理について)について理解を深め、本校において使用するオンラインコミュニケーションツール (Microsoft Teams (以下、Teams)) の使用環境を整備する。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施予定。
2	本校において使用する、メールソフト、クラウド、講義管理 (出席・修得状況) ソフトなどの情報通信環境の整備と利用の仕方について学ぶ。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
3	コンピューターの挙動を理解し、Windowsの基本操作になれる。 今後の学習や実習で使用に耐えうるコンピュートースベックについて知り、遠隔講義配信ツール (Zoom) の操作についても学ぶ。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
4	デジタルデータの管理について学び、情報管理について理解する。 Microsoft Office Word (以下、Word) の基本操作に慣れる。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
5	Wordの応用操作 (図や表の挿入) を習得する。 Wordで作成したデータのPDFへの変換方法を習得する。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
6	メールソフトの利用方法、メールマナーについて学ぶ。 (添付ファイルのPDF化処理など含む)	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
7	講義・学習で必要となる情報取得手段について学ぶ (文献検索・図書館利用法とオンライン検索方法など)。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
8	各種成果物 (レポート) 等で根拠として使用する、引用文献の引用方法・リストの作成について学ぶ。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
9	Microsoft Office PowerPoint (以下、PowerPoint) の基本的な操作を学ぶ。 PowerPointにて自己紹介スライドの大枠を作成する。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
10	作成中の自己紹介スライド (PowerPoint) へ審美的な装飾方法を学ぶ (アニメーションや図・表の挿入等)。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
11	作成中の自己紹介スライド (PowerPoint) の発表準備 (仕上げ) とメール添付での送付を行う。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
12	PowerPointにて作成した自己紹介スライドの発表を行う。 インタラクティブ投票ツールを用いて、自己紹介スライドへの好意的な評価を行う。 ※学生人数次第で2部制とする。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
13	PowerPointにて作成した自己紹介スライドの発表を行う。 インタラクティブ投票ツールを用いて、自己紹介スライドへの好意的な評価を行う。 ※学生人数次第で2部制とする。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
14	Microsoft Office Excel (以下、Excel) の行・列などの基本的な操作を学ぶ。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
15	Excelの基本操作を学ぶ (データ入力操作、簡易な計算 (合計・平均) について)。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
16	Excelの基本操作を学ぶ (書式設定等について)。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
17	Excelの応用操作を学ぶ (グラフの作成、可能なら条件判断・処理分岐まで)。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
18	プログラミングを通して、論理的な思考・問題解決能力を学ぶ (Code.org®を用いて)。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
19	言語聴覚士にとって活用可能性の高いスマートフォンアプリを調査し、プレゼンテーション資料として作成を行う (引用文献の引用方法の復習、情報取得手段の復習を兼ねて)。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
20	ChatGPT、Perplexity AIなどの人工知能ツールの適切な使用方法について学ぶ。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。

21 Word・Excelの基本・応用操作の復習を行う。

講義・グループワーク コンピューター室にて実施。  
Teamsのパスワードを把握しておくこと。

22 模擬試験(終講試験と同等水準の簡略版)を実施する。

講義・グループワーク コンピューター室にて実施。  
Teamsのパスワードを把握しておくこと。  
Word・Excelについて復習しておくこと。

23 試験・解説(あるいはまとめ)

試験・講義 コンピューター室にて実施。  
Teamsのパスワードを把握しておくこと。

---

#### ■受講上の注意

毎回の成果物はクラウドにて保存を行う。それにあたり、Teamsのパスワードは把握しておくようにする事。  
講義状況によって、上記の内容や順番を変更する場合もある。また、講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

#### ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

#### ■テキスト参考書など

適宜、資料を配布する。  
(基本的には、コンピューター上でデータ資料にて配布を行う)

#### ■備考

基本的にコンピューター室にて講義を行う。

#### ■実務経験

# 社会心理学

講師:大藪 博記

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

## ■科目目標

対人関係並びに集団における人の意識、態度及び行動についての心の過程に関する、社会心理学の基礎的な知識と研究法を習得する。さらに、それらの知識を元に、社会での人間関係などの個人の問題から環境破壊や文化摩擦などの社会問題まで、多面的な視点から考察できるようになることを目標とする。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	オリエンテーション	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
2	原因帰属とステレオタイプ:差別を生み出す心理	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
3	自己と態度:自己欺瞞の心理	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
4	格差と公正:平等な社会を阻む心理	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
5	メディアの影響:社会のフィルターを知る	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
6	進化してきた心:ヒトの社会性の起源	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
7	身近な人間関係:恋愛と家族	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
8	友人関係とネットワーク:絆としがらみが作る社会	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
9	社会的ジレンマ:集団での協力と裏切り	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
10	集団間葛藤:ウチとソトの対立	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
11	西洋と東洋の心の違い:文化的自己観と認知スタイル	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
12	文化と適応:文化差の起源を求めて	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
13	幸福感と社会:幸せとは何か?	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
14	社会心理学史:変遷する人間観	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
15	終講試験およびまとめ	講義・討論	

## ■受講上の注意

毎回、討論を行う予定のため、積極的・主体的に参加すること。

## ■成績評価の方法

毎回のミニッツペーパー30%と終講試験70%

## ■テキスト参考書など

教科書:なし

参考書:社会心理学,有斐閣。社会心理学キーワード、有斐閣。その他、適宜紹介する。

## ■備考

資料プリントは適宜配布する。

## ■実務経験

# 基礎教育学

講師:高谷 哲也

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:2学年

必修選択:必修

## ■科目目標

教育学分野の基礎的な専門知見を学ぶ。

人間が成長するうえで教育が果たす役割、教えることと学ぶことの関係、生涯にわたり学び続けていくことの意味などについて、理解を深めてもらう。加えて、ものごとを教育学的にみることのできる力を獲得することに重きを置く。そのため、実際に他者と協力しながら学ぶ演習に取り組みながら、そこから専門的な概念や事象の意味を理解したり、様々な学び方を身につけたりする学習方法も獲得してもらう。

基礎的な教育学の専門的概念やものの見方を獲得し、医療やヒューマンサービス分野における営みに自身の力で応用していける専門的力量を身につけてもらう。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「教育学」という学問の特徴と本授業の進め方を体験する	演習・GW	不安な事があれば遠慮なくお知らせください。
2	学習における自己評価の役割と重要性について理解する	講義・GW・映像視聴	グループでの演習の進め方のコツをつかめるよう意識しましょう。
3	学びと知識獲得のメカニズムについて自身の経験と関連づけて理解する	講義・GW	グループでの演習の進め方のコツを覚えましょう。
4	理想の教育像が経験に左右されることを理解する	講義・GW・映像視聴	自分と価値観・考え方が異なる人に真摯に学ぶスタイルを獲得しましょう。
5	子どもの成長を促す要素について理解する	講義・GW・映像視聴	他者と対話をしやすい空気の作り方を意識しましょう。
6	学習者の成長可能性への着目の重要性を理解する	講義・GW・映像視聴	自分の考えを正確に伝えることを意識しましょう。
7	成長における挑戦と失敗の意味について理解する	講義・GW・映像視聴	自分たちで学びを創りあげる学習に挑戦してもらいます。
8	教育と学習、教えることと学ぶことの間を整理する	演習・GW	自分たちで学びを創りあげる際に必要なことを意識しましょう。
9	集団の中での学びと社会化について理解する	演習・GW・映像視聴	自分の力だけでは不安な時に、いかに上手に助けを借りるかに挑戦しましょう。
10	学習者の内面にある想いについて想像することのできる知識と力を獲得する	講義・演習・GW	これまでの学びの自分なりの意味づけ・意義づけをする学び方を体験しましょう。
11	教育におけるメディアの概念を理解する	講義・演習・GW	難解な概念や文章を読み解く際に、他者の力をいかに借りるかを考えましょう。
12	院内学級における教師の子どもとの向き合い方に学ぶ	講義・GW・映像視聴	映像資料を細部まで観察しながら視聴することを心がけましょう。
13	「省察」を通した専門職の成長について学ぶ	講義・GW・映像視聴	自分を客観視・メタ認知できるようになるために何が必要か復習しておきましょう
14	学習における相互評価の意味と「ほめる」ことの本質について理解する	講義・GW	他者の課題に対してフィードバックする際の心がけを意識して取り組みましょう。
15	本授業を通した学びをふり返り、最終課題を完成させる	講義・演習・試験	個人の力と他者と協働する力の両面を發揮して最終課題に取り組みましょう。

## ■受講上の注意

他者と協力しながら学ぶ機会を多く設定しているため、互いに学びを楽しめるためには何が必要かを考えるとともに、遠慮なく他者の力を借りることができるようになってもらいたい。

## ■成績評価の方法

1. 各回の演習・議論への取り組み状況、提出ワークシートの評価(20%)
2. 各回の演習・思考内容を記載していく記録シートの評価(30%)
3. 最終課題(50%)

## ■テキスト参考書など

【参考書】

木村元編(2015)『系統看護学講座 基礎分野 教育学』医学書院

## ■備考

授業では適宜資料プリントを配付する。

## ■実務経験

# 統計学

講師: 島 義弘

単位数: 1単位

時間数: 30時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

## ■ 科目目標

統計学的な考え方を理解し、統計学の基本的な知識を修得することを目標とする。この科目を通して、実際のデータを扱う中で、適切な統計処理を施し、正しく報告・解釈できるようになる。

## ■ 科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	統計学の概要を理解できる	講義	該当箇所の復習(教科書, レジュメ)
2	尺度水準を理解し、データの図表で表すことができる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
3	代表値の意味を理解し、求めることができる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
4	散布度の意味を理解し、求めることができる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
5	標準化の意味を理解し、求めることができる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
6	相関係数の意味を理解し、求めることができる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
7	推測統計学の考え方を理解できる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
8	母集団と標本について理解できる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
9	正規分布について理解できる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
10	不偏性について理解できる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
11	統計的仮説検定の考え方を理解できる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
12	2つの平均値の差の検定を行うことができる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
13	3つ以上の平均値の差の検定を行うことができる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
14	カテゴリ変数の連関を調べることができる	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

## ■ 受講上の注意

欠席をしないこと。演習課題には積極的に取り組むこと。私語は厳禁、ただし、講義中の演習課題で分からないところは積極的に教員や他の受講生に質問し、理解に努めること。

## ■ 成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■ テキスト参考書など

『公認心理師ベーシック講座 心理学統計法』 芝田征司(著) 講談社

## ■ 備考

教科書のほかに、レジュメを配布する。電卓(タブレット等の電卓機能で可)はあったほうがよい。

## ■ 実務経験

# 心理学 I

講師:山下 協子

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

## ■科目目標

「こころ」の問題は、特定の人たちの問題ではなく、私たちすべての人間の人生や生活に密接に関係している。本講義では、「こころ」の問題に取り組む姿勢を自分自身で考えることができるようになるために、自分の感情や感覚について体験してもらう体験学習を交えながら、基礎となる心理学および臨床心理学について概説していく。心理学および臨床心理学の基礎的な知識を習得し、関連する用語や療法等について理解できるようになることを目標とする。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	オリエンテーション、心理学・臨床心理学をなぜ学ぶのか	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
2	「心理学とは」「感覚・知覚・注意・認知」について理解する	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
3	「情動・動機付け・パーソナリティ・社会」「記憶・学習」について理解する	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
4	「言語・概念・思考」「発達と知能」について理解する	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
5	「臨床心理学とは」「防衛機制」について理解する	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
6	精神医学の基礎知識について理解する	講義・GW	配布資料を確認する。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
7	統合失調症について理解する(映画鑑賞①)	講義・DVD	統合失調症について復習しておく。
8	統合失調症について理解する(映画鑑賞②)	講義・GW	統合失調症について復習しておく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。映画の感想レポートを課する。
9	「心理アセスメント」について理解する	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
10	「臨床で用いられる心理検査」について理解する	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
11	「臨床心理学の介入方法(行動的)」について理解する	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
12	「臨床心理学の介入技法(内面的)」について理解する	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
13	「臨床心理学の介入技法(相談的)」について理解する	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
14	カウンセリングとは何かについて理解する	講義・GW	GWでは積極的に自分の意見を伝える。
15	終講試験およびまとめ		事前に配布する問題集を参考に復習しておく。

## ■受講上の注意

講義は基本的にはテキストに沿って進める。当日レジメを配布するが、事前に該当する章を読んで臨んでほしい。また、体験学習を数回取り入れる予定であるが、私語などせず真摯に取り組み、グループワークの際には積極的に意見を述べてほしい。

## ■成績評価の方法

試験90%、平常点10%(授業への参加態度、課題など)により総合的に評価する。

## ■テキスト参考書など

- 『リハバースティック 心理学・臨床心理学 第2版』内山 靖・藤井 浩美・立石 雅子 編 医歯薬出版株式会社
- 授業での配布資料

## ■備考

講義用のレジメや資料は適宜配布する。

## ■実務経験



# 心理学Ⅱ

講師:山口 浩明、戌亥 啓一

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:2学年

必修選択:必修

## ■科目目標

心理学は主観的な評価によるカウンセリングやセラピーが行われるという一般的な印象があるが、実際には実験心理学で培われた客観的、量的なデータを積み上げ、解釈を行う自然科学を基盤とした領域である。根拠を持ったカウンセリングやセラピーにつなげるために客観的視点を持った心理学的アプローチの方法を身につけ、実践する経験を踏むことを目標とする。

「心理学Ⅱ」では、標準化された検査のデータを利用し、心理検査の理論や構成を知ること・理解することを通して心理学における客観的視点の重要性を認識することを目標とする。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	ウエクスラー系心理検査を例として心理の量的解釈を学ぶための基本用語を知る ウエクスラー系心理検査を例として心理の量的解釈を学ぶためのマニュアルを参照する	講義	特になし
2	ウエクスラー系心理検査Aを例に評価—結果を確認する(1)	GW・講義	予習・復習
3	ウエクスラー系心理検査Aを例に評価—結果を確認する(2)	GW・講義	予習・復習
4	ウエクスラー系心理検査Aを例に評価—結果を確認する(3)	GW・講義	予習・復習
5	ウエクスラー系心理検査Aを例に評価—結果を確認する(4)	GW・講義	予習・復習
6	ウエクスラー系心理検査Aを例に評価—結果を確認する(5)	GW・講義	予習・復習
7	結果の解釈に向けた基礎的な知識を知る(1)	GW・講義	予習・復習
8	結果の解釈に向けた基礎的な知識を知る(2)	GW・講義	予習・復習
9	心理検査Bを例に評価—結果を確認する(1)	GW・講義	予習・復習
10	心理検査Bを例に評価—結果を確認する(2)	GW・講義	予習・復習
11	心理検査Bを例に評価—結果を確認する(3)	GW・講義	予習・復習
12	心理検査Bを例に評価—結果を確認する(4)	GW・講義	予習・復習
13	結果の解釈に向けた基礎的な知識を知る(3)	GW・講義	予習・復習
14	結果の解釈に向けた基礎的な知識を知る(4)	GW・講義	予習・復習
15	まとめと補足	GW・講義	

## ■受講上の注意

積極的参加および予習・復習が必要である。

## ■成績評価の方法

提出物に対するルーブリック評価／合計60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

配付資料

## ■備考

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士、公認心理師として実務経験のある教員による授業である。

# 心理学Ⅲ

講師:福元 恵美

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:3学年

必修選択:必修

## ■科目目標

心理学は主観的な評価によるカウンセリングやセラピーが行われるという一般的な印象があるが、実際には実験心理学で培われた客観的、量的なデータを積み上げ、解釈を行う自然科学を基盤とした領域である。心理学Ⅱで経験した客観的視点とそれを活用した実践をさらに深めること、加えて分析・解釈の視点を経験することを目標とする。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	評価の目的、観点、手順、まとめ方について学ぶ。 基本情報の収集と手順を説明できるようにする。	講義・グループワーク 講義内容を復習	
2	発達検査の概要を把握し、実施できるようになる。①	講義・グループワーク 講義内容を復習	
3	発達検査の概要を把握し、実施できるようになる。②	講義・グループワーク 講義内容を復習	
4	知能検査の概要を把握し、実施できるようになる。①	講義・グループワーク 講義内容を復習	
5	知能検査の概要を把握し、実施できるようになる。②	講義・グループワーク 講義内容を復習	
6	言語検査の概要を把握し、実施できるようになる。①	講義・グループワーク 講義内容を復習	
7	言語検査の概要を把握し、実施できるようになる。②	講義・グループワーク 講義内容を復習	
8	言語検査の概要を把握し、実施できるようになる。③	講義・グループワーク 講義内容を復習	
9	言語検査の概要を把握し、実施できるようになる。④	講義・グループワーク 講義内容を復習	
10	言語検査の概要を把握し、実施できるようになる。⑤	講義・グループワーク 講義内容を復習	
11	学習・認知検査の概要を把握し、実施できるようになる。①	講義・グループワーク 講義内容を復習	
12	学習・認知検査の概要を把握し、実施できるようになる。②	講義・グループワーク 講義内容を復習	
13	症例を用いて評価を行い、問題点抽出を行う。①	講義・グループワーク 講義内容を復習	
14	症例を用いて評価を行い、問題点抽出を行う。②	講義・グループワーク 講義内容を復習	
15	単位認定試験・解説	試験・まとめ	各種検査に関する試験とレポートを作成する。

## ■受講上の注意

積極的参加および予習・復習が必要である。  
講義の進行状況により上記の内容や順番を変更することがある。

## ■成績評価の方法

・各種検査に関する試験を実施。  
・レポート作成。  
※試験結果とレポートの点数の合算で本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

配布資料

## ■備考

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士、公認心理師として実務経験のある教員による授業である。

# 英語 I

講師: 飯田 敏博

単位数: 2単位

時間数: 30時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

## ■科目目標

人気企業の社会的な取り組みを英語で学ぶ。授業の各回、Small Chat, Words and Phrases, Dictation, Pre-Knowledge, Speed Reading, Dialog, Expressionの構成で進める。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	7-ELEVEN (英語の4技能をバランスよく学ぶ)	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
2	LINE (英語の4技能をバランスよく学ぶ)	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
3	NISSIN FOODS (英語の4技能をバランスよく学ぶ)	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
4	McDonald's (英語の4技能をバランスよく学ぶ)	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
5	TOYOTA (英語の4技能をバランスよく学ぶ)	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
6	STARBUCKS (英語の4技能をバランスよく学ぶ)	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
7	AEON (英語の4技能をバランスよく学ぶ)	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
8	NIKE (英語の4技能をバランスよく学ぶ)	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
9	MUJI (英語の4技能をバランスよく学ぶ)	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
10	Apple (英語の4技能をバランスよく学ぶ)	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
11	Rakuten Group (英語の4技能をバランスよく学ぶ)	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
12	Amazon (英語の4技能をバランスよく学ぶ)	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
13	IKEA (英語の4技能をバランスよく学ぶ)	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
14	Dyson (英語の4技能をバランスよく学ぶ)	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
15	まとめ・終講試験	筆記試験	

## ■受講上の注意

テキストの練習問題は必ず解いてくること。テキスト、英和辞典、あるいは電子辞書(英和・和英のほか英英辞典の機能がつかるとさらに良い)を必ず持参すること。

## ■成績評価の方法

試験(80%)、授業への参加態度(20%)  
本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

テキスト: Companies for Social Good(英語で学ぶ社会における企業の存在意義) 金星堂

## ■備考

資料のプリントは適宜配布する。

## ■実務経験

# 英語Ⅱ

講師:飯田 敏博

単位数:2単位

時間数:30時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

## ■科目目標

医療で使われる英語に親しむとともに、英語の4技能(聞き、話し、読み、書く)の基礎的な力を身に付けることができる。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	ポリオについて理解を深め、受診時の英語でのやりとりができる。	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
2	薬の処方箋について理解を深め、診察時の英語でのやりとりができる。	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
3	片頭痛や、気圧の変化などで生じる頭痛についての英語を理解できる。	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
4	薬について理解を深め、内科診察時の英語でのやりとりができる。	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
5	大腸癌に進行する可能性がある悪性のポリープについての理解を深める。	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
6	SARSについて理解を深め、気管支鏡を用いた検査に関わる表現を身につける。	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
7	復習テストで学習の理解度を測る。また、粘膜の潰瘍などについて学ぶ。	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
8	糖尿病のリスクについて英語での理解を深める。	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
9	動脈疾患について理解を深め、定期検査関連の表現を身につける。	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
10	アメリカにおける健康保険とホームドクターのやりとりを理解する。	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
11	アレルギー反応を抑える物質などについて理解する。	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
12	新型コロナ関連の英語表現やワクチンについての理解を深める。	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
13	内視鏡検査や胸やけなどについて理解を深め、関連表現を身につける。	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
14	中年期以降の身体的変化やホルモン治療について理解を深め、関連する英語表現を身につける。	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
15	まとめ・終講試験	筆記試験	

## ■受講上の注意

テキストの練習問題は必ず解いてくること。テキスト、英和辞典、あるいは電子辞書(英和・和英のほか英英辞典の機能がつくことさらに良い)を必ず持参すること。

## ■成績評価の方法

試験(80%)、授業への参加態度(20%)

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

テキスト:English for Medicine -Revised Edition-(医療・看護のためのやさしい総合英語 改訂版) 金星堂

## ■備考

資料のプリントは適宜配布する。

## ■実務経験

# 保健体育

講師:寺前 重幸、富安 恵子

単位数:2単位

時間数:20時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

## ■科目目標

バレーボール及びバスケットボールの基本的な動きを身につける。さらに、スポーツを通じて、コミュニケーション能力の向上やストレスの軽減を図り、日常生活の中で、運動をする習慣を身につける。また、健康について考え理解し、健康的な生活を送れるようになる。

健康はさまざまな要因の影響をうけているが、それらは、「人間の生物としての側面」「生活習慣」「環境」「保健・医療サービス」の4つに分けて考えることができる。

本講義では、保健・医療サービスの概要を知るとともに、疾病の予防や健康増進に関する保健師・看護師の具体的活動や役割について学習する。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	科目目標をしっかりと理解し、バレーボール及びbasketballのルールをしっかりと理解できる。	講義・実技	教室でガイダンスを行い、体育館へ移動するの で体育ができる服装に着替えてから、教室で待 機する
2	パス及びサーブができる(バレーボール)	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
3	ゲームでの一連の動きができる(バレーボール)	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
4	パス、ドリブル及びシュートができる(バスケットボール)	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
5	ゲームでの一連の動きができる(バスケットボール)	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
6	自分たちで競技を選び実施できる。(選択競技)	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
7	自分たちで競技を選び実施できる。(選択競技)	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
8	健康(健康・生活習慣病・食育・運動・休養・喫煙)について理解できる	講義	事前にプリントを配布するので、講義までに読ん でおく
9	健康(飲酒・薬物乱用・感染症・応急手当・心の健康)について理解できる	講義	事前にプリントを配布するので、講義までに読ん でおく
10	授業の総括及び終講試験	講義 筆記試験	
11	看護職とは何か、保健師、助産師、看護師の役割について	講義DVD	看護職についてのイメージをまとめてくる
12	様々な場における看護師の役割と具体的活動	講義DVD	講義資料を必ず持参する
13	保健所における保健師の役割と具体的活動	講義GW	GWの時は活発に意見を交わす
14	市町村における保健師の役割と具体的活動	講義GW	GWの時は活発に意見を交わす
15	事例を通して疾病の予防や健康増進に関しての保健師・看護師の役割と他職種との連携のあり方を考える 発表後レポート作成	GW試験	自分の意見をまとめて臨む

## ■受講上の注意

運動できる服装及び体育館用運動シューズを用意すること。忘れ物の無いようにし、規範意識を持ち、積極的に講義に臨むこと。配布する資料を忘れずに、講義内容はこまめに追記し、主体的に臨んでください。

## ■成績評価の方法

平常点(30%)、実技点(40%)、試験・課題レポート(30%)により、本試験、再試験ともに総合的に評価する

## ■テキスト参考書など

特になし

必要な場合は、適宜プリントを配布する

## ■備考

適宜、資料を配付

## ■実務経験

本科目の第11講以降は、看護師・保健師として実務経験のある教員による授業である。

# 医学総論

講師:山下 佐英、青山 公治

単位数:1単位

時間数:20時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

## ■科目目標

医療従事者にあつては、患者の健康事象はその患者を取り巻く生活要因と地域社会と密接に関わっているという視点をもつことが必要である。そのような意味で、将来、公衆衛生的素養をもった言語聴覚士として活躍するために必要な基礎的知識・技術および習慣・態度を身につけること。

そして、医学では、人間の健康について、さらに病気の原因やしきみ、症状、所見、身体構造の変化を明らかにした上で、病気と対峙する。医学とは、病気を乗り越えて健康を維持しようとする人間の知的活動であり、その医学に基づく行為が医療である。

本授業では、各章毎に解説を加え、豊富な学識を体得することを目標としている。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「健康と公衆衛生学」健康の概念と健康の決定因子を説明できる。公衆衛生学の目的とそれを達成するための方法を説明できる。	講義	配布資料、教科書、板書に基づき講義を進める。予習は教科書、復習は配付資料、板書記録および教科書を見返し整理すること
2	「保健統計」集団としての健康水準をはかる健康指標を列挙し、主な指標についてわが国の動向を説明できる。	講義	
3	「疫学」疫学という科学の目的を説明できる。病気の発症要因と結果という関連性及び因果性を検証する疫学研究の方法を説明できる。	講義	
4	「環境保健」健康はヒトと生活環境の諸要因との相互作用によって成立していることを具体的に説明できる。上下水道および廃棄物処理の法的整備について説明できる。	講義	
5	「疾病の予防」広義の予防医学の3段階のプロセスを説明できる。感染症の感染成立要因を説明できる。主な生活習慣病のリスク要因を列挙できる。	講義	
6	「母子保健」地域における母子保健活動の目的とその現状と対策を説明できる。	講義	
7	「産業保健」働く人々の保健活動の目的を説明できる。主な職業病を列挙できる。	講義	
8	健康について、また医学の歴史、医療の基本が理解できる。	講義	テキストの健康、医学の基本、医療の現場を読んてくる。
9	病気の基本、また診断と治療、予防について理解できる。	講義	テキストの病気の基本・分類、診断、治療、予防医療を読んてくる。
10	「終講試験とまとめ」	試験	

## ■受講上の注意

教科書、配付資料及び板書に基づき授業を進めるが、公衆衛生に関連する社会情報に日頃から関心を持ち、理解を深めること。

※講義順が前後することがある。

## ■成績評価の方法

終講試験

## ■テキスト参考書など

厚生省の指標「国民衛生の動向」(厚生労働統計協会)、公衆衛生学 社会・環境と健康 2024年版, 医歯薬出版

## ■備考

## ■実務経験

本科目は医師として実務経験のある教員による授業である。

# 医療倫理

講師:松尾 康弘

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

## ■科目目標

日本言語聴覚士協会における倫理綱領序文では「言語聴覚士は、自らの責任を自覚し、人類愛の精神のもと、全ての人々に奉仕する」と記されている。言語聴覚士は普遍的に他者を尊重し、自己研鑽を積み、対象者と社会に対して最善を尽くさなければならない。本科目では、臨床において、対象者の人生観や価値観を尊重し、本人のQOLの向上やwell-beingに寄与できる倫理観を得ることを目指す。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	人間の尊厳を考える	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
2	倫理4原則について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
3	対象者の自己決定を尊重することの意義について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
4	告知について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
5	身体拘束と行動コントロールの倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
6	守秘義務とその解除・個人情報保護について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
7	希少な医療資源の公正配分について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
8	終末期医療の倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
9	終末期医療(DNAR)の倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
10	生殖補助医療の倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
11	遺伝性疾患における倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
12	摂食・嚥下障害の倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
13	医療者-患者(対象者)関係について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
14	倫理コンサルテーションについて理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
15	試験・解説	試験・解説	

## ■受講上の注意

毎講義終了後、ワークシートを提出してもらいます。

## ■成績評価の方法

講義への参加態度(20%)・ワークシート提出(40%)・試験(40%)により総合的に評価し、本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

## ■備考

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士、公認心理師として実務経験のある教員による授業である。

# 人体の構造・機能・病態 I

講師:津山 新一郎

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

## ■科目目標

ヒトの身体の成り立ちを肉眼解剖学、顕微解剖学の視点から系統的に理解する。その理解には人体構成を物質レベルから細胞、器官、器官系の順に階層性に従い学習する。常に機能との関連性を念頭において形態学を基本としながら肉眼解剖レベルから顕微解剖レベル迄を理解・学習する。高校までの学習では解剖学という視点はない。高校までの課程で生物学を履修していない学生も混じるので解剖学の導入部から総論的部分、細胞学・組織学、そして全身の系、骨格系・筋系・脈管系・器官系の理解を目標とする。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	ヒトの身体の基本構成の理解: 身体の基本構成単位としての細胞、組織、器官系などのヒトの基本の構成が理解できる。細胞レベルでは細胞膜の構造、働きが理解できる。	講義と演習	人体の成り立ちにおける階層性の理解。予・復習と図・アトラス利用の必要性。
2	細胞の構造における細胞小器官の形態、働きが理解できる。ヒトの身体を構成する4大組織の成り立ちの理解 ① 上皮組織が理解できる。	講義と演習	細胞、組織、器官の構成、機能の理解。細胞種間、組織間の比較を行う。
3	組織の構成の続き。② 結合・支持組織、③ 筋組織、④ 神経組織が理解できる。	講義と演習	各組織の違いの意義づけ、人体における作用の理解をすすめる。
4	骨格系:概論 骨の構造、発生・成長、骨の連結が理解できる。全身の骨格 ① 頭頸部の骨格が理解できる。	講義と演習, group work	ヒトの骨格系の全体の把握を行う。骨格模型の利用。頭蓋の骨配列と血管、神経の分布の理解。頭蓋骨格模型のスケッチなどを活用。
5	全身の骨格 ② 体幹部の骨格が理解できる。③ 上・下肢の骨格の構成・作用が理解できる。	講義と演習	体幹、体肢における支柱としての骨格の意義づけが出来るようにする。
6	筋系:概論 筋の形・構造、作用が理解できる。全身の筋 ① 頭部および頸部の筋の働きが理解できる。	講義と演習, group work	運動器としての筋と骨格の関連性の理解、全身の筋と運動(関節)の関連性を把握する。
7	全身の筋 ② 体幹部の筋の働きが理解できる ③ 上肢、下肢の筋の動き、作用が理解できる。	講義と演習	運動器としての体肢の意味付けができるようにする。小テスト(これまでのまとめ)
8	脈管系:概論 血管の構造、肺循環と体循環が理解できる。血液・免疫系の構成が理解できる。	講義と演習, group work	ヒトの身体の循環系の生理的意義と循環系の成り立ちの理解。血液の動きの理解。
9	① 心臓 心臓の構造、働きが理解できる。	講義と演習	心臓の構成と機能の理解: 血圧、拍動のチェック。
10	体循環 ② 動脈系:脳、体幹、上肢・下肢の動脈系が理解できる。	講義と演習	全身の動脈の分布、意義の理解、脈拍の触れやすい場所での脈拍測定。
11	③ 静脈系、リンパ系、胎生循環の構成・働きが理解できる。	講義と演習	全身の動・静脈の機能と意義の理解。胎生循環と成人の循環の比較が出来るようにする。
12	泌尿・生殖器系: ① 尿の生成と働きが理解できる。腎臓の機能、尿路の構成が理解できる。② 男性生殖器の成り立ちが理解できる。精子形成の過程が理解できる。精路の構成と働きが理解できる。	講義と演習	尿の生成と生理機能の理解、排出過程(尿路)の理解。男性生殖器における精子形成過程の把握。機能と構造の関連付け。
13	③ 女性生殖器の構成、働きが理解できる。卵細胞と卵胞の形成・働きが理解できる。受精卵の子宮内における発育が理解できる。哺育器官乳腺の働きが理解できる。	講義と演習	女性生殖器における卵胞の発達と受精までの過程、受精卵の発達における子宮、胎盤、乳腺の関連付け。
14	内分泌系: 内分泌器の種類・構成、働き、存在場所が理解できる。内分泌器間の相互作用、フィードバック機構等が理解できる。	講義と演習	内分泌器は系統ではなく、ホルモンの働きは産生する器官、標的器官が明確である事の意義づけ、区別を明確にさせ理解する。
15	終講試験とまとめ		

## ■受講上の注意

解剖学は範囲が広い。内容をを要領よく、系統的に理解する。ばらばらな知識は役立たない。

人に対する尊厳を忘れない。

## ■成績評価の方法

中間試験30%、終講試験70%、平常点(受講態度)等を総合して行う。

## ■テキスト参考書など

教科書:言語聴覚士のための解剖・生理学Ⅰ小林靖著 医歯薬出版 参考資料:標準解剖学 坂井建雄著 医学書院

## ■備考

プリント資料:レジュメを用意するので目を通しておくこと。

## ■実務経験



# 人体の構造・機能・病態Ⅱ

講師: 笠井 聖仙

単位数: 1単位

時間数: 30時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

## ■科目目標

「人体の構造・機能・病態Ⅱ」を通して、高度に複雑化した人体の生存に必須の機能について学習するが、次のようなことを目標にして学習してほしい。

- 1 人体を構成する基本的な細胞や組織の機能について説明できる。DNAの異常における病態を説明できる。
- 2 約1日のリズムである概日リズムをそのメカニズムとリズム異常による疾病や医学における応用について説明できる。
- 3 身体が外界からの刺激を感知し応答する特殊感覚や神経系の基本的な機能について説明できる。
- 4 内分泌系が神経系と密接に関連してはたらき、人体のあらゆる細胞の活動を制御することを説明できる。内分泌系の異常による疾病を説明できる。
- 5 筋は身体の運動だけでなく、食物や尿などが消化器系や泌尿器系を運ばれるのに役立つことを説明できる。
- 6 終講義テストと講義

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	一般的な細胞の機能を理解し、細胞膜の主な機能を理解し説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
2	細胞内小器官や核の主な機能を説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
3	概日リズムが内因性のものであり、その具体的な例とメカニズムについて理解し説明できる	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
4	概日リズムが各種生理機能に見られ、疾病の発現に関与することを具体的な例をあげて理解し説明できる。また、概日リズムリズムの乱れにより胃腸障害、循環器障害、睡眠リズムの乱れが起こることを理解し説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
5	外界の刺激が特異的受容器により感知され、脳への投射に活動電位という信号で伝えられることを理解し説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
6	聴覚と平衡感覚受容機構を理解し説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
7	嗅覚・味覚の受容機構とそれらの社会的意義について説明できる。生きるための味覚、楽しむための味覚の違いについて説明できる。味覚障害はどのようなものがあるか、その治療法について理解し説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
8	生体の警告信号系としての痛みについて理解し説明できる。慢性痛発症機序について理解する。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
9	ホルモンであるバソプレシン、メラトニン、成長ホルモン、甲状腺ホルモンの分泌機序とその作用について説明できる。これらホルモンの分泌異常で起こる病態について説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
10	ホルモンである副腎皮質ホルモン、副腎髄質ホルモンの分泌機序とその作用について理解し説明できる。副腎皮質ホルモンの分泌以上によって起こる病態について説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
11	自律神経系の働きについて説明できる。特に、内臓を支配する迷走神経(副交感神経)の働きを理解する。自律神経系とホルモン分泌との関連について説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
12	3種の筋組織の基本的な機能と骨格筋フィラメントの収縮に対する役割を説明できる。反射の種類と反射弓の構成要素をあげ説明できる。自律神経系による平滑筋の調節について理解し説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
13	筋肉の神経支配について説明できる。筋肉を支配する運動神経が乳幼児の時期にシナプス回路網が一旦増加し、成長するにつれて脱落する。その意味合いについて理解し説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
14	心臓の神経支配と体液支配および心電図波形発生メカニズムについて説明できる	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
15	終講義試験とまとめ	筆記試験	

## ■受講上の注意

教科書を基にしたテキストを配布し、自学自習できるように問題集も配布する。授業では、図や表をもとにパワーポイントで解説するが、その内容を理解するために、配布したプリントに事前に目を通し、授業で得た知識をもとに、さらに復習問題や確認事項にも積極的に取り組んでほしい。

## ■成績評価の方法

本試験・再試験(85%)・平常点(15%)。平常点は出席と受講態度をもって評価する

## ■テキスト参考書など

テキスト:「人体の構造と機能」第4版 エレイン・N・マリープ著 林正 健二ほか訳、医学書院 参考書:「よくわかる生理学の基本としくみ」當瀬規嗣著 秀和システムほか

## ■備考

授業内容の要約プリントは前もって配布する。

## ■実務経験

# 医科学 I

講師:外園 寿典、徳永 弘樹、山下 勝、大堀 純一郎、永野 広海、宮下 圭一、川島 雅樹、小牧 祥太郎、戌亥 啓一

単位数:2単位

時間数:40時間

授業学年:2学年

必修選択:必修

## ■科目目標

本講義では、臨床医学分野の中でも「耳鼻咽喉科学」「形成外科学」の各医学分野について深めた内容を展開していく。各分野とも言語聴覚療法の専門領域に関わる重要な分野である。各分野の詳細は別紙配付資料を参照し講義に臨む。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	形成外科学の概要について理解を深める。	講義	配付資料の要点を整理する。
2	形成外科の基本的な手術法について理解を深める。	講義	配付資料の要点を整理する。
3	腫瘍に対する治療について理解を深める。	講義	配付資料の要点を整理する。
4	顔面・四肢外傷、美容について理解を深める。	講義	配付資料の要点を整理する。
5	形成外科領域における言語療法について理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
6	口唇口蓋裂の言語的特徴について理解を深める。	講義	配付資料の要点を整理する。
7	口唇口蓋裂の言語評価について理解を深める。	講義	配付資料の要点を整理する。
8	中間試験(形成外科学分野)	試験	
9	耳科学 聴覚障害について	講義	配付資料の要点を整理する。
10	耳科学 耳疾患 めまい・平衡障害 各論	講義	配付資料の要点を整理する。
11	鼻科学 鼻疾患	講義	配付資料の要点を整理する。
12	気管食道科学 嚥下障害	講義	配付資料の要点を整理する。
13	喉頭科学 喉頭領域①	講義	配付資料の要点を整理する。
14	喉頭科学 喉頭領域②	講義	配付資料の要点を整理する。
15	喉頭科学 喉頭領域③	講義	配付資料の要点を整理する。
16	耳鼻咽喉科学検査①	講義・演習	配付資料の要点を整理する。
17	耳鼻咽喉科学検査②	講義・演習	配付資料の要点を整理する。
18	耳鼻咽喉科学検査③	講義・演習	配付資料の要点を整理する。
19	耳鼻咽喉科学検査④	講義・演習	配付資料の要点を整理する。
20	試験(耳鼻咽喉科学分野)	試験	

■ 受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■ 成績評価の方法

100点満点として60点未満に再試験を実施する。

■ テキスト参考書など

適宜資料を配付する。

病気が見える「耳鼻咽喉科」vol.13, メディックメディア

■ 備考

■ 実務経験

本科目は医師、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 医学Ⅱ

講師: 廣畑 俊和、岡田 洋一、石田 和久、迫田 和也、他

単位数: 2単位

時間数: 40時間

授業学年: 2学年

必修選択: 必修

## ■ 科目目標

本講義では、臨床医学分野の中でも「リハビリテーション医学」「小児科学」「神経内科学」「精神医学」「薬理学」の各医学分野について深めた内容を展開していく。各分野とも言語聴覚療法の専門領域に関わる重要な分野である。各分野の詳細は別紙配付資料を参照し講義に臨む。

## ■ 科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	リハビリテーション医学(1) 摂食嚥下障害の処方、原因疾患と評価治療 (1)	講義	
2	リハビリテーション医学(2) 摂食嚥下障害の処方、原因疾患と評価治療 (2)	講義	
3	リハビリテーション医学(3) 高次脳機能障害の処方、原因疾患と評価治療 (1)	講義	
4	リハビリテーション医学(4) 高次脳機能障害の処方、原因疾患と評価治療 (2)	講義	
5	エコーについて理解を深める。	講義・演習	画像診断(超音波)の特性を予習しておく。
6	画像検査の概要を知る。	講義	画像診断の基本的な考え方を学習しておく。 画像診断(MRI:磁気共鳴)の基本的な考え方を学習しておく。
7	精神医学の概念、精神科リハビリテーションについて理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
8	精神科リハビリテーションのプロセスと技法について理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
9	うつ病、双極性障害、トラウマとPTSDについて理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
10	境界性人格障害、統合失調症、アルコール依存症、嗜好問題について理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
11	精神医学分野中間試験とまとめ	試験	
12	①実際の臨床現場で、処方薬から目的や疾患を把握できるよう、検索方法や添付文書の見方を理解し、実際の処方で活用してみる。 ②薬の多様な用法について理解を深めるとともに、食品との飲み合わせや吸収に影響を及ぼす相互作用、薬物依存等を考える。	講義 GW IT 利用検索 医 薬品集 処方 演習	・第1回薬理学から実施 ・インターネット活用 ・医薬品集、アプリ参照 ・過去の国試をもとに習得状況を確認する
13	①脳の伝達系異常と神経疾患について、心身症、うつ病、パーキンソン病、統合失調症等の病態と薬物療法を理解し、副作用を考える。 ②脳卒中の急性期や回復期、慢性期の薬物療法を学び、その作用から言語聴覚療法への影響を考える。	講義・演習 IT利用検索 医薬品集	・第2回薬理学を一読しておく ・医薬品集、アプリ参照 ・過去の国試をもとに習得状況を確認する
14	認知症初期の病変部位による分類をもとに、臨床で遭遇する特徴的症狀を理解し、処方される薬剤の作用や副作用を学ぶ。その他、てんかんやせん妄など知っておきたい疾患に処方される薬剤について、知識を深める。	講義・演習 IT利用検索 医薬品集	・第3回薬理学を一読しておく ・医薬品集、アプリ参照 ・過去の国試をもとに習得状況を確認する
15	循環器系の疾患に対応するために、心不全、不整脈、狭心症、高血圧、血栓性疾患等の病態を心臓および循環器系を図解化して理解し、治療薬の種類と作用機序、副作用を系統的に学ぶ。	講義・演習 IT利用検索 医薬品集	・第4回薬理学を一読しておく ・医薬品集、アプリ参照 ・過去の国試をもとに習得状況を確認する
16	①注射剤を理解すべく、細胞の機能や電解質、糖、アミノ酸などの役割を理解し、臨床でよく見かける点滴製剤の特徴を学ぶ。高血糖や腎機能低下時の薬物療法への理解も深める。よく利用されるサプリメントについても確認する。 ②高齢者に多い泌尿器障害や排便困難、消化管障害等について、治療薬の種類と作用機序、副作用を考える	講義・演習 IT利用検索 医薬品集	・第5回薬理学を一読しておく ・ドラッグストア等で事前にサプリメントを見てみる ・インターネット活用
17	①骨粗鬆症について、骨芽細胞や破骨細胞の機能とモデリングを理解し、治療薬の種類と作用機序、副作用を学ぶ。 ②免疫系の疾患への理解を深めるべく、生体防御機構を理解し、アレルギー用剤、気管支喘息用剤、抗菌剤・抗ウイルス剤、関節リウマチ用剤に加え、抗がん剤についても理解を深める。	講義・演習 IT利用検索 医薬品集	・第6回薬理学を一読しておく ・医薬品集、アプリ参照 ・過去の国試をもとに習得状況を確認する
18	「痛み」について、伝達経路を図解化して理解し、今回までに学んだ薬の組み合わせ効果、さらにはオピオイド・非オピオイド鎮痛薬等について理解を深める。	講義・演習 IT利用検索 医薬品集	・第7回薬理学を一読しておく ・医薬品集、アプリ参照 ・過去の国試をもとに習得状況を確認する
19	薬理学分野試験とまとめ	試験	講義に使用した医薬品集およびアプリは利用可
20	神経難病について理解を深める。 発達障害について理解する。 障害と障害児・療育について理解する。	講義・まとめ	

## ■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

私語は慎む。なお、講義中の質問および終了後の質問は積極的に行ってほしい。講義の予習とともに学んだ方法は実践してみる。講義で使用するオリジナルテキストを忘れないようにする。また、図解し演習する機会もあるので、各自で記録可能なノートなどを準備する。主体的に講義に臨むこと。

## ■成績評価の方法

精神医学分野:各講義回後のレポートおよび試験による。

薬理学分野:試験(90%)・授業への参加態度(10%)により総合的に評価する。試験は筆記にて行い、その結果を最重要視するが、質問等を通じた講義への積極的な参加など受講態度なども加味する。

その他分野含め:本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

適宜資料を配付する。以下の参考書は分野ごとに予習・持参・使用すること。

適宜資料を配付する。以下の参考書は分野ごとに予習・持参・使用すること。

病気が見える「脳と神経」vol.7, メディックメディア

心の病気って何だろう?, 平凡社

薬理学分野:テキスト:過去5年間の国家試験問題をもとに作成したオリジナルテキストおよび医薬品集を利用。また、IT活用として正確かつ最新の薬剤情報を取得できるアプリも利用する。毎回ごとの学びは最近の国家試験問題を解くことで習得したこととする。

## ■備考

薬理学分野:上記のオリジナルテキストおよび医薬品集は事前配布する。講義にはインターネット環境のパソコン1台とプロジェクターを準備。インターネットの検索サイト(pmda、薬価サーチ2023 他)の閲覧およびテキストを投影する。App Store・Android無料アプリ「ヤクチエ添付文書」の活用と機能は講義中に説明する。

## ■実務経験

本科目は医師、精神保健福祉士、薬剤師、診療放射線技師として実務経験のある教員による授業である。

# 医科学Ⅲ

講師:吉家 清貴

単位数:2単位

時間数:40時間

授業学年:2学年

必修選択:必修

## ■科目目標

内科学は、すべての臨床医学の基本であり、疾病の原因・誘因、症状、診断、治療、予防について学ぶ。内容が多岐にわたるので、必要最低限の疾患について講義、症例を供覧するが、自主的により広く、より深く学ぶ姿勢が大切である。医療従事者が理解しておくべき疾患について、患者からの質問があった場合に、言語療法士として簡明に説明できる能力を獲得することを目標とする。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	病理学 退行性変性と進行性変性、壊死とアポトーシス	講義	
2	病理学 創傷治癒、腫瘍	講義	
3	神経系疾患 神経機能の局在と病変	講義	神経系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
4	神経系疾患 認知症	講義	
5	神経系疾患 脳血管障害、神経変性疾患	講義	
6	神経系疾患 神経脱髄性疾患、運動ニューロン障害、筋無力症	講義	
7	循環器疾患1 検査法、狭心症、心筋梗塞、心臓弁膜症、不整脈	講義	循環系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
8	循環器疾患2 動脈硬化症、動脈瘤、下肢深部静脈血栓症、高血圧	講義	
9	呼吸器疾患1 検査法、副鼻腔炎、喉頭炎、気管支炎、気管支喘息	講義	呼吸器系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
10	呼吸器疾患2 慢性閉塞性肺疾患、肺気腫、呼吸異常、胸膜疾患	講義	
11	血液・造血器疾患 検査法、貧血と治療、白血病、悪性リンパ腫、出血傾向	講義	血液系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
12	免疫と免疫異常 免疫機能と炎症、アレルギー性疾患、膠原病	講義	免疫系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
13	消化器疾患 検査法、口腔、食道、胃、十二指腸、小腸、大腸の疾患、痔瘻	講義	消化器系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
14	代謝疾患 糖尿病、脂質代謝異常、メタボリックシンドローム、痛風	講義	代謝系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
15	泌尿器疾患 検査法、腎炎、腎不全、尿管結石、膀胱疾患	講義	泌尿器系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
16	内分泌疾患 検査法、脳下垂体疾患、各内分泌機能亢進・低下症	講義	内分泌系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
17	感染症 感染性微生物、各臓器感染症	講義	免疫系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
18	まとめ	講義	
19	国家試験過去問題(各講義時間にミニテストとして紹介)のまとめ	講義	
20	終講試験	筆記試験	

#### ■受講上の注意

前もって講義プリントを配布するので、講義する範囲を一読しておくこと。また、関連臓器系の解剖・生理機能を復習しておくこと。  
講義初めに前回の講義内容を復習する時間を設け、ミニテストを実施する。  
自宅で復習することが大切です。わからないことがあれば講義後に質問してください。

#### ■成績評価の方法

ミニテスト10%、最終試験90%

#### ■テキスト参考書など

内科学 最新版(標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野) 著者:奈良 勲、出版社:医学書院

#### ■備考

書画カメラを用いて板書を映写する。板書内容はホームページから pdf ファイルとしてダウンロードできるようにする。

#### ■実務経験

本科目は医師として実務経験のある教員による授業である。

# 医科学Ⅳ

講師:専任教員、濱川 孝二

単位数:2単位

時間数:60時間

授業学年:3学年

必修選択:必修

## ■科目目標

本講義では「医科学Ⅰ～Ⅲ」で学習した医学専門分野について、それらとともに活動・協働する「看護学」「栄養学」「摂食嚥下」といった各分野の専門的知識および関連について各分野の専門家により講義が行われる。

各分野においては、それぞれのアプローチに基づき病気(疾患)に対する医学的評価や治療・ケアがなされるため、関連疾患やその領域については改めて専門的な視点で講義が行われることになる。受講に際してはこれまで学んだ「小児科」「神経内科・脳神経外科」「内科」「リハビリテーション医学」「耳鼻咽喉科学」「形成外科学」「精神医学」については特に復習をしてのぞみ、系統的な理解につなげることが重要である。 ※講義構成:「看護学第1～4回」「栄養学第5～19回」「摂食嚥下20～34回」

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	看護の機能と役割について理解する。	講義、DVD、GW	看護師の業務について学び、対象への主な関わりについて考える。
2	看護の実践方法について理解できる(バイタルサイン測定法・吸引法・フィジカルアセスメント他)	講義、演習	看護の実践方法について学び、自己の実践力の向上に努める。
3	看護の実践方法について理解できる(バイタルサイン測定法・吸引法・フィジカルアセスメント他)	講義 演習	看護の実践方法について学び、自己の実践力の向上に努める。
4	看護の実践方法について理解できる(バイタルサイン測定法・吸引法・フィジカルアセスメント他)	講義 演習	看護の実践方法について学び、自己の実践力の向上に努める。
5	リハビリテーションと栄養の関係性	講義・演習	実習での経験をふまえ、リハビリテーションと栄養の関係性について説明できる。
6	リハビリテーション栄養チームにおけるSTの役割	講義・演習	NST・栄養法について説明できる。
7	5大栄養素	講義・演習	自身の食事をふまえ、5大栄養素について説明できる。
8	栄養管理①(低栄養)	講義・演習	原因・定義を理解し、低栄養について説明できる。
9	栄養管理②(サルコペニア・フレイル)	講義・演習	サルコペニア・フレイルについて説明できる。
10	・「消化器系の解剖の復習」と「便と栄養の関係」について学ぶ。 ・血液データの見方について学ぶ。	講義・グループワーク	グループワークでは積極的に活動を行う。
11	栄養管理③(嚥下調整食)	講義・演習	実食することで得た体験をふまえ、嚥下調整食の現状や課題について具体的に述べるができる。
12	栄養評価①(アセスメント)	講義・演習	栄養評価法を理解する。
13	栄養評価②(エネルギー消費量・エネルギー摂取量)	講義・演習	エネルギー消費量・エネルギー摂取量を計算し、自己管理に繋げる。
14	グループワーク①(テーマの決定)	講義・演習	グループで協力して課題に取り組む。
15	グループワーク②(資料の作成)	講義・演習	グループで協力して課題に取り組む。
16	グループワーク③(資料の作成)	講義・演習	グループで協力して課題に取り組む。
17	プレゼンテーション	講義・演習	グループで協力して課題に取り組む。
18	栄養評価③(身体計測・栄養評価)	講義・演習	自身を評価し今後の自己管理に繋げるとともに、臨床で活かす方法について考える。
19	栄養評価④(症例検討)	講義・演習	事例をふまえ評価の流れとポイントについて説明できる。
20	摂食嚥下障害患者への評価手順について復習を行う。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。 3学年次の講義である「嚥下障害学Ⅱ」の内容について十分復習を行っておくこと。



21	訓練介入における運動理論等を知り、訓練立案の考え方を学ぶ。	講義・演習 講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
22	間接嚥下訓練について学ぶ(口腔ケア、サーマルスティミュレーション、皮膚のアイスマッサージ、嚥下体操等)。	講義・演習 講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
23	間接嚥下訓練について学ぶ(呼吸訓練、頭部の可動域訓練、頸部挙上訓練、発声訓練等)。	講義・演習 講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
24	間接嚥下訓練について学ぶ(鼻咽腔閉鎖機能訓練、口腔構音器官訓練、バルーン訓練、構音訓練、電気刺激訓練等)。	講義・演習 講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
25	直接嚥下訓練について学ぶ(姿勢調整、環境調整、嚥下誘発訓練、K-point刺激、スライス法、息こらえ嚥下、努力嚥下、メンデルソン法)。	講義・演習 講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
26	嚥下障害における代償法について学ぶ(姿勢の調整、頭位の調整(頸部屈曲・回旋)、一側嚥下、交互嚥下、一口量の調整、複数回嚥下等)。	講義・演習 講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
27	嚥下障害患者の代償法における嚥下調整食について学ぶ。	講義・演習 講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
28	模擬症例を用いて、食事の際の観察視点や問題点抽出を学ぶ。	講義・演習 講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
29	頭頸部腫瘍により生じる嚥下障害へのリハビリ介入について理解する。また、歯科補綴的治療、再建術について学ぶ。	講義・演習 講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
30	摂食嚥下障害の外科治療について学ぶ(誤嚥防止術、嚥下機能改善術)。	講義・演習 講義とグループワークを適宜切り替えて行う。

### ■ 受講上の注意

私語は慎む。なお、講義中の質問および終了後の質問は積極的に行ってほしい。講義の予習とともに学んだ方法は実践してみる。講義で使用するオリジナルテキストを忘れないようにする。また、図解し演習する機会もあるので、各自で記録可能なノートなどを準備する。主体的に講義に臨むこと。

### ■ 成績評価の方法

テキスト: 過去5年間の国家試験問題をもとに作成したオリジナルテキストおよび医薬品集を利用。各講義ごとに要点をまとめ、知識を確認できる小テストも実施する。

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

### ■ テキスト参考書など

- ・薬理学講義では、「ビジュアルノート(Medic Media)」、「(鍋島・井上編集: 図解薬理学, 南山堂)等を事前配布する。
- ・栄養学講義では、「PT・OT・STのためのリハビリテーション栄養 基礎からリハ栄養ケアプロセスまで 第3版」, 医歯薬出版
- ・摂食嚥下講義では、「言語聴覚士のための摂食・嚥下障害学」, 医歯薬出版株式会社

### ■ 備考

薬理学講義にはインターネット環境のパソコン1台とプロジェクターを準備。インターネットの 検索サイト(pmda、薬価2017 他)の閲覧およびテキストを投影する。 ・App store・Android無料アプリ「ヤクチエ添付文書」は薬理講義中に説明する。

### ■ 実務経験

本科目は看護師、薬剤師、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 歯科学(歯科口腔外科学)

講師:杉原 一正

単位数:1単位

時間数:20時間

授業学年:2学年

必修選択:必修

## ■科目目標

構音、咀嚼、摂食嚥下の障害と関係のある歯科・口腔外科的疾患(う蝕、歯周病、口唇裂・口蓋裂、顎変形症、口腔腫瘍、嚢胞、顎骨骨折、歯性感染症、口腔粘膜疾患など)の特徴と治療法について具体的に述べることができ、臨床の現場で言語聴覚士として口腔外科学の知識と技能を治療のエビデンスに活用する能力を養う。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	臨床歯科医学の全体像と特徴について説明できる。	講義	小テストの実施
2	歯科疾患(う蝕と歯周病)の成り立ちと治療法について説明できる。	講義	小テストの実施
3	口腔領域の先天異常(口唇裂・口蓋裂など)の特徴と治療法について説明できる	講義	小テストの実施
4	口腔領域の外傷(顎骨骨折など)と嚢胞(顎骨内および軟組織内に発生する)の特徴と治療法について説明できる	講義	小テストの実施
5	口腔領域の良性腫瘍と悪性腫瘍の特徴と治療法について説明できる	講義	小テストの実施
6	口腔領域の感染症の特徴と治療法について説明できる	講義	小テストの実施
7	口腔粘膜疾患、唾液腺疾患、顎関節疾患、神経疾患の特徴と治療法について説明できる	講義	小テストの実施
8	咀嚼障害の特徴、評価法、治療法について説明できる	講義	小テストの実施
9	摂食嚥下障害のメカニズム、検査法、治療法について説明できる 器質性構音障害と口腔疾患による構音障害の特徴、評価法、治療法について説明できる	講義	小テストの実施
10	終講試験	試験	

## ■受講上の注意

講義の予習(前もって教科書を読んでおく)をして、主体的授業に望むこと。

## ■成績評価の方法

終講試験(80%)、小テスト(20%)

※本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

『言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学—器質性構音障害』第2版  
医歯薬出版

## ■備考

資料プリントは毎回配布する。

## ■実務経験

本科目は歯科医師として実務経験のある教員による授業である。

# 音声・言語・聴覚医学 I

講師:津山 新一郎

単位数:2単位

時間数:30時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

## ■科目目標

人体の構造・機能・病態 I での解剖学の全体的な理解を深めるといふより、言語聴覚療法士として関係のある解剖の内容に限定して理解を深めることを目指す。项目的には以下のような事項の理解に注力する。細胞については細胞膜表面の構造と機能との関連について。神経系については中枢神経と末梢神経の関係について特に言語活動との関連で脳神経 VIII, IX, X の理解を深める。伝音系、感音系における聴覚器の構造の理解。咽頭・喉頭の全体的成り立ちと声帯の構造、動作機能の働き等の理解を深める。授業の進め方については受け身で講義を聞くのではなく積極的に参加することを目指す事を目的として、具体的には教室全員をグループ分けし、テーマを決めて各自で調べ、発表を行う「Group Working」と講義を並行する。さらに各項目での要点・重点の抽出、何がポイントになるか提示を行わせる。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	ヒト発生の概略:胚発生、器官発生、咽頭弓(鰓弓)などを理解できる。特に咽頭弓由来の器官について理解できる。	講義と演習	ヒト発生期間の胚期、胎児期などの理解。器官形成における過程などの理解を深める。
2	消化器系:口腔、消化管(食道、胃、小腸、大腸)、消化腺(肝臓、胆嚢、膵臓)。器官全体の総合的な理解を図る。特に上部消化管の構造と肝・胆・膵臓についての理解ができる。	講義と演習	消化管と消化腺に分けて系統立てて栄養摂取との関連で理解。
3	嚥下について:嚥下に関わる食道までの器官である舌、咽頭、喉頭の解剖的理解と、嚥下における働きと機能について解剖学的に理解できる。 グループワーク①	講義と演習、group work	食塊を取り込む際の咽頭での振り分け機構と支配神経の関係の理解。
4	呼吸器系:鼻腔、気道、呼吸部における系の全体的構成が理解できる。咽頭・喉頭部の構成、気管支から肺胞迄を理解できる。	講義と演習	上気道・下気道、気管支の分岐、肺胞におけるガス交換の意義と構造、生理学との関連性。
5	発声について:咽頭から喉頭まで構造が理解できる。声門部分の構成、発声時の声帯の動き、声門裂の動きに関わる筋が理解できる。 グループワーク②	講義と演習、group work	咽頭と喉頭の成り立ちの詳細。発声器としての声門の構造と筋の運動、支配神経の関連性。
6	神経系:概論、神経系の成り立ちが理解できる。ニューロンの成り立ちが理解できる。神経系の機能としての運動・知覚ニューロンが理解できる。	講義と演習	神経系の機能と刺激の伝達に関して細胞レベルとニューロンの関連付け。
7	中枢神経:脳の構成、各脳の機能、伝導路について理解できる。脊髄の成り立ち、機能が理解できる。□ グループワーク③	講義と演習、group work	脳の構成と機能の局在の関連性についての理解をすすめる。
8	末梢神経:脳神経12対の中でも特にV, VII, VIII, IX, X, XIIの分布、機能について理解出来る。	講義と演習	末梢神経の中でも咽頭・喉頭における作用と聴覚・発声に関連した神経の働きを系統立てる。
9	末梢神経:脊髄神経の中でも特に呼吸筋支配、上・下肢の運動支配神経、デルマトームの理解ができる。 中間テスト	講義と演習	筋運動と皮膚知覚を脊髄分節として理解する。
10	感覚器系 聴覚器の成り立ちが理解できる。伝音系である外耳から中耳までが理解できる。	講義と演習	聴覚器(伝音系)における音のとらえ方を順序だてて明確化する。
11	感音系である内耳の成り立ち、コルチ器の構造、聴覚伝導路が理解できる。□ グループワーク④	講義と演習、group work	蝸牛管 コルチ器における音波振動の神経系における電気信号に変える機構の理解。
12	平衡覚器 平衡覚の概念が理解できる。半規管の成り立ちと働き、球形嚢・卵形嚢における平衡斑の成り立ちと働きが理解できる。□ グループワーク⑤	講義と演習、group work	平衡覚における知覚を運動方向覚、重力方向覚の成分捕捉として区別を明確にする。
13	視覚器、味覚・嗅覚器の構成が理解できる。特に感覚細胞の構成が理解できる。視覚路、味覚・嗅覚路が理解できる。 グループワーク⑥	講義と演習、group work	視覚、味覚、嗅覚などの感覚器の働き作用を区別する。
14	言語・聴覚系における解剖学からみた感覚器と神経系の総括	講義と演習	発音器官、構音器官と呼吸・消化器官の関連を神経、筋運動と関連づける。
15	終了試験とまとめ		

## ■受講上の注意

膨大な情報を要領よく、系統的に理解する。ばらばらな知識は役立たない。  
人に対する尊厳を忘れない。

## ■成績評価の方法

中間試験30%、終講試験70%、平常点(受講態度)等を総合して行う。

## ■テキスト参考書など

教科書:言語聴覚士のための解剖・生理学□小林靖著 医歯薬出版 参考資料:標準解剖学 坂井建雄著 医学書院。

## ■備考

プリント資料:レジュメを用意するので目を通しておくこと。

## ■実務経験

# 音声・言語・聴覚医学Ⅱ

講師:小牧 祥太郎

単位数:2単位

時間数:30時間

授業学年:2学年

必修選択:必修

## ■科目目標

言語聴覚士にとって重要となる音声・言語・聴覚医学に必要な神経の構造や機能、また病態について理解を深め、言語聴覚障害領域における専門内容を理解する為の基礎を学ぶ。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	神経細胞(灰白質)と神経線維(白質)の違いを理解し、神経の伝達方法(機序や神経伝達物質等)を学ぶ。また、大脳を中心に神経系の概要を把握し、簡潔に他者へ説明できるようになる。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
2	中枢神経系(大脳・辺縁系・基底核・間脳・脳幹・小脳・脊髄)の機能について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
3	中枢神経系を灌流する循環系(血液循環・髄液循環)について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
4	神経系の問題により生じる全般的な症状(意識障害・頭痛)について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
5	脳血管障害全般と、虚血性疾患(脳梗塞(血栓・塞栓))について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
6	脳血管障害の出血性疾患(脳出血・くも膜下出血)について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
7	脳血管障害後の合併症(頭蓋内圧症状、水頭症など)について学ぶ。 脳血管病変(動静脈奇形、Willis動脈輪閉塞症)、脳腫瘍、頭部外傷について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
8	頭部外傷、認知症関連疾患について学ぶ。 運動系の概要と運動障害について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
9	末梢神経系疾患(ワーレンベルグ症候群、ギランバレー症候群等)について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
10	末梢神経系疾患(重症筋無力症、筋ジストロフィー等)について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
11	錐体外路系疾患(大脳基底核関連:パーキンソン病、ハンチントン舞蹈病。小脳路関連:脊髄小脳変性症、多系統萎縮症など)について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
12	末梢神経系として脳神経系の特徴と各神経の違いについて学ぶ(概要)。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
13	末梢神経系として脳神経系の特徴と各神経の違いについて学ぶ(検査)。	講義・演習	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
14	主に脳画像の参照より神経疾患の復習(言語聴覚士が臨床で担当しやすい疾患を主に)を行う。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
15	試験・解説(あるいはまとめ)	試験・講義	

## ■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合もある。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

病気が見える vol.7 第2版 発行:メディックメディア

## ■備考

講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 認知・学習心理学

講師:松尾 康弘

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

## ■科目目標

認知心理学は人の認知処理に関して情報処理モデル(認知モデル)を立てて、実験により検証することを特徴とする。また、学習とは、経験の結果として生じたその後の行動の変容をさす。本科目は、人の認知処理メカニズムや学習理論について理解することを目標とする。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「感覚」・「知覚」・「認知」について理解することができる①	講義	
2	「感覚」・「知覚」・「認知」について理解することができる②	講義・TBL	
3	「感覚」・「知覚」・「認知」について理解することができる③	講義・TBL	
4	「注意」について理解することができる	講義・TBL	
5	情動の諸側面と理論について理解することができる	講義・TBL	
6	動機付けについて理解することができる	講義・TBL	
7	記憶のしくみについて理解することができる	講義・TBL	
8	記憶の分類について理解することができる	講義・TBL	
9	学習(レスポンド条件付け)について理解することができる	講義・TBL	
10	学習(オペラント条件付け)について理解することができる	講義・TBL	
11	言語のしくみについて理解することができる	講義・TBL	
12	言語の障害について理解することができる	講義・TBL	
13	概念のしくみについて理解することができる	講義・TBL	
14	思考と推理について理解することができる	講義・TBL	
15	試験および解説	講義	

## ■受講上の注意

### ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

### ■テキスト参考書など

内山靖ら編:リハベシク心理学・臨床心理学, 医歯薬出版  
その他配布資料

### ■備考

TBL: Team Based Learning

### ■実務経験

本科目は言語聴覚士、公認心理師として実務経験のある教員による授業である。

# 発達心理学

講師: 島 義弘

単位数: 1単位

時間数: 30時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

## ■科目目標

人の生涯にわたる波多津を、心理学の観点から理解することを目標とする。発達段階ごとの特徴や課題を学び、将来、ヒューマンサービスに従事する専門職としての素地を養う。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	発達心理学とは	講義・討論	該当箇所の復習(教科書, レジュメ)
2	発達の理論	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
3	身体と運動の発達	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
4	認知の発達	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
5	言葉の発達	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
6	知能の発達	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
7	感情の発達	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
8	道徳性の発達	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
9	対人関係の発達	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
10	乳幼児期・児童期の自己の発達	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
11	青年期の自己の発達	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
12	成人期・老年期の自己の発達	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
13	キャリア発達	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
14	発達の遅れと障害	講義	該当箇所の予習・復習(教科書, レジュメ)
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

## ■受講上の注意

教科書またはその他の資料を用いて、予習をしてください。授業中は積極的な参加を求めます。

## ■成績評価の方法

毎時の課題(50%)と終講試験(50%)で評価する。本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

『公認心理師スタンダードテキストシリーズ12 発達心理学』林 創(編著)ミネルヴァ書房

## ■備考

## ■実務経験

# 臨床心理学

講師:岩元 正知

単位数:2単位

時間数:40時間

授業学年:2学年

必修選択:必修

## ■科目目標

「臨床」とは「病み、悩み、障害をもつ人間に対して、実際に、その状態像を把握し、治療すること」であり、「臨床心理」という言葉は、「心理学を臨床的に応用する」と考えられる。多くの人間は、心の内に悩みや迷い、葛藤を抱えており、「臨床心理学」はそのような状態像の解決を援助する学問である。ところで言語聴覚士国家試験の「臨床心理学」の過去出題範囲は、基礎心理学に始まり、心理統計、心理査定、精神症状、心理面接および心理療法、さらに出題回数は少ないが地域援助と多岐にわたっている。そこで本講義では出題頻度の高い心理査定、精神症状、心理面接および心理療法を中心に展開し、国家試験で問われる知識を身に付けていく。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「臨床心理学」の基本的概念および機械に写ることのない「人間の心」とは何か…について理解する。	講義	ミニ心理ゲーム「絶対に許せないのは誰？」の実施。
2	「パーソナリティ理論(性格類型論、性格特性論)」について理解する。	講義	ST国試に頻出されている「パーソナリティ理論」。国試で合格点を探るためのコツを理解すること。
3	「人格理論(質問紙法、作業検査法、投影法など)」について理解する。	講義	ST国試に頻出されている「人格検査」。国試で合格点を探るためのコツを理解すること。
4	「抑うつ障害群」について。特に、いわゆる「うつ病」についての知識を理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
5	「双極性障害および関連障害群」について。特に、「双極性障害(躁うつ病)」についての知識や「うつ病」との違いを理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
6	「統合失調症スペクトラム障害」について。特に、精神病の一つとされる「統合失調症」について理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
7	「パニック症」を含む心の病の一つ「不安症群」について理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
8	「強迫症および関連症群」について。特に、若者の心の病の一つ「強迫症(強迫性障害)」について理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
9	「パーソナリティ障害群」について。特に、「境界性パーソナリティ障害」についての理解を深める。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
10	「心的外傷およびストレス因関連障害群」について。特に「愛着障害」や「PTSD」等に関する理解を深める。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
11	「解離症群」について。「解離症」に加えて、近年注目されている「複雑性PTSD」についての理解を深める。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
12	「家族の病理」と呼ばれる「摂食障害」について理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
13	無意識という概念を提唱したフロイトの「精神分析」について理解する。	講義	ST国試に頻出されている「精神分析(的心理療法)」。国試で合格点を探るためのコツを理解すること。
14	ロジャーズの提唱した「クライエント(来談者)中心療法」について理解する。	講義	ST国試に頻出されている「クライエント中心療法」。国試で合格点を探るためのコツを理解すること。
15	学習理論に基づく心理療法「行動療法」について理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
16	「認知療法」「認知行動療法」について、国試に対応できる知識を理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
17	神経発達障害群より「知的発達症」および「ASD(自閉スペクトラム症)」について理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
18	神経発達障害群より「ADHD(注意欠如多動症)」について理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
19	神経発達障害群より「SLD(限局性学習症)」について理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
20	終講試験およびまとめ	筆記試験	

#### ■受講上の注意

居眠りはしないこと。時間は守ること。離席する場合には必ず伝えること。すべての質問にチャレンジすること(考えてみる)。主体的に講義に臨むこと。

#### ■成績評価の方法

試験(70%)受容中のレポート(20%)授業への参加態度(10%)により相互的に評価する。

#### ■テキスト参考書など

一発合格! 公認心理師対策テキスト&予想問題集」, ファイブアカデミー

#### ■備考

毎回、講義資料を配布する。

#### ■実務経験

本科目は公認心理師として実務経験のある教員による授業である。



# カウンセリング論

講師: 岩元 正知

単位数: 2単位

時間数: 30時間

授業学年: 2学年

必修選択: 必修

## ■ 科目目標

心理カウンセリングの基本は「信頼関係」。カウンセラー(聴き手)は相談に訪れた人(クライアント)が安心できる雰囲気を与える様に努める。実践的な体験型講義を通して、言語および非言語コミュニケーションや心理カウンセリングにおける言葉の使い方、ねぎらいやユーモラスな分脈の大切さなど、援助を必要とされるクライアントに対するカウンセリング法を学ぶことができる。

## ■ 科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「心身一如」。心の状態が身体の反応と相互に作用していることを理解することができる。	講義・GW	二人一組になっての体験学習を予定している。積極的に参加することが望ましい。
2	コミュニケーション体験型講義を通して、信頼の架け橋となる「ラポール」を体験することができる。	講義・GW	二人一組になっての体験学習が中心。積極的にすべてのワークを体験することが望ましい。
3	言葉の遅れのある自閉症児に対する療育スキル(ABA)を、映像を通して学ぶことができる。	講義・DVD	課題レポートの提出。
4	NLPカウンセリング体験。実際にカウンセラーおよびクライアントを体験することができる。	講義・GW	二人一組になってのカウンセリング体験。第二講で学んだ「ラポール・テクニック」を意識しながらカウンセリングすることが望ましい。
5	「コーチング」について理解することができる。同時にNLPコーチングを体験することもできる。	講義・GW	「コーチング」についての学びを通して、STとしてのコーチングの意義を考えてみる。その上で、二人一組になって「NLPコーチング」を体験する。
6	VAKテストを通して、自分の優れた「利き感覚」を理解することができる。	講義	講義中、「VAKテスト」を実施。これはあくまで、自分の「利き感覚」を理解するためのテスト。楽しみながら受験して欲しい。
7	「出生順位(きょうだいの中で何番目に生まれて来たか)の秘密」についての理解を深めることができる。	講義	「きょうだい性格分析クイズ」を気軽に体験し、出生順位の秘密を知る機会とする。
8	「アイパターン」と呼ばれる目の動きと内的表象との法則について理解することができる。	講義・GW	二人一組になって、相手に質問し、その時の目の動きを観察しながら、その人の心を読み取る体験をする。
9	心理カウンセリングを行う上で、「人(クライアント)はすでに変化に必要なリソースを持っている」という考え方があり、このリソースについて理解することができる。	講義・GW	二人一組になって「あなたのリソース探し」によるカウンセリングを体験する。
10	11個の質問を通して、様々な「リソース」を紡ぎ「焦点化」していくことによって「リソース・フォーカスト」について気づきを得ることを目的とする。	講義・GW	二人一組になって「リソース・フォーカスト・クエスチョン」によるカウンセリングを体験する。
11	ある出来事を体験した時、怒りや不安を感じる場合に影響する「生き方のルール(ビリーフ)」を理解することができる。	講義・GW	二人一組になって「5つの質問」によるカウンセリングを体験する。
12	人の気持ちの動きや行動パターンに大きく影響する「認知」を修正し、心のバランスを整えることでストレスを軽減する「認知行動療法」式カウンセリングを理解することができる。	講義・GW	二人一組になって「7つのコラム法」によるカウンセリングを体験する。
13	「心のケア(健康)」とは何か? もし、あなたが心に傷を負ったとき、そのケア(健康)を保つためにはどうすればいいのか? あなた自身が本講義を通して、自分の「心のケア」について意識することを目的とする。	講義	瞑想法「マインドフルネス」を体験する。
14	グループの中で、自分の役割が周囲に対し、どのように影響するのか…について理解を深めることができる。	講義・GW	4人程度のグループによるコミュニケーショントレーニング体験。積極的に参加することが望ましい。
15	終講試験およびまとめ	筆記試験	

## ■ 受講上の注意

居眠りはしないこと。時間は守ること。離席する場合には必ず伝えること。すべての質問にチャレンジすること(考えてみること)。主体的に講義に臨むこと。

## ■ 成績評価の方法

試験(70%)授業中のレポート(20%)授業への参加態度(10%)により相互的に評価する。

## ■ テキスト参考書など

テキストは特にないが、参考書として「臨床心理学」のテキスト「一発合格! 公認心理師対策テキスト&予想問題集」を使用する。

## ■ 備考

毎回、講義資料を配付する。

## ■ 実務経験

本科目は公認心理師として実務経験のある教員による授業である。

# 心理測定法

講師:岩元 正知

単位数:1単位

時間数:15時間

授業学年:2学年

必修選択:必修

## ■科目目標

人の心の状態や行動の特性などを解明するために行われる測定を「心理測定」と呼ぶ。「心理測定」は、広い意味では精神測定(一般知能の測定など)とほぼ同じ意味で用いられている。ここでは、例えば、感覚・知覚で閾値を測定する「精神物理学的測定法」や、能力・性格などの研究領域での「テスト理論」、好みや社会的態度などの研究における評定法、尺度構成法など、様々な測定法がある。本講義では、言語聴覚士国家試験における心理測定法の過去出題範囲についての知識を理解することを目的とする。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「社会調査」および「質問紙法」について理解できる。	講義	
2	「尺度(名義尺度・順序尺度・間隔尺度・比率尺度)」についての知識を理解できる。	講義	次回、小テスト実施予定。
3	「精神物理学的測定法」についての知識および国試の解き方を理解できる。	講義	「調整法」「恒常法」「極限法」など本講での学びを復習すること。次回、小テスト実施予定。
4	「尺度構成法(直接尺度構成法および間接尺度構成法)」についての知識を理解できる。	講義	
5	「信頼性」「妥当性」についての知識および国試出題パターンを理解できる。	講義	
6	「単一事例研究法」についての知識および国試の出題パターンを理解できる。	講義	
7	「信号検出理論」および「多次元尺度構成法」についての知識および国試出題パターンを理解できる。	講義	記憶の再認課題を実施。
8	終講試験およびまとめ	筆記試験	

## ■受講上の注意

居眠りはしないこと。時間は守ること。離席する場合には必ず伝えること。すべての質問にチャレンジすること(考えてみる)。主体的に講義に臨むこと。

## ■成績評価の方法

試験(70%)授業中のレポート(20%)授業への参加態度(10%)により相互的に評価する。

## ■テキスト参考書など

テキストは無し。参考書として「臨床心理学」の「一発合格! 公認心理師対策テキスト&予想問題集」を使用することがある。

## ■備考

毎回、講義資料を配付する。

## ■実務経験

本科目は公認心理師として実務経験のある教員による授業である。

# 日本語学

講師:山下 直子

単位数:1単位

時間数:15時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

## ■科目目標

- ①様々なポイントから日本語のしくみを理解し、他の人にも簡単に説明できる。
- ②自分がどんな日本語使用者であるのかを客観的に振り返ることができる。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	私のことばを知る:自分の母語について客観的に振り返ることができる	GW・講義	4年間学び合うクラスメートのことを知る機会として、積極的にワークに参加してください。
2	日本語のことばと文字①:日本語の語彙の種類の特徴がわかる	GW・講義	
3	日本語のことばと文字②:日本語の文字と表記の特徴がわかる	GW・講義	グループワークではスマートフォンを活用します。
4	日本語のルール:文法から見た日本語の特徴がわかる	GW・講義	
5	日本語の使い分け①:<やさしい日本語>を通して、相手や場面による日本語の使い分けができる	GW・講義	
6	日本語の使い分け②:<要約筆記>を通して話し言葉と書き言葉の違いがわかる	GW・講義	
7	ことばを使わない日本語表現:日本語のジェスチャーや日本人の会話の特徴がわかる	GW・講義	グループワークではスマートフォンを使用します
8	私のことばを語る:日本語の特徴について、他の人に自分のことばで説明できる	GW・講義	最終レポートの詳しい説明も行います

## ■受講上の注意

- ①グループワークやペアワークを多く行いますので、積極的に参加してください。
- ②予習の必要はありませんが、復習・振り返りはぜひ行ってください。

## ■成績評価の方法

最終レポートで評価を行います。(最終講義終了後、期日内に提出。)  
構成(10%)、内容(80%)、表現(10%)。詳細は最終講義で詳しく説明します。  
レポートのタイトル:「日本語の特徴」。パソコンで作成してください(手書き不可)。

## ■テキスト参考書など

なし。

## ■備考

毎回の授業でプリント等を配布します。  
各自ファイルを用意して、配布資料をしっかりと自己管理してください。  
前の授業資料を見る場合もあります。毎回、必ずファイルを持ってきてください。

## ■実務経験

# 言語学

講師:山下 直子

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:2学年

必修選択:必修

## ■科目目標

- ①言語のさまざまな見方を理解し、他の人にも簡単に説明できる。
- ②日本語がどんな言語であるか、例を挙げながら説明することができる。
- ③国家試験の設問に対応できる言語学の基本知識が身につけられる。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語とは何か(言語学概論)①: 言語学に含まれる様々な分野および言語の機能がわかる	GW・講義	
2	言語とは何か(言語学概論)②: 言語学の歴史や背景がわかる	GW・講義	
3	言語の音のしくみ(音韻論)①: 言語によって音の捉え方が異なることがわかる	GW・講義	1年次の「日本語音声学」の復習をした上で、授業に臨んでください
4	言語の音のしくみ(音韻論)②: 日本語における音のバリエーションがわかる	GW・講義	1年次の「日本語音声学」の復習をした上で、授業に臨んでください
5	言語の音と語の関係(形態論)①: 語のしくみと性質がわかる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「日本語のことばと文字」で学んだ知識を活用します
6	言語の音と語の関係(形態論)②: 語の成り立ちや音の変化についてわかる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「日本語のことばと文字」で学んだ知識を活用します
7	言語の音と語の関係(形態論)③: 日本語の語の特徴がわかる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「日本語のことばと文字」で学んだ知識を活用します
8	言語の文のしくみ(統語論)①: 文の構造が図式化できる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「日本語のルール」で学んだ知識を活用します
9	言語の文のしくみ(統語論)②: 日本語の文の特徴がわかる(1)	GW・講義	
10	言語の文のしくみ(統語論)③: 日本語の文の特徴がわかる(2)	GW・講義	
11	言語の意味と運用(意味論)①: 語や文の意味の捉え方についてわかる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「日本語の使い分け」で学んだ知識を活用します
12	言語の意味と運用(意味論)②: 場面や状況によって意味の捉え方が変化することがわかる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「日本語の使い分け」で学んだ知識を活用します
13	言語の意味と運用(語用論)③: 言語と文化の関係についてわかる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「ことばを使わない日本語の表現」で学んだ知識を活用します
14	言語とは何か(言語学総論)③: 言語学の用語の意味を、他の人に自分のことばで説明できる	GW・講義	最終試験の詳しい説明も行います
15	終了試験	試験	

## ■受講上の注意

- ①毎回、翌回の授業に向けた「事前タスク」を提示します(初回を除く)。必ず「事前タスク」(「私のノート」の作成)に取り組んだ上で、次の授業に臨んでください。
- ②グループワークやペアワークを多く行いますので、積極的に参加してください。

## ■成績評価の方法

終了試験(筆記試験)で評価を行います。(最終講義日に実施。)  
試験は、多肢選択問題(60%)、記述問題(40%)で構成されます。  
記述問題は事前に提示する複数の設問の中から1~2問出題します。

## ■テキスト参考書など

『日本語教師のための入門言語学』(スリーエーネットワーク)  
\*タイトルに「日本語教師のための」とありますが、内容は普遍的なものです。

## ■備考

テキストは毎回必ず持ってきてください。  
また、授業の際にはプリント等の資料も配布します。各自ファイルを用意して、配布資料をしっかりと自己管理し、ファイルは毎回必ず持ってきてください。

## ■実務経験

# 日本語音声学

講師:山下 直子

単位数:1単位

時間数:15時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

## ■科目目標

- ①日本語の音のしくみがわかる。
- ②日本語の話し方の特徴がわかる。
- ③自分の話し方の特徴に気づける。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	日本語のリズム①:日本語のアクセントの基本がわかる	GW・講義	
2	日本語のリズム②:さまざまなアクセントを正確に聞いたり書いたりできる	GW・講義	
3	日本語のリズム③: ・複合語のアクセントのルールが理解できる ・日本語のアクセントの特徴を自分のことばで説明できる	GW・講義	
4	日本語のいろいろな音①:日本語の音のシステムの全体像がつかめる	GW・講義	
5	日本語のいろいろな音②:日本語の調音点と調音法のシステムが理解できる	GW・講義	他科目で学習済みの「音声器官」の図と名称を復習の上、授業に臨んでください
6	日本語のいろいろな音③:日本語の調音点と調音法の詳細が正確に理解できる	GW・講義	
7	発話の誤り:誤りのある発話を正確に聞き取り、その問題点が説明できる	GW・講義	
8	復習と振り返り:日本語の音声的な特徴について、他の人に自分のことばで説明できる	GW・講義	最終試験の詳しい説明も行います

## ■受講上の注意

- ①グループワークやペアワークを多く行いますので、積極的に参加してください。
- ②予習の必要はありませんが、復習・振り返りは必ず行ってください。

## ■成績評価の方法

最終試験(筆記試験)で評価を行います。(最終講義終了後の別日に実施。)  
試験は、聴解問題(40%)、多肢選択等の問題(60%)で構成されます。  
最終講義で模擬問題に取り組みます。

## ■テキスト参考書など

なし。

## ■備考

毎回の授業でプリント等を配布します。  
各自ファイルを用意して、配布資料をしっかりと自己管理してください。  
前の授業資料を見ることも多いです。毎回、必ずファイルを持ってきてください。

## ■実務経験

# 音声学

講師:山下 直子

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:2学年

必修選択:必修

## ■科目目標

- ①日本語の音声のしくみが詳しくわかる
- ②日本語の音声のしくみについて自分の言葉で説明することができる
- ③音を正確に聞き取り、記述することができる
- ④国家試験に対応できる音声学の知識を身につけられる

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	五十音図とIPA: 五十音図をIPAで記述することができる	演習・講義	1年次の「日本語音声学」の復習を行います
2	母音①: 基本母音のしくみと特徴がわかる	演習・講義	
3	母音②: 様々な母音のしくみと特徴が説明できる	演習・講義	
4	子音①: 様々な子音のしくみと特徴がわかる	講義・GW	翌週のグループ発表の準備も行います
5	子音②: 様々な子音のしくみと特徴が説明できる(1)	発表・演習	グループ発表を行います
6	子音③: 様々な子音の仕組みと特徴が説明できる(2)	発表・演習	グループ発表を行います
7	子音④: 特殊音の特徴がわかる	演習・講義	
8	様々な音声現象①: 子音と母音の様々な音声変化のしくみがわかる	講義・GW	グループ発表の準備も行います
9	様々な音声現象②: 子音と母音の様々な音声変化のしくみが説明できる	発表・演習	グループ発表を行います
10	音節とモーラ: 音節とモーラのしくみについて理解できる	演習・講義	
11	アクセントとイントネーション① 日本語のアクセント、イントネーション、プロミネンスについてわかる	講義・GW	翌週のグループ発表の準備も行います
12	アクセントとイントネーション②: 日本語のアクセント、イントネーション、プロミネンスについて説明できる(1)	発表・演習	グループ発表を行います
13	アクセントとイントネーション③: 日本語のアクセント、イントネーション、プロミネンスについて説明できる(2)	発表・演習	グループ発表を行います
14	誤った音声の記述・分析: 誤りのある音声を聞き取り、それを記述・分析できる	演習・GW	最終試験の詳しい説明も行います
15	修了試験	試験	筆記試験と聴解試験を行います

## ■受講上の注意

- ①グループワークを多く行いますので、積極的に参加してください。
- ②グループ発表が3回あります。メンバーと協力して発表に臨んでください。
- ③テキスト付属の音声を聞きながら授業を行います。授業には必ずスマートフォン(充電済み)とイヤホンを持ってきてください。

## ■成績評価の方法

以下の①と②により評価を行います。

- ①グループ発表の成果(50%):  
〈主な評価観点〉(1)内容の正確さ(2)例示(3)パフォーマンス(4)協力体制
- ②修了試験(50%):  
〈試験方法〉(1)筆記試験(2)聴解試験

## ■テキスト参考書など

『たのしい音声学』(竹内京子・木村琢也 著, 2019年, くろしお出版)

## ■備考

テキストは毎回必ず持ってきてください。  
授業での配布資料(随時)、グループ発表資料などは、各自ファイルし、自己管理してください。

## ■実務経験

# 音響・聴覚心理学

講師:松尾 康弘

単位数:2単位

時間数:40時間

授業学年:2学年

必修選択:必修

## ■科目目標

言語聴覚士はコミュニケーションに障害を持たれた方へ支援を行う。コミュニケーションには音声も含まれ、そこには「音」が存在する。本科目は「音」について物理学的側面および心理学的側面から講義し、「音」について理解を深めることを目標とする。さらに、音響分析装置を用いて「音声」を観察し、臨床に応用できるようにする。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「音」の定義について理解できる	講義・PBL	
2	身近な「音」の違いに気づくことができる	講義・PBL	
3	(音)波の基本的性質について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿ってテキストの第1章1. 波の基本的性質を予習しておくこと
4	共鳴について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿ってテキストの第1章2. 定常波と共鳴を予習しておくこと
5	波の現象(うなり・回折等)を理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿ってテキストの第1章16. 7. を予習しておくこと
6	音の強さと大きさ・音圧について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿ってテキストの第2章1. 音圧と音の強さを予習しておくこと
7	デシベル計算に必要な数学的知識(対数log)を確認する	講義・PBL	デシベル計算に必要な数学的知識(対数log)を確認する
8	デシベルの計算ができるようになる	講義・PBL	高校で使用した数学の教科書を持参すること。 対数log計算が苦手な学生は復習しておくこと。
9	音のスペクトルについて理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿ってテキストの第3章を予習しておくこと
10	音声とサウンドスペクトログラムについて理解する	講義・TBL	学習のねらいに沿ってテキストの第3章6. を予習しておくこと
11	音響分析装置Praatを用いて音響分析できる①	講義・TBL	事前に音響分析装置PraatをダウンロードしたPCをチームに1台持参すること
12	音響分析装置Praatを用いて音響分析できる②	講義・TBL	事前に音響分析装置PraatをダウンロードしたPCをチームに1台持参すること
13	音響分析装置Praatを用いて音響分析できる③	講義・TBL	事前に音響分析装置PraatをダウンロードしたPCをチームに1台持参すること
14	音響分析装置Praatを用いて音響分析できる④	講義・TBL	事前に音響分析装置PraatをダウンロードしたPCをチームに1台持参すること
15	音の心理物理学について理解することができる。	講義・TBL	
16	音の心理物理学について理解することができる。	講義・TBL	
17	聴覚の周波数分析とマスキング現象について理解することができる。	講義・TBL	
18	両耳の聞こえについて理解することができる	講義・TBL	
19	環境と聴覚の関係について理解することができる。	講義・TBL	
20	試験	試験	

■ 受講上の注意

音響分析装置を使用するため、ノート型PCを持っていることが望ましい。多少の数学的知識が必要なため、高校数学を復習しておくこと。

■ 成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

■ テキスト参考書など

竹内京子ら編著: Crosslink 言語聴覚療法テキスト 音響・音声学  
言語聴覚士テキスト

■ 備考

PBL: Problem Based Learning  
TBL: Team Based Learning

■ 実務経験



# 言語発達学

講師: 福元 恵美

単位数: 1単位

時間数: 15時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

## ■ 科目目標

子どもがどのような過程でことばを習得していくのか。について学ぶ講義です。

ことばは生涯を通して形作られていきますがその中でも出生から学齢期までのことばの発達は言語コミュニケーションの基盤となります。

この講義では、前言語期(ことばが開始する前の時期)・幼児期・学童期に分けてそれぞれの時期のことばの発達(理解力・発話能力・読み能力など)を理解し、定型発達児の言語発達の全体像を把握することを目標とします。

## ■ 科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	こどもの発達(身体・認知・ことば)について学ぶ。	講義・グループワーク 資料の確認	
2	前言語期のことばの発達について理解する。	講義・グループワーク 小テスト実施。	
3	幼児前期のことばの発達について理解する。	講義・グループワーク 小テスト実施。	
4	言語発達を促す大人の役割について学ぶ。	講義・グループワーク 小テストを実施。	
5	幼児後期のことばの発達について理解する。	講義・グループワーク 小テストを実施。	
6	学童期のことばの発達について理解する。	講義・グループワーク 小テストを実施。	
7	前言語期～幼児期のことばをはぐくむ関わり方・遊びを学ぶ。 グループにてことばをはぐくむ遊びについて考える。	講義・グループワーク これまでの復習をしておくこと。 子どもの好きなおもちゃを調べる。また何がことばをはぐくむために役立つか考える。	
8	単位認定試験、まとめ	試験・講義 これまでの復習をしておくこと。	

## ■ 受講上の注意

何らかの配慮が必要な場合は申し出てください。

グループワーク・ディスカッションの際は肯定的なことばを使用してください。

教科書・配布資料を揃えて講義に臨み、受講後は復習をしてください。

講義の進行状況により上記の内容や順番を変更することがあります。

## ■ 成績評価の方法

本試験、再試験ともに60点/100点以上を合格とする。

## ■ テキスト参考書など

標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 第3版 医学書院

※適宜資料を配布する。

## ■ 備考

## ■ 実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 障害児教育学

講師:片岡 美華

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

## ■科目目標

STとして障害のある子どもと接する上で必要となる、障害のある子どもたちへの教育の視点および、現在行われている特別支援教育制度を概括的にとらえることを目的とする。具体的には以下の二点を授業目標とする。

- ①障害のある子どもたちへの教育について、現代までの事績をつかみ、今日求められている障害のある子どもへの教育の意義と目的を明らかにする。
- ②特別支援教育の制度や法律を概括的にとらえ、連携や教育的支援の内容を理解する。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	特別支援教育とは何か。障害の概念(ICIDHからICFへの視点の転換)	講義	
2	障害児教育通史	講義	
3	障害児者の権利獲得の歴史と教育	講義	
4	障害児教育とインクルージョン	講義	
5	特別支援教育制度①(特別支援学校・センター的役割)	講義	
6	特別支援教育制度②(特別支援学級)	講義	
7	特別支援教育制度③(発達障害・通常学級)	講義	
8	通常学級における特別支援教育(通級制度・ユニバーサルデザイン教育)	講義	
9	学校全体支援体制と特別支援教育コーディネーターの役割	講義	
10	保護者への支援(障害受容・就学支援)	講義	
11	家庭、関係諸機関との連携と個別の教育支援計画	講義	
12	障害者の自立～進路選択・就労支援・セルフ・アドボカシー～	講義	
13	きょうだい支援と教育相談	講義	
14	教育相談と支援の視点	講義・演習	
15	まとめと試験	試験	

## ■受講上の注意

講義内容は、進み具合等によって順番や内容が若干替わることがあります。

## ■成績評価の方法

授業中に課すミニレポート(30%)と小テスト(5%)、および期末試験(65%)により本試験・再試験ともに総合的に判断する。

## ■テキスト参考書など

玉村公二彦・黒田学・向井啓二・平沼博将・清水貞夫編著:「新版 キーワードブック特別支援教育 ―インクルーシブ教育時代の基礎知識」(2019)クリエイツかもがわ

本講義では、教科書を基本としながら、適宜、視聴覚教材や補助資料を用いて理解しやすいように工夫する。

## ■備考

臨床発達心理士としての経験を生かして、事例を盛り込むとともに特に第14回の授業ではロールプレイングを交えながらより実践的に学べるようにする。

## ■実務経験

# 地域言語聴覚療法学

講師:下村 孝子、戌亥 啓一、酒匂 久光

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

## ■科目目標

本講義名は「地域」を冠しているものの、その内容は「医療」「福祉」「教育」といったリハビリテーションの活動領域を包括したものであり、リハビリテーション概論として、国際的な評価基準や各領域における専門用語、機器や器具を使用する方法、障害者スポーツ、症例との関わり・対応を含め幅広く学んでいくとともに、関連職種による「チーム」をもう1つのテーマに「地域言語聴覚演習Ⅰ～Ⅲ」を通して各職種のアプローチと連携を学ぶ。またリハビリテーションに関わる上で基本となる社会福祉、社会保障制度について体系的に学習し、その内容を理解し、近い将来に赴く臨床現場(実習を含め)で、クライアントの利用可能な社会資源や必要な制度・関係法について、具体的にイメージできる能力を養い、制度を活かす方法を検討することができるようになることを目標とする。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	リハビリテーションの概要、ICFへの理解を深める。	講義	配布資料の要点をおさえる
2	リハビリテーションと障害についての基本的な専門用語を知る 特に言語聴覚士法の概要を知る	講義	概念的な用語については特に留意して理解を深める
3	疾患・病期等からみたリハビリテーションへの理解を深める	講義	配布資料の要点をおさえる
4	障害に対するリハビリテーションへの理解を深める	講義	配付資料の要点を確認する
5	症例の生活に対応するリハビリテーションへの理解を深める	講義・演習	配付資料の要点を確認する 軽装を準備する
6	リハビリテーションの概要についてまとめる	講義・中間試験	前回までの内容を復習する
7	リハビリテーションの一部を担う理学療法の役割とその職域を学ぶ	講義	事前に資料を配布します
8	理学療法における基本動作、リハビリテーション機器を体験する	講義・演習	機能訓練室で行う。 運動できる服装で受講してください。
9	障がい者スポーツを体験する。	講義・演習	体育館で行います。 運動できる服装で受講してください。
10	社会保障制度の概念を理解できる 自分の身の周りにある社会保険制度を考え、理解できる	講義	
11	健康保険制度の概要や給付内容を理解できる	講義	
12	介護保険制度の概要や給付内容を理解できる	講義	
13	社会福祉に関する法律(主に障害者)の概要を理解できる 生活保護制度の概要や給付内容を理解できる	講義	
14	社会福祉援助技術、リハビリテーション概論を理解する	講義	配布資料の要点をおさえる
15	終講試験とまとめ	試験	前回までの内容を復習する

## ■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番を変更する場合もある。

## ■成績評価の方法

レポート試験

## ■テキスト参考書など

資料を配布

## ■備考

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士、理学療法士、社会保険労務士として実務経験のある教員による授業である。

# 地域言語聴覚演習Ⅰ

講師:川元真由美

単位数:2単位

時間数:60時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

## ■科目目標

リハビリテーションは医療分野をはじめ福祉、教育など社会全般にその活動が広がっている。別の視点として「地域」という枠組みがあり、ここで必要な要素はやはりリハビリテーション全般に共通するものであるが、「地域」という視点を持ちリハビリテーションを考え、携わることは重要な意義がある。そして、関連職種による「チーム」を1つのテーマに「地域言語聴覚演習Ⅰ～Ⅲ」を通して各職種のアプローチと連携についても学んでいく。「地域言語聴覚演習Ⅰ」では、「地域言語聴覚療法学」で学んだリハビリテーション概論や、社会保障制度・関係法規の位置づけ、チームアプローチの重要性を認識し、言語聴覚士として「地域」における活動の実際と今後を見据えた視点を総合的に養うことを目標としている。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	施設訪問前オリエンテーションA、訪問施設情報の閲覧から必要な情報を得る 臨床実習マニュアルを参考に実習前情報との照合を行い、概要を確認する	演習・GW	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
2	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(1)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
3	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(2)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
4	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(3)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
5	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(4)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
6	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(5)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
7	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(6)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
8	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るため、検討を行う(1)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
9	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るため、検討を行う(2)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
10	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るため、検討を行う(3)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
11	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るため、検討を行う(4)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
12	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(7)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
13	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(8)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
14	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(9)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
15	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(10)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
16	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(11)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
17	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(12)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
18	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(13)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
19	施設訪問前オリエンテーションB、訪問施設情報の閲覧から必要な情報を得る	演習・GW	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
20	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(14)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。

21	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(15)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
22	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(16)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
23	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(17)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
24	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(18)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
25	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(19)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
26	多職種連携授業をとおし、地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を学ぶ(1)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
27	多職種連携授業をとおし、地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を学ぶ(2)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
28	多職種連携授業をとおし、地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を学ぶ(3)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
29	実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で考証を行うとともに多様な意見を得る機会とする(1)	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。
30	実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で考証を行うとともに多様な意見を得る機会とする(2)	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。

#### ■ 受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番を変更する場合もある。

#### ■ 成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

#### ■ テキスト参考書など

鹿児島医療技術専門学校 臨床実習マニュアル、その他関連分野参考書

#### ■ 備考

#### ■ 実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員、指導者による授業である。

# 地域言語聴覚演習Ⅱ

講師:川元真由美

単位数:2単位

時間数:60時間

授業学年:2学年

必修選択:必修

## ■科目目標

リハビリテーションは医療分野をはじめ福祉、教育など社会全般にその活動が広がっている。別の視点として「地域」という枠組みがあり、ここで必要な要素はやはりリハビリテーション全般に共通するものであるが、「地域」という視点を持ちリハビリテーションを考え、携わることは重要な意義がある。そして、関連職種による「チーム」を1つのテーマに「地域言語聴覚演習Ⅰ～Ⅲ」を通して各職種のアプローチと連携についても学んでいく。「地域言語聴覚演習Ⅱ」では、「地域言語聴覚演習Ⅰ」での経験に加え、言語聴覚士の活動場面の観察から専門基礎科目、専門科目で学んだ知識の活用を図るとともに、実践可能な活動を通して、リハビリテーションに係る環境や活動全般に対する理解を深めることを目標としている。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	施設訪問前オリエンテーションA、訪問施設情報の閲覧から必要な情報を得る 臨床実習マニュアルを参考に実習前情報との照合を行い、概要を確認する	演習・GW	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
2	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(1)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
3	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(2)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
4	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(3)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
5	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(4)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
6	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(5)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
7	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(6)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
8	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るため、検討を行う(1)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
9	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るため、検討を行う(2)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
10	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るため、検討を行う(3)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
11	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るため、検討を行う(4)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
12	施設訪問前オリエンテーションB、訪問施設情報の閲覧から必要な情報を得る	演習・GW	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
13	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(7)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
14	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(8)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
15	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(9)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
16	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(10)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
17	施設訪問前オリエンテーションC、訪問施設情報の閲覧から必要な情報を得る	演習・GW	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
18	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(11)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
19	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(12)	演習・GW	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
20	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(13)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。

21	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(14)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
22	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(15)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
23	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(16)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
24	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(17)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
25	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(18)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
26	実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で考証を行うとともに多様な意見を得る機会とする(1)	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。
27	実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で考証を行うとともに多様な意見を得る機会とする(2)	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。
28	実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で考証を行うとともに多様な意見を得る機会とする(3)	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。
29	実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で考証を行うとともに多様な意見を得る機会とする(4)	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。
30	実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で考証を行うとともに多様な意見を得る機会とする(5)	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。

### ■ 受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番を変更する場合もある。

### ■ 成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

### ■ テキスト参考書など

鹿児島医療技術専門学校 臨床実習マニュアル、その他関連分野参考書

### ■ 備考

### ■ 実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員、指導者による授業である。

# 地域言語聴覚演習Ⅲ

講師:山口 浩明、川元真由美、堀川 憲子

単位数:2単位

時間数:60時間

授業学年:3学年

必修選択:必修

## ■科目目標

リハビリテーションは医療分野をはじめ福祉、教育など社会全般にその活動が広がっている。別の視点として「地域」という枠組みがあり、ここで必要な要素はやはりリハビリテーション全般に共通するものであるが、「地域」という視点を持ちリハビリテーションを考え、携わることは重要な意義がある。そして、関連職種による「チーム」を1つのテーマに「地域言語聴覚演習Ⅰ～Ⅲ」を通して各職種のアプローチと連携についても学んでいく。「地域言語聴覚演習Ⅲ」では、「地域言語聴覚演習Ⅰ・Ⅱ」で学んだ経験を活かすため、より多様な関係職種との関わりを通じた学習を展開する。地域包括ケアシステムを念頭に関係職種との活動を通して相互理解を深め、専門性と連携の意識をや災害リハ等への関心を高め、最終的に自身のリハビリテーションに位置づけを明確にしていくことが本講義の目標である。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	地域包括ケアシステムの概要について理解できる	講義・TBL	講義のねらいに従い、予習をする
2	地域包括ケアシステムとリハビリテーションの関係について理解できる	講義・TBL	講義のねらいに従い、予習をする
3	災害リハにおける地域連携システムの概要について理解できる①	講義・TBL	講義のねらいに従い、予習をする
4	災害リハにおける地域連携システムの概要について理解できる②	講義・TBL	講義のねらいに従い、予習をする
5	失語症における地域連携システムの概要について理解できる	講義・TBL	講義のねらいに従い、予習をする
6	小児分野における地域連携システムの概要について理解できる	講義・TBL	講義のねらいに従い、予習をする
7	巡回相談、乳幼児健診、発達相談、発達教室、子育て支援センター等における言語聴覚士の役割について理解できる	講義・TBL	講義のねらいに従い、予習をする
8	地域での診療に向けて、歯・歯周組織の発生と発育、口腔・顎・顔面の構造機能を理解する	講義・TBL	歯・歯周組織の発生と発育、形態と構造を理解する
9	地域での診療に向けて、咀嚼機能を理解する	講義・TBL	咀嚼機能を理解する
10	診察のポイント、感染予防を理解する。歯牙疾患の種類と症状を理解する。	講義・TBL	診察のポイント、感染予防を理解し実践する 歯牙疾患の種類と症状を理解する
11	歯の萌出・数・形態異常を理解する 歯周組織疾患の種類と症状を理解する	講義・TBL	歯の萌出・数・形態異常を理解する 歯周組織疾患の種類と症状を理解する
12	小児歯科・高齢者歯科を理解する	講義・TBL	小児歯科・高齢者歯科を理解する
13	口腔ケアを理解する	講義・演習	口腔ケアの方法を取得する
14	施設訪問前オリエンテーション、訪問施設情報の閲覧から必要な情報を得る	講義・TBL	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する
15	臨床実習マニュアルを参考に実習前情報との照合を行い、概要を確認する 施設訪問経験者から必要な情報を聴取するとともに疑問点を解消、準備事項を具体化する	講義・TBL	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する
16	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(1)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する
17	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(2)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する
18	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(3)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する
19	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る(4)	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する
20	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るため、調査・検討を行う(1)	講義・GW	社会活動全般の資料を参照することが役立つ。



21	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を獲得するため、調査・検討を行う (2)	講義・GW	社会活動全般の資料を参照することが役立つ。
22	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ (1)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
23	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ (2)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
24	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ (3)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
25	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ (4)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
26	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ (5)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
27	実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で検証を行うとともに多様な意見を獲得する機会とする (1)	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。
28	実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で検証を行うとともに多様な意見を獲得する機会とする (2)	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。
29	実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で検証を行うとともに多様な意見を獲得する機会とする (3)	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。
30	実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で検証を行うとともに多様な意見を獲得する機会とする (4)	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。

#### ■ 受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番を変更する場合もある。

#### ■ 成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

#### ■ テキスト参考書など

鹿児島医療技術専門学校 臨床実習マニュアル、その他関連分野参考書

#### ■ 備考

#### ■ 実務経験

本科目は歯科医師、言語聴覚士として実務経験のある教員、指導者による授業である。

# 言語聴覚障害学総論

講師:松尾 康弘

単位数:1単位

時間数:15時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

## ■科目目標

### 【一般目標】

・言語聴覚士と言語聴覚療法について理解し、自己の職業観を究めることができる

### 【到達目標】

- ・言語聴覚士の歴史的な流れとその意味を概説できる
- ・言語聴覚療法の対象者について具体的に説明できる
- ・言語聴覚療法の一般的な流れを説明できる
- ・言語聴覚療法とチームアプローチについて説明できる
- ・言語聴覚士の職業倫理について説明できる
- ・言語聴覚士に関連する法律を概説できる
- ・言語聴覚士の社会的活動の必要性について説明できる

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語聴覚士の仕事や定義について説明できる。言語聴覚士の歴史を理解し、未来について熟考することができる。	講義・TBL	テキストの第1章を予習しておくこと
2	言語聴覚障害入門としてコミュニケーション過程や言語聴覚障害の概要について理解することができる	講義	テキスト第2章を予習しておくこと
3	言語聴覚士養成の全体構造や言語聴覚士国家試験の概要について理解できる	講義・TBL	テキスト第3章を予習しておくこと
4	言語聴覚療法の評価の基本概念について理解することができる	講義・TBL	テキスト第4章を予習しておくこと
5	言語聴覚療法とチームアプローチについて理解することができる	講義・TBL	テキスト第5章を予習しておくこと
6	言語聴覚士の職業倫理について理解することができる	講義・TBL	テキスト第6章を予習しておくこと
7	言語聴覚士のリスクマネジメントについて理解することができる	講義・TBL	テキスト第7章を予習しておくこと
8	言語聴覚士の社会的活動の必要性について理解することができる	講義・TBL	テキスト第9章を予習しておくこと

## ■受講上の注意

講義の大半を座学とTBLで実施します。各講義のねらいに従ってテキスト等で必ず予習を行う。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

内山量史ら編:クリア言語聴覚療法1言語聴覚障害総論, 健帛社

## ■備考

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 言語聴覚療法評価学Ⅰ

講師:高吉 進

単位数:1単位

時間数:15時間

授業学年:2学年

必修選択:必修

## ■科目目標

本講義では、言語聴覚障害の評価・診断につながる情報収集および記録、観察レポートについて具体的事例や実施法を学ぶ。情報収集の種類は、背景を成す情報、現象に関する情報などがあり、情報収集の方法には面接、質問紙、観察、検査、その他カルテや報告書、関連職種等から得るものなど多岐にわたる。守秘義務等の留意事項を含め重要な項目を学ぶ。観察レポートについては、情報収集や記録をもとに一般的な形式を活用した作成を目指す。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語聴覚障害の評価・診断について臨床実習マニュアルを参照しながら、その流れを確認・理解する	講義・演習	
2	情報収集の種類や対象について具体的な事例を交え確認する	講義・演習	
3	情報収集の対象を具体的に想定し、その方法・流れを理解する	講義・演習	
4	観察・記録の方法、ポイントについて具体的な事例を交え確認する	講義・演習	
5	観察したものを表現・表記する方法を知る(1)	講義・演習	
6	観察したものを表現・表記する方法を知る(2)	講義・演習	
7	実際の見学報告、観察レポートに対して私見を持ち、客観的な評価視点を獲得	講義・演習	
8	試験・解説	試験・解説	

## ■受講上の注意

### ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

### ■テキスト参考書など

臨床実習マニュアル、配布資料

### ■備考

### ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 言語聴覚療法評価学Ⅱ

講師:高吉 進

単位数:2単位

時間数:45時間

授業学年:3学年

必修選択:必修

## ■科目目標

- ・言語機能・構音機能・高次脳機能に対する障害のふり分けができる。
- ・臨床場面を想定し、患者に対する適切な関わり方・コミュニケーション技術を習得する。
- ・検査場面において、臨機応変な対応ができる。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語聴覚障害の評価・診断の概要	講義	1年次に学んだ言語聴覚障害総論を復習しておくこと
2	STADの概要・実施手順	講義・TBL	STADのマニュアルを復習する
3	STADの実践	実技	STADのマニュアルを復習する
4	小児領域のスクリーニング検査	講義・TBL	小児領域の言語聴覚療法を復習する
5	スクリーニング検査の作成①	TBL	これまでの講義を復習する
6	スクリーニング検査の作成②	TBL	これまでの講義を復習する
7	スクリーニング検査のまとめ①	TBL	これまでの講義を復習する
8	スクリーニング検査のまとめ②	TBL	これまでの講義を復習する
9	スクリーニング検査の実践①	実技	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
10	評価結果のまとめ・解説	TBL	必要な参考・引用文献を準備すること
11	スクリーニング検査の実践②	実技	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
12	評価結果のまとめ・解説	TBL	必要な参考・引用文献を準備すること
13	スクリーニング検査の実践③	実技	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
14	評価結果のまとめ・解説	TBL	必要な参考・引用文献を準備すること
15	スクリーニング検査の実践④	実技	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
16	評価結果のまとめ・解説	TBL	必要な参考・引用文献を準備すること
17	言語機能検査の実践	実技	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
18	評価結果のまとめ・解説	TBL	必要な参考・引用文献を準備すること
19	認知機能検査の実践	実技	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
20	評価結果のまとめ・解説	TBL	必要な参考・引用文献を準備すること

21 各種検査の実践	実技	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
22 評価結果のまとめ・解説	TBL	必要な参考・引用文献を準備すること
23 単位認定試験・解説	試験・講義	講義1～22を復習する

---

#### ■ 受講上の注意

白衣にて受講すること。身だしなみに注意すること。実技試験においては、学園外の方々が来校される場合もある。個人情報保護の遵守および失礼の無いようにすること。

#### ■ 成績評価の方法

実技試験50点、筆記試験50点、計100点で本試験・再試験ともに60点以上を合格とする。

#### ■ テキスト参考書など

資料配付

言語聴覚療法技術ガイド，文光堂

言語聴覚士テキスト第2版，医歯薬出版

#### ■ 備考

TBLとは、能動的学習を育成することを重視し、グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法です。

#### ■ 実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 言語聴覚療法評価学Ⅲ

講師:専任教員

単位数:2単位

時間数:45時間

授業学年:4学年

必修選択:必修

## ■科目目標

本講義では、これまで基礎科目、専門基礎科目および専門科目で習得した知識や技術を実践的に活用する方法の考察と経験を積むことを目標としている。

言語聴覚療法の多様な領域において、それぞれの評価場面で活躍するために「計画→実行→評価→改善」を繰り返す。臨床実習とは異なり、指導者、対象者を固定して一定期間を想定することではなく、グループ毎に構造化された環境および場面設定の下、指導教員の指導にもとづき学生個人の実行性を高めていく。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	評価内容のオリエンテーションにより、自身の計画・活動概要を知る	講義	
2	GWにより、今後の活動概要の具体性の共有およびグループでの計画性を念頭にした活動に進めていく	GW	GWの利点と効果を意識して活用する
3	グループの課題を明示し、対応および計画を協議する(1)	GW	GWの利点と効果を意識して活用する
4	グループの課題を明示し、対応および計画を協議する(2)	GW	GWの利点と効果を意識して活用する
5	指導教員との協議、プレゼンの中で計画を補完する	GW	GWの利点と効果を意識して活用する
6	グループにより策定された計画の準備を図る(1)	GW	グループでの協議から課題を抽出する
7	グループにより策定された計画の準備を図る(2)	GW	グループでの協議から課題を抽出する
8	グループにより策定された計画の準備を図る(3)		グループでの協議から課題を抽出する
9	指導教員との協議、プレゼンの中で計画を補完する	GW	指導教員への伝達のため予行練習をしておく
10	グループにより立案された計画を実行する(1)	演習	実行中・後に浮き彫りになってくる課題を客観的に捉え視覚的表現とする
11	グループにより立案された計画を実行する(2)	演習	実行中・後に浮き彫りになってくる課題を客観的に捉え視覚的表現とする
12	グループにより立案された計画を実行する(3)	演習	実行中・後に浮き彫りになってくる課題を客観的に捉え視覚的表現とする
13	グループにより立案された計画を実行する(4)	演習	実行中・後に浮き彫りになってくる課題を客観的に捉え視覚的表現とする
14	実行評価によりグループの課題を明示し、改めて対応および計画を協議する(1)	GW	各グループメンバーは前回までの協議よりも率直な意見表出を意識する
15	実行評価によりグループの課題を明示し、改めて対応および計画を協議する(2)	GW	各グループメンバーは前回までの協議よりも率直な意見表出を意識する
16	指導教員との協議、プレゼンの中で改めて計画を補完する	GW	GWの利点と効果を意識して活用する
17	グループにより改めて策定された計画の準備を図る(1)	GW・演習	グループでの協議から課題を抽出する
18	グループにより改めて策定された計画の準備を図る(2)	GW・演習	グループでの協議から課題を抽出する
19	グループにより改めて立案された計画を実行する(1)	GW・演習	実行中・後に浮き彫りになってくる課題を客観的に捉え視覚的に表現する
20	グループにより改めて立案された計画を実行する(2)	GW・演習	実行中・後に浮き彫りになってくる課題を客観的に捉え視覚的に表現する

21 グループにより改めて立案された計画を実行する (3)	GW・演習	実行中・後に浮き彫りになってくる課題を客観的に捉え視覚的に表現する
22 グループにより改めて立案された計画を実行する (4)	GW・演習	実行中・後に浮き彫りになってくる課題を客観的に捉え視覚的に表現する
23 実行評価によりグループの課題を明示し、改めて対応及び計画を協議する	GW	今後の継続を仮定して協議する

---

#### ■受講上の注意

#### ■成績評価の方法

参加、各種作成資料、実行の各項目についてルーブリック評価を行う。  
本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

#### ■テキスト参考書など

指定なし

#### ■備考

#### ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 失語症学 I

講師:高吉 進

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

## ■科目目標

- ・失語症と言語聴覚士の役割を理解する
- ・言語の構造・神経学的基盤を理解する
- ・失語症の言語症状・タイプ分類を理解する
- ・失語症の言語聴覚療法の全体像を理解する

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	失語症と言語聴覚士の役割	講義・TBL	テキスト①p1~2を予習する
2	言語の構造	講義・TBL	テキスト①p26~10を予習する
3	言語の神経学的基盤	講義・TBL	テキスト①p11~31を予習する
4	失語症の原因疾患	講義・TBL	テキスト①p33~39を予習する
5	失語症の言語症状①	講義・TBL	テキスト①p42~50を予習する
6	失語症の言語症状②	講義・TBL	テキスト①p51~56を予習する
7	失語症の近縁症状・随伴しやすい障害	講義・TBL	テキスト①p61~70を予習する
8	失語症候群の成り立ち	講義・TBL	テキスト①p74~75を予習する
9	失語症の古典的分類①	講義・TBL	テキスト①p76~85を予習する
10	失語症の古典的分類②	講義・TBL	テキスト①p86~99を予習する
11	失語症者のコミュニケーション訓練	講義・TBL	テキスト①p150~151を予習する
12	古典的分類以外の失語症	講義・TBL	テキスト①p101~140を予習する
13	失語症の言語聴覚療法の全体像	講義・TBL	テキスト①p144~149を予習する
14	失語症者とのコミュニケーションのとり方	講義・TBL	テキスト①p150~151を予習する
15	単位認定試験・解説	試験・解説	講義1~14を復習する

## ■受講上の注意

各講義のねらいに従ってテキストで予習・復習を行ってください。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

本講義で使用するテキスト)テキスト①藤田郁代, 立石雅子, 菅野倫子 編集『失語症学』(医学書院)

## ■備考

TBLとは、能動的学習を育成することを重視し、グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法です。

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である



# 失語症学Ⅱ

講師:高吉 進

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:2学年

必修選択:必修

## ■科目目標

- ・失語症の評価・診断の原則を理解する
- ・失語症検査の目的・方法を理解する
- ・失語症の訓練を理解する

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	失語症の評価・診断	講義・TBL	テキスト①p154～158
2	総合的失語症検査	講義・TBL	テキスト①p158～161を予習する
3	失語症の特定検査	講義・TBL	テキスト①p162～166を予習する
4	認知機能等の情報収集	講義・TBL	テキスト①p167～185を予習する
5	失語症の評価のまとめ	講義・TBL	テキスト①p178～188を予習する
6	失語症の回復過程	講義・TBL	テキスト①p192～200を予習する
7	言語治療の理論と技法①	講義・TBL	テキスト①p204～218を予習する
8	言語治療の理論と技法②	講義・TBL	テキスト①p219～234を予習する
9	言語治療の理論と技法②	講義・TBL	テキスト①p234～249を予習する
10	言語治療の実際	講義・TBL	テキスト①p252～303を予習する
11	活動・参加・社会支援	講義・TBL	テキスト①p305～332を予習する
12	言語治療のまとめ	講義・TBL	テキスト①p334～338を予習する
13	失語症研究の歴史	講義・TBL	テキスト①p340～349を予習する
14	総合的失語症検査の実施手順	講義・TBL	検査マニュアルを予習する
15	単位認定試験・解説	試験・講義	講義1～14を復習する

## ■受講上の注意

各講義のねらいに従ってテキストで予習・復習を行ってください。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

本講義で使用するテキスト①藤田郁代, 立石雅子 編集『失語症学』(医学書院) 各種検査マニュアル

## ■備考

TBLとは、能動的学習を育成することを重視し、グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法です。

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である

# 高次脳機能障害学 I

講師: 松尾 康弘

単位数: 1単位

時間数: 30時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

## ■ 科目目標

脳血管障害等で生じる後遺症は、運動・感覚障害だけでなく高次脳機能障害も多く認められる。本科目では、脳機能を踏まえ、認知・行為のメカニズム、神経心理学の概要を理解することを目標とする。

- ・神経心理学の基本概念が理解できる。
- ・背景症状および各種失認症・失行症の定義および病態が説明できる。
- ・背景症状および各種失認症・失行症の評価および訓練法について説明できる。

## ■ 科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	神経心理学および高次脳機能障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第1章を予習しておくこと
2	神経心理学および高次脳機能障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第1章を復習しておくこと
3	視覚認知およびその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第2章を予習しておくこと
4	視覚認知およびその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第2章を復習しておくこと
5	視空間認知とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第3章を予習しておくこと
6	視空間認知とその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第3章を復習しておくこと
7	聴覚認知とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第4章を予習しておくこと
8	聴覚認知とその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第4章を復習しておくこと
9	触覚認知とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第5章を予習しておくこと
10	触覚認知とその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第5章を復習しておくこと
11	身体意識・病態認知とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第6章を予習しておくこと
12	身体意識・病態認知の障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第6章を復習しておくこと
13	行為・動作のメカニズムとその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第7章を予習しておくこと
14	行為・動作のメカニズムとその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第7章を復習しておくこと
15	試験・解説	試験・解説	

## ■ 受講上の注意

本講義はPBLを中心として実施するため、事前の予習が必須となる。学習上の留意点を確認して予習しておくこと。また講義は基本的に2講義で1セットとなっており、1講義目はまとめ学習、2講義目はまとめた内容を他者へプレゼンテーションを行う。積極的なディスカッションを期待する。

## ■ 成績評価の方法

講義への参加態度(20%)・ワークシート提出(40%)・試験(40%)により総合的に評価し、本試験・再試験ともに60%/100%以上を合格とする。

## ■ テキスト参考書など

藤田郁代ら編集: 標準言語聴覚障害学高次脳機能障害第3版, 医学書院

## ■ 備考

PBL: Problem Based Learning(問題発見解決型学習)

## ■ 実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 高次脳機能障害学Ⅱ

講師:松尾 康弘

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:2学年

必修選択:必修

## ■科目目標

近年、脳機能研究が進み、古典的な高次脳機能障害(失行・失認)だけでなく、意識障害、注意障害、記憶障害、認知症といった全体的症状に対する支援において、言語聴覚士の期待が高まっている。本科目ではコミュニケーションに係る高次脳機能障害の理解ができることを目標とする。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	記憶とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第8章を予習しておくこと
2	記憶とその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第8章を復習しておくこと
3	前頭葉と高次脳機能障害の関係について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第9章を予習しておくこと
4	前頭葉と高次脳機能障害の関係についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第9章を復習しておくこと
5	数処理・計算とその障害について理解できる	講義・PBL	事前に資料を配布する。その資料を活用し、予習をすること。
6	数処理・計算の障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、復習しておくこと
7	脳梁離断症状について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第10章を予習しておくこと
8	脳梁離断症状についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第10章を復習しておくこと
9	認知症について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第11章を予習しておくこと
10	認知症についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第11章を復習しておくこと
11	脳外傷に伴う高次脳機能障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第12章を予習しておくこと
12	脳外傷に伴う高次脳機能障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第12章を復習しておくこと
13	認知コミュニケーション障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第13章を予習しておくこと
14	認知コミュニケーション障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第13章を復習しておくこと
15	試験・解説	試験・解説	

## ■受講上の注意

本講義はPBLを中心として実施するため、事前の予習が必須となる。学習上の留意点を確認して予習をしておくこと。また講義は基本的に2講義で1セットとなっており、1講義目はまとめ学習、2講義目はまとめた内容を他者へプレゼンテーションを行う。積極的なディスカッションを期待する。

## ■成績評価の方法

講義への参加態度(20%)・ワークシート提出(40%)・試験(40%)により総合的に評価し、本試験・再試験ともに60%/100%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

藤田郁代ら編集・標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害第3版, 医学書院

## ■備考

PBL: Problem Based Learning(問題発見解決型学習)

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 失語・高次脳機能障害学演習 I

講師:高吉 進

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:2学年

必修選択:必修

## ■科目目標

失語症・高次脳機能検査の概要・実施手順を理解する。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	SLTAの概要・実施手順	TBL	検査マニュアルを予習する
2	SLTAの概要・実施手順	TBL	検査マニュアルを予習する
3	SLTAの概要・実施手順	TBL	検査マニュアルを予習する
4	SLTAの概要・実施手順	TBL	検査マニュアルを予習する
5	SLTAの概要・実施手順	TBL	検査マニュアルを予習する
6	認知機能検査の概要・実施手順	TBL	検査マニュアルを予習する
7	認知機能検査の概要・実施手順	TBL	検査マニュアルを予習する
8	認知機能検査の概要・実施手順	TBL	検査マニュアルを予習する
9	認知機能検査の概要・実施手順	TBL	検査マニュアルを予習する
10	認知機能検査の概要・実施手順	TBL	検査マニュアルを予習する
11	認知機能検査の概要・実施手順	実技	検査を復習する
12	認知機能検査の概要・実施手順	実技	検査を復習する
13	認知機能検査の概要・実施手順	実技	検査を復習する
14	認知機能検査の概要・実施手順	実技	検査を復習する
15	単位認定試験・解説	試験・講義	講義1～14を復習する

## ■受講上の注意

各講義のねらいに合わせて、予習・復習を行ってください。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに実技20点、筆記試験80点の合計100点で60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

各種検査マニュアル

## ■備考

TBLとは、能動的学習を育成することを重視し、グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法です。

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 失語・高次脳機能障害学演習Ⅱ

講師:高吉 進、有川 瑛人

単位数:2単位

時間数:60時間

授業学年:3学年

必修選択:必修

## ■科目目標

- ・失語症・高次脳機能検査をマニュアルに則り、実践できる。
- ・検査結果を記録にまとめ、的確に評価できる。
- ・訓練のための必要な基本的臨床技能を身に付ける。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語治療の原則	講義・TBL	テキスト①p204～208を予習する
2	模擬症例評価①	講義・TBL	失語症・高次脳機能の評価を復習する
3	模擬症例評価②	講義・TBL	失語症・高次脳機能の評価を復習する
4	模擬症例評価③	講義・TBL	失語症・高次脳機能の評価を復習する
5	模擬症例評価④	講義・TBL	失語症・高次脳機能の評価を復習する
6	模擬症例評価⑤	講義・TBL	失語症・高次脳機能の評価を復習する
7	模擬症例評価⑥	講義・TBL	失語症・高次脳機能の評価を復習する
8	模擬症例評価⑦	講義・TBL	失語症・高次脳機能の評価を復習する
9	模擬症例評価⑧	講義・TBL	失語症・高次脳機能の評価を復習する
10	模擬症例評価⑨	講義・TBL	失語症・高次脳機能の評価を復習する
11	模擬症例評価⑩	講義・TBL	失語症・高次脳機能の評価を復習する
12	失語症の言語訓練①	講義・TBL	失語症の訓練を予習する
13	失語症の言語訓練②	講義・TBL	失語症の訓練を予習する
14	失語症の言語訓練③	講義・TBL	失語症の訓練を予習する
15	失語症の言語訓練④	講義・TBL	失語症の訓練を予習する
16	認知リハビリテーション①	講義・TBL	高次脳機能の訓練を予習する
17	認知リハビリテーション②	講義・TBL	高次脳機能の訓練を予習する
18	認知リハビリテーション③	講義・TBL	高次脳機能の訓練を予習する
19	認知リハビリテーション④	講義・TBL	高次脳機能の訓練を予習する
20	模擬症例訓練①	講義・TBL	失語症・高次脳機能の訓練を復習する

21	模擬症例訓練②	講義・TBL 失語症・高次脳機能の訓練を復習する
22	模擬症例訓練③	講義・TBL 失語症・高次脳機能の訓練を復習する
23	模擬症例訓練④	講義・TBL 失語症・高次脳機能の訓練を復習する
24	模擬症例訓練⑤	講義・TBL 失語症・高次脳機能の訓練を復習する
25	模擬症例訓練⑥	講義・TBL 失語症・高次脳機能の訓練を復習する
26	模擬症例訓練⑦	講義・TBL 失語症・高次脳機能の訓練を復習する
27	模擬症例訓練⑧	講義・TBL 失語症・高次脳機能の訓練を復習する
28	模擬症例訓練⑨	講義・TBL 失語症・高次脳機能の訓練を復習する
29	模擬症例訓練⑩	講義・TBL 失語症・高次脳機能の訓練を復習する
30	単位認定試験・解説	試験・講義 講義1～29を復習する

#### ■ 受講上の注意

各講義のねらいに従って、予習・復習をする。

#### ■ 成績評価の方法

本試験、再試験ともに実技20点、筆記試験80点の合計100点で60%以上を合格とする。

#### ■ テキスト参考書など

本講義で使用するテキスト①藤田郁代, 立石雅子 編集『失語症学』(医学書院)、②藤田郁代, 阿部晶子, 吉村貴子『高次脳機能障害学』(医学書院)

#### ■ 備考

TBLとは、能動的学習を育成することを重視し、グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法です。

#### ■ 実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 言語発達障害学 I

講師: 福元 恵美

単位数: 1単位

時間数: 30時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

## ■科目目標

定型の言語獲得過程を指標として、発達障害に伴う言語発達障害の特徴と支援、各種評価法の概要を理解することを目標とする。特に知的能力障害・自閉症スペクトラム障害・注意欠如/多動性障害・特異的言語発達障害・限局性学習障害・脳性麻痺・小児失語症について理解を深める。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語発達障害の概要について学ぶ。	講義	言語発達学の復習をしておくこと。
2	知的能力障害の特徴について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
3	知的能力障害の指導・支援について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
4	自閉症スペクトラム障害の特徴について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
5	自閉症スペクトラム障害の指導と支援について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
6	注意欠如/多動性障害の特徴について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
7	注意欠如/多動性障害の指導・支援について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
8	特異的言語発達障害の特徴を理解し、指導・支援の方法を学ぶ。	講義	予習・復習 小テスト実施。
9	限局性学習障害の特徴を理解し、指導・支援の方法を学ぶ。	講義	予習・復習 小テスト実施。
10	脳性麻痺・重複障害の特徴について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
11	脳性麻痺・重複障害の指導・支援について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
12	小児失語症の特徴を理解し、指導・支援の方法を学ぶ。	講義	予習・復習 小テスト実施。
13	情報収集の仕方や各種検査の概要を学ぶ。①	講義	予習・復習 小テスト実施。
14	情報収集の仕方や各種検査の概要を学ぶ。②	講義	予習・復習 小テスト実施。
15	単位認定試験・まとめ	試験、講義	これまでの復習をしておく。

## ■受講上の注意

予習として指定された教科書や資料の項目を読んでおくこと。  
授業活動の状況により上記の内容・講義順番を変更する場合もある。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60点/100点以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

標準言語聴覚障害学 言語発達障害学第3版, 医学書院  
その他の参考資料は随時配付する。

## ■備考

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 言語発達障害学Ⅱ

講師:雲井 未歎

単位数:2単位

時間数:40時間

授業学年:2学年

必修選択:必修

## ■科目目標

1. 学習障害(特異的読み書き障害)の定義、診断基準を理解し、説明することができる。
2. 学習障害(特異的読み書き障害)の検査(音読検査)を実施することができる。
3. 読み書き障害の原因とサブタイプについて理解し、状態像に応じた支援方法を考えることができる。
4. 各種発達障害の状態像・特徴について、言語機能・言語発達の諸側面との関連から理解する。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	インクルーシブ社会に向けた障害理解と支援の枠組みを理解し、支援者としての自己の在り方と目標を確認する	講義	リハビリテーション概念と社会保障の基本的内容の予習
2	学習障害の定義と分類、診断基準について学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
3	学習障害の原因と脳の機能障害部位について学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
4	学習障害(特異的読み障害)の診断手順と音読検査の実施方法について学ぶ(症例1の分析)	講義・GW	グループ別の学習・発表を含む
5	学習障害(特異的読み障害)の診断手順と音読検査の実施方法について学ぶ(症例2の分析)	講義・GW	グループ別の学習・発表を含む
6	学習障害のサブタイプと臨床症状の多様性について学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
7	読み書きの認知的機序と読み書き困難の背景について学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
8	学習障害児のアセスメントと治療的介入の方法・内容について学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
9	読み書きの学習支援教材の特徴と活用方法について学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
10	学習障害児への読み書きの学習支援方法について学ぶ(ひらがなの読み書き)	講義	教科書・資料の予習・復習
11	学習障害児への読み書きの学習支援方法について学ぶ(漢字の読み書き)	講義	教科書・資料の予習・復習
12	ADHDやASDを合併する学習障害の事例について学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
13	特別支援教育における学習障害への対応とRTIモデルについて学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
14	言語の多様な機能的側面と知的障害における言語媒介学習について学ぶ	講義・GW	グループ別の学習・発表を含む
15	発達障害児(特にADHD)における実行機能と言語・社会的発達について学ぶ	講義・GW	グループ別の学習・発表を含む
16	発達障害児(特にADHDとASD)におけるソーシャルスキルの支援について学ぶ	講義・GW	グループ別の学習・発表を含む
17	発達障害児(特にASD)における言語・コミュニケーション障害と心の理論について学ぶ	講義・GW	グループ別の学習・発表を含む
18	発達障害児(特にASD)における弱い中枢性統合と構造化による支援について学ぶ	講義・GW	グループ別の学習・発表を含む
19	二次障害のリスクと予防的対応について学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
20	単位認定試験・解説	試験	



■受講上の注意

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

特異的発達障害診断・治療のための実践ガイドライン-わかりやすい診断手順と支援の実際-診断と治療社

■備考

■実務経験

# 言語発達障害学Ⅲ

講師: 福元 恵美

単位数: 1単位

時間数: 30時間

授業学年: 3学年

必修選択: 必修

## ■科目目標

- ・言語発達障害の医学的背景について学ぶ。(特に発生異常、周産期障害、出生後障害について)
- ・こどもの全体像の把握、問題点の抽出のために必要な評価と基本的なアプローチ方法について学ぶ。特に言語発達支援に必要な考え方を理解する。
- ・事例を用い、言語発達障害児とその家族への支援についてグループワークを通して自分の意見を述べられるようになる。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語発達学・言語発達障害学Ⅰの復習。	講義	言語発達学・言語発達障害学Ⅰの復習をしておく。
2	遺伝子病・染色体異常症・胎児病について学ぶ。	講義	小テストを実施。
3	周産期障害・出生後障害について学ぶ。	講義	小テストを実施。
4	発達段階に応じた指導について学ぶ。 (前言語期・幼児前期・幼児後期・学童期)	講義・グループワーク	グループワークでは自分の考えを伝え、相手の話をよく聞き、グループとしての意見をまとめるように努める。
5	自閉症スペクトラム障害児・者への支援、SSTについて学ぶ。①	講義	復習をしておく。
6	自閉症スペクトラム障害児・者への支援、SSTについて学ぶ。②	講義	復習をしておく。
7	脳性麻痺児・者への支援について学ぶ。①	講義	復習をしておく。
8	脳性麻痺児・者への支援について学ぶ。②	講義	復習をしておく。
9	指導・支援の方法と原則について学ぶ。 (発達論的アプローチ、行動療法、インリアルアプローチについて)	講義	復習をしておく。
10	指導・支援の方法と原則について学ぶ。 (固りハ式(S-S法)言語発達遅滞検査に基づく指導、太田ステージについて)	講義	復習をしておく。
11	ICT支援について、多言語児童生徒の学習支援について学ぶ。	講義	復習をしておく。
12	環境調整・地域連携について学ぶ。	講義	復習をしておく。
13	事例検討① (事例を用い全体像の把握、問題点抽出、支援方法について考える)	講義・グループワーク	グループワークでは自分の考えを伝え、相手の話をよく聞き、グループとしての意見をまとめるように努める。
14	事例検討② (事例を用い全体像の把握、問題点抽出、支援方法について考える)	講義・GW	グループワークでは自分の考えを伝え、相手の話をよく聞き、グループとしての意見をまとめるように努める。
15	単位認定試験・まとめ	試験・解説	これまでの講義の復習をしておく。

## ■受講上の注意

言語発達障害学の総括。言語発達学・発達心理学・認知学習心理学の知識を復習する。  
授業活動の状況により上記の内容・講義順番を変更する場合もある。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60点/100点以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

言語発達障害学第3版, 医学書院  
その他の参考資料は随時配布する。

## ■備考

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員により実施する。

# 言語発達障害学演習 I

講師:川路 麻里亜、南 久美、福元 恵美

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:2学年

必修選択:必修

## ■科目目標

言語発達障害領域に関する職種間連携を学び、症例を用いて評価演習・支援計画演習を行う。

本講義では、特に①機能的構音障害や異常構音に対する構音訓練ができるようになる。②国リハ式<S-S法>言語発達遅滞検査を用いた評価が行えるようになる。③吃音に対する評価・訓練の理解。④PVT-R絵画語彙発達検査ができるようになることを目標とする。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	機能的構音障害について復習。 機能的構音障害に対する構音訓練を理解する。	講義・GW	予習・復習
2	機能的構音障害に対する訓練が行えるようになる。	演習・GW	予習・復習
3	異常構音について復習。 異常構音に対する構音訓練を理解する。	講義・GW	予習・復習
4	異常構音に対する構音訓練が行えるようになる。	講義・GW	予習・復習
5	国リハ式(S-S法)言語発達遅滞検査について概要を理解する。	講義・演習	予習・復習 必要な検査道具・物品の準備
6	国リハ式(S-S法)言語発達遅滞検査の実施ができるようになる。①	演習	予習・復習 必要な検査道具・物品の準備
7	国リハ式(S-S法)言語発達遅滞検査の実施ができるようになる。②	演習	予習・復習 必要な検査道具・物品の準備
8	国リハ式(S-S法)言語発達遅滞検査の結果からまとめができるようになる。	演習	予習・復習 教材作成に必要な物品の準備
9	吃音について概要を復習。①	講義	発声発語障害学Ⅱの復習をしておく。
10	吃音について概要を復習。②	講義	発声発語障害学Ⅱの復習をしておく。
11	吃音の症例をもとに評価・訓練を理解する。①	講義・GW・演習	発声発語障害学Ⅱの復習をしておく。
12	吃音の症例をもとに評価・訓練を理解する。②	講義・GW・演習	発声発語障害学Ⅱの復習をしておく。
13	PVT-R絵画語彙発達検査ができるようになる。①	演習	検査マニュアルを準備
14	PVT-R絵画語彙発達検査ができるようになる。②	演習	検査マニュアルを準備
15	単位認定試験、解説	試験、講義	これまでの復習をしておく

## ■受講上の注意

障害特性を十分理解して、対象となる子どものイメージができていないと難しい作業となります。発声発語障害学・言語発達障害学の復習・予習をしておくこと。授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

- ・国リハ式(S-S法)言語発達遅滞検査マニュアル
  - ・PVT-R絵画語彙発達検査マニュアル
- その他の参考資料は随時配付する。

## ■備考

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 言語発達障害学演習Ⅱ

講師: 福元 恵美

単位数: 2単位

時間数: 60時間

授業学年: 3学年

必修選択: 必修

## ■科目目標

言語発達障害児の評価は1)ことばに関連する諸側面の状態を明らかにする。2)障害の原因の推定。3)具体的目標の設定。4)長期的展望を提起するために行われる。

本科目では正常発達など情報収集に必要な知識をもとに、適切な検査を選択し、実施できることを目標にする。実際に子ども(幼児)に対してことばの発達スクリーニングを行い、評価のまとめを実施する。

また、子どもや保護者、周囲の方に必要な支援や訓練方法等も考えられる力を身につけられるようにする。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	きらきらチェック(ことばの発達スクリーニング)について理解する。	講義	言語発達について復習しておく。
2	初回インテーク	講義・演習	講義と演習を組み合わせで行う。
3	質問-応答関係検査の概要を理解する。 検査が行えるようになる。	講義・演習	講義と演習を組み合わせで行う。
4	質問-応答関係検査演習	演習	質問-応答関係検査について復習しておく。
5	質問-応答関係検査演習	演習	質問-応答関係検査について復習しておく。
6	構音検査を実施できるようになる。	演習	構音検査の復習を行う。
7	構音検査を実施できるようになる。	演習	構音検査の復習しておく。
8	仮名单語の音読を被検者にとり、反応に合わせて対応ができるようになる。	演習	
9	質問-応答関係検査、構音検査、仮名单語の音読課題を被検者にとれるようになる。	演習	各検査、課題の練習を行う。
10	しらゆきこども園での検査演習①	演習	質問-応答関係検査、構音検査、音読の仕方など復習・練習しておくこと。
11	しらゆきこども園での検査演習②	演習	質問-応答関係検査、構音検査、音読の仕方など復習・練習しておくこと。
12	しらゆきこども園での検査演習③	演習	質問-応答関係検査、構音検査、音読の仕方など復習・練習しておくこと。
13	しらゆきこども園での検査演習④	演習	質問-応答関係検査、構音検査、音読の仕方など復習・練習しておくこと。
14	検査結果のまとめができるようになる。①	演習	個人情報漏洩に注意する。
15	検査結果のまとめができるようになる。②	演習	個人情報漏洩に注意する。
16	検査結果の解釈ができるようになる。①	GW	検査結果の内容を把握しておく。
17	検査結果の解釈ができるようになる。②	GW	検査結果の内容を把握しておく。
18	公開講座(ことばの発達チェック)について目的を理解する。	講義	定型のことばの発達について復習しておく。
19	質問-応答関係検査(全部・簡易版)の実施ができる。①	演習	質問-応答関係検査の復習しておく。
20	質問-応答関係検査(全部・簡易版)の実施ができる。②	演習	質問-応答関係検査の復習しておく。

21	PVT-R絵画語彙発達検査の実施ができる。①	演習	PVT-R絵画語彙発達検査の復習をしておく。
22	PVT-R絵画語彙発達検査の実施ができる。②	演習	PVT-R絵画語彙発達検査の復習をしておく。
23	被検者(小児)に対して実際に検査がとれるようになる。①	演習	これまでの検査の復習をしておく。
24	被検者(小児)に対して実際に検査がとれるようになる。②	演習	これまでの検査の復習をしておく。
25	被検者(小児)に対して実際に検査がとれるようになる。③	演習	これまでの検査の復習をしておく。
26	被検者(小児)に対して実際に検査がとれるようになる。④	演習	これまでの検査の復習をしておく。
27	検査結果から評価のまとめができるようになる。①	講義・GW	復習をしておく。
28	検査結果から評価のまとめができるようになる。②	講義・GW	復習をしておく。
29	検査結果から評価のまとめができるようになる。③	講義・GW	復習をしておく。
30	担当児の検査結果から評価のまとめを行う。 レポートを作成する。	単位認定試験・解説	これまで実施した内容の復習を行う。

#### ■受講上の注意

学外演習も兼ねているため、言葉遣いや身なりに特に気をつけること。  
個人情報保護について十分理解し取り組むこと。  
授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

#### ■成績評価の方法

きらきらチェック時の内容と秋の公開講座(ことばのチェック)演習それぞれ評価を行い、評価点を合算する。  
・きらきらチェック実施時の様子(服装・態度・検査手順)10点/100点  
・きらきらチェック評価まとめ(評価内容・考察・誤字脱字等)60点/100点  
・公開講座(ことばのチェック)演習時のレポート30点/100点  
上記の合計で60点/100点以上を合格とする。

#### ■テキスト参考書など

随時資料を配布する。

#### ■備考

#### ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 発声発語障害学 I

講師: 福元 恵美

単位数: 1単位

時間数: 20時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

## ■科目目標

言語聴覚障害学のうち、小児から成人までの発声発語障害領域を学ぶ。

- ①発声発語障害に関する基礎的な知識や病態を理解する。
- ②小児の構音獲得について学び、それを指標として機能性構音障害の概要を理解する。
- ③新版構音検査が実施でき、評価のまとめがおこなえるようになる。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	話しことば(Speech)の障害と言語聴覚士の関わりについて理解する。	講義 復習	
2	発達途上の構音の誤りと機能性構音障害について理解する。	講義 復習	
3	異常構音(声門破裂音・咽頭摩擦音・咽頭破裂音・側音化構音・口蓋化構音・鼻咽腔構音)の特徴を理解する。 ①	講義 復習	
4	異常構音(声門破裂音・咽頭摩擦音・咽頭破裂音・側音化構音・口蓋化構音・鼻咽腔構音)の特徴を理解する。 ②	講義 復習	
5	新版構音検査の概要を知り、検査の実施ができるようになる。①	講義・演習 復習	
6	新版構音検査の概要を知り、検査の実施ができるようになる。②	講義・演習 復習	
7	新版構音検査の評価のまとめができるようになる。①	講義・演習 復習	
8	新版構音検査の評価のまとめができるようになる。②	講義・演習 復習	
9	構音訓練の適応と注意点について理解する。	講義・演習 復習	
10	単位認定試験・解説	試験・講義	これまでの復習をしておく。

## ■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

## ■成績評価の方法

本試験・再試験において60点/100点以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

- ・標準言語聴覚障害学 発声発語障害学 医学書院
- ・適宜資料を配布する。

## ■備考

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 発声発語障害学Ⅱ

講師:川元 真由美

単位数:1単位

時間数:20時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

## ■科目目標

発声発語障害のなかでも流暢性障害(吃音)に関する理論と技術を学ぶ。吃音は幼児期に始まり発達・学習・環境などの多要因が関与すると考えられているものの、他の言語聴覚障害の領域に比べると未だ解明されていないことも多い。正しい知識を有し、患者様やご家族と向き合える知識及び技術を習得することを目標とする。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	吃音の定義を理解した上で、吃音者が抱える問題について言語面・心理面の症状を踏まえ説明することができる。	講義・演習	事前学習①*事前学習②の提示 グループワークでは積極的に活動を行う。
2	吃音の概要1(症状) 吃音症状について説明することができる。	講義・グループワーク	小テスト*事前学習③の提示 グループワークでは積極的に活動を行う。
3	吃音の概要2(メカニズム) 吃音のメカニズムについて説明できる。	講義・演習	小テスト*事前学習④の提示 グループワークでは積極的に活動を行う。
4	評価1(検査の概要・進展段階) 吃音評価の概要を把握し、進展段階について説明することができる。	講義・演習	小テスト*事前学習⑤の提示 グループワークでは積極的に活動を行う。
5	評価2(吃音検査法 第2版) 吃音検査法の目的を把握し、年代別の評価法を学ぶ。	講義・グループワーク	小テスト*事前学習⑥の提示 グループワークでは積極的に活動を行う。
6	評価3(その他) 年代別の評価ポイントを理解する。	講義・演習	小テスト*事前学習⑦の提示 グループワークでは積極的に活動を行う。
7	吃音の指導・訓練1(直接訓練・間接訓練) 各訓練の目的を把握し訓練内容について説明できる。	講義・演習	小テスト*事前学習⑧の提示 グループワークでは積極的に活動を行う。
8	吃音の指導・訓練2(環境調整) 環境調整の目的やアプローチの内容について説明できる。	講義・演習	小テスト*事前学習⑨の提示 グループワークでは積極的に活動を行う。
9	吃音の指導・訓練3(セルフヘルプグループ) セルフヘルプグループについて説明できる。	講義・演習	小テスト グループワークでは積極的に活動を行う。
10	終講試験およびまとめ	試験	

## ■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

## ■成績評価の方法

授業への参加態度及び課題(30%)・単位認定試験(70%)により総合的に判断し、本試験・再試験ともに60点/100点以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

言語聴覚療法技術ガイド, 文光堂  
標準言語聴覚障害学 発声発語障害学 第3版, 医学書院  
※適宜資料を配布する

## ■備考

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 発声発語障害学Ⅲ

講師:徳永 弘樹

単位数:1単位

時間数:20時間

授業学年:2学年

必修選択:必修

## ■科目目標

発声発語障害のなかでも、口腔・中咽頭がん等や口蓋裂にて生じる器質性構音障害を理解する。  
器質性構音障害の評価の内容や実施方法を理解する。  
異常構音に関する耳のトレーニングを実施し理解を深める。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	口唇口蓋裂に関する基礎知識	講義	
2	口唇口蓋裂に関する言語の問題点	講義	
3	口唇口蓋裂のチーム医療の流れ	講義	
4	口蓋裂言語検査	講義	
5	口蓋裂言語検査	演習	
6	構音障害の評価と訓練の流れ	講義	
7	言語評価・報告書	講義	
8	系統的構音訓練の手順	講義	
9	構音障害の特徴・聞き取り	演習	
10	試験・解説(あるいはまとめ)	試験	

## ■受講上の注意

### ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

### ■テキスト参考書など

適宜資料を配布する。

### ■備考

### ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。



# 発声発語障害学Ⅳ

講師: 戌亥 啓一

単位数: 1単位

時間数: 20時間

授業学年: 2学年

必修選択: 必修

## ■科目目標

本講義では、発声発語障害の中でも、主に喉頭病変、発声の困難さにより生じる音声障害について病態と訓練方法を理解する。呼吸器についての知識を基本に、発声発語にかかわる諸器官の構造・機能への理解が肝心となる。発声機能検査、音声(音響)分析検査、発声に関する多彩な訓練法を経験し理解を深めることが目標となる。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	発声にかかわる器官の構造を発声機能の視点で理解する	GW・講義	呼吸器、特に喉頭周囲の構造について復習しておく
2	声の質について知り、声の質の評価法を知る。 音声障害の定義について理解する。	講義・演習	発声の多角的な表現方法と主観的・客観的な発声の評価方法の概要を整理する
3	声帯を中心とした喉頭の(間接的・直接的)観察方法を知り、観察方法による描出方法の違いから喉頭周辺の構造について理解を深める	講義・演習	機器の種類・名称と喉頭の描出方法の違いを整理する
4	音声障害の原因と分類および症状について理解を深める 音声障害の代表的な疾患について理解を深める	GW・講義	分類についてカテゴリーから理解し、細部については徐々に整理していく
5	音声障害の原因疾患について全体を知る 音声障害の指導・訓練と治療(手術、薬剤含む)について概要を知る	GW・講義	疾患や指導・訓練法概要の把握に努め演習時に再度確認・整理していく
6	症状対処的音声治療を経験し理解を深める	講義・演習	喉頭周囲の構造と状態(病態)をイメージしながら行う
7	包括的音声治療を経験し理解を深める	講義・演習	喉頭周囲の構造と状態(病態)をイメージしながら行う
8	無喉頭発声の種類と特徴について理解を深める	GW・講義	無喉頭後の状態に応じてどのように手段が変化するかを前提にすると特徴の理解が容易になる
9	無喉頭発声の訓練と関連知識	GW・講義	実物を用いることができるものも多いが、無喉頭状態の再現が困難な点を理解し、自身との違いをイメージする
10	これまでの講義のまとめと理解度の確認	試験・まとめ	

## ■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

シリーズ監修 藤田 郁代: 標準言語聴覚障害学 発声発語障害学 第3版, 医学書院  
配付資料

## ■備考

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 発声発語障害学Ⅴ

講師:小牧 祥太郎

単位数:1単位

時間数:20時間

授業学年:2学年

必修選択:必修

## ■科目目標

コミュニケーション障害分野において特に発現率が多いDysarthriaを対象に、基礎知識の習得、生じる疾患を理解して、運動障害による発話障害を理解し、Dysarthriaのタイプ分類について理解する。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	Dysarthriaの病態を理解する。症例VTRよりDysarthriaの全体像について学ぶ。	講義	特になし
2	Speechの仕組みの理解を深める(復習)。 Dysarthriaのタイプ分類の考え方を理解する。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 (参照するページは講義の際に案内を行う。)
3	上位運動ニューロン障害タイプのDysarthriaについて理解する(皮質延髄路両側性障害について)。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 (参照するページは講義の際に案内を行う。)
4	上位運動ニューロン障害タイプのDysarthriaについて理解する(皮質延髄路一側性障害について)。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 (参照するページは講義の際に案内を行う。)
5	下位運動ニューロン障害タイプによるDysarthriaについて学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 (参照するページは講義の際に案内を行う。)
6	仮性球麻痺・球麻痺の違いについて理解する(病態・症状について)。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 (参照するページは講義の際に案内を行う。)
7	錐体外路障害タイプによるDysarthriaについて学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 (参照するページは講義の際に案内を行う。)
8	小脳障害タイプによるDysarthriaについて学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 (参照するページは講義の際に案内を行う。)
9	運動系多重障害タイプによるDysarthriaについて学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 (参照するページは講義の際に案内を行う。)
10	試験・解説(あるいはまとめ)	試験・講義	

## ■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

西尾正輝著「ディサースリア臨床標準テキスト 第2版」医歯薬出版株式会社  
病気が見える Vol.7 メディックメディア  
その他、適宜資料を配布する。※テキストを変更する場合は速やかに連絡を行います。

## ■備考

講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 発声発語障害学演習

講師:小牧 祥太郎

単位数:2単位

時間数:40時間

授業学年:3学年

必修選択:必修

## ■科目目標

コミュニケーション障害分野において特に発現率が多いDysarthriaの発話の異常性を理解し、運動障害、神経学的特徴を加味しDysarthriaのタイプ分類の判定方法について学ぶ。

その後、標準ディサースリア検査(以下、AMSD)を通して発声発語器官評価の具体的な実施方法を学び、治療にあたり発声発語器  
官への介入方法、発話の調整手法を理解する。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	Dysarthriaの障害構造に関して、発声発語障害学Ⅴで学んだ内容をもとに復習を行う。	講義・演習	確認問題を実施し習熟状況の把握を行う。
2	Dysarthriaの発話特徴について全体像をつかむ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。 講義中、適宜リスニングを実施します。
3	Dysarthriaの発話特徴について運動障害タイプに応じた特徴をつかむ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。 講義中、適宜リスニングを実施します。
4	医学的診断・発話特徴・神経学的特徴からDysarthriaを捉える。	講義・演習	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 (参照するページは講義の際に案内を行う。)
5	模擬症例を通して、運動障害の特徴、発話特徴などよりタイプ分類について考察する。	講義・演習	特になし
6	Dysarthriaへのアプローチについて概要をつかみ、タイプ別の介入方法を捉える。	講義・演習	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 (参照するページは講義の際に案内を行う。)
7	発声発語器官への評価・介入の意義を理解し、AMSDの検査内容の構成、実施概要を学ぶ。 また、定性的な評価、定量的な評価の側面について理解する。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
8	AMSDを実際に行い、評価の視点と状態の解釈を行う(呼吸機能について)。	講義・演習	AMSDに必要な道具を準備すること(道具の詳細は講義内にて述べる)。
9	AMSDを実際に行い、評価の視点と状態の解釈を行う(発声機能・鼻咽腔閉鎖機能について)。	講義・演習	AMSDに必要な道具を準備すること(道具の詳細は講義内にて述べる)。
10	AMSDを実際に行い、評価の視点と状態の解釈を行う(口腔構音機能(運動範囲・反射の評価)について)。	講義・演習	AMSDに必要な道具を準備すること(道具の詳細は講義内にて述べる)。
11	AMSDを実際に行い、評価の視点と状態の解釈を行う(口腔構音機能(交互反復・筋力)について)。	講義・演習	AMSDに必要な道具を準備すること(道具の詳細は講義内にて述べる)。
12	AMSDを実際に行い、評価の視点と状態の解釈を行う(補助検査とその他の補足説明)。	講義・演習	AMSDに必要な道具を準備すること(道具の詳細は講義内にて述べる)。
13	発声発語器官(呼吸機能)を理解し、介入方法について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。 実習室にて講義を実施予定。
14	発声発語器官(発声機能)を理解し、介入方法について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。 実習室にて講義を実施予定。
15	発声発語器官(鼻咽腔閉鎖機能・口腔構音機能)を理解し、介入方法について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。 実習室にて講義を実施予定。
16	発話速度の調整法と、訓練時の課題音(対照生成ドリルなど)の設定について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
17	模擬症例を想定し、評価視点の共有や訓練プログラムの立案についてCase Study(症例検討)を行う。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
18	模擬症例を想定し、発声発語器官検査としてAMSDの実技試験を行う。	講義・演習	AMSDの必要物品を準備し、実習着を着用する。 ※物品準備も実技試験の採点対象とする。
19	模擬症例を想定し、発声発語器官検査としてAMSDの実技試験を行う。 検査実施後にフィードバックを行い改善事項等の共有を行う。	講義・演習	AMSDの必要物品を準備し、実習着を着用する。 ※物品準備も実技試験の採点対象とする。
20	試験・解説(あるいはまとめ)	試験・講義	

■ 受講上の注意

授業活動の状況や実習室の利用状況に応じて、上記の内容や順番は変更する場合がある。  
講義内容によっては徒手的な介入を行う為、講義前後は入念な手指の清潔管理に努めること。

■ 成績評価の方法

AMSD実技試験とその後のレポートで30%相当、期末の単位認定試験にて70%相当とし、上記2つにおいて、本試験・再試験共に60%以上を合格とする。  
(具体的な割合については講義内にて述べる)

■ テキスト参考書など

ディサースリア臨床標準テキスト 第2版 医歯薬出版株式会社  
標準ディサースリア検査 インテルナ出版  
その他、適宜資料を配布する。

■ 備考

特になし

■ 実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 嚥下障害学 I

講師:小牧 祥太郎

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:2学年

必修選択:必修

## ■科目目標

昨今、高齢社会に伴い嚥下障害は社会的な問題となっている。言語聴覚士は、医師または歯科医師の指示のもとに、診療の補助として嚥下訓練を実施でき、嚥下訓練の実施が法的に明記されている唯一の専門職である。本講義では、摂食・嚥下の基礎である解剖・生理から嚥下モデル、嚥下障害を生じうる疾患や病態について学ぶ。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	摂食嚥下障害の概要を理解する(嚥下障害と取り巻く状況について)。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
2	嚥下障害の理解に必要な解剖を理解する(口腔・咽頭を中心に)。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
3	嚥下障害の理解に必要な解剖を理解する(喉頭・食道を中心に)。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
4	咀嚼の生理と神経機構について理解する。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
5	嚥下モデルについて理解する(モデルの概要について)。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。 動画サイトなどで嚥下モデルを見ておくことを推奨する。
6	嚥下モデルについて理解する(従来モデル(3、4期モデル)、臨床モデル(5期モデル))。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。 動画サイトなどで嚥下モデルを見ておくことを推奨する。
7	嚥下モデルについて理解する(プロセスモデル)。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。 動画サイトなどで嚥下モデルを見ておくことを推奨する。
8	摂食嚥下に関わる神経機構について理解する(嚥下反射・呼吸と咳嗽反射)。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
9	年齢による嚥下状態の変化を理解する(小児嚥下(発達の变化)、高齢者嚥下(機能低下、服薬の影響)について)。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
10	嚥下障害の誤嚥の症状と分類について理解する。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
11	嚥下障害を起こす疾患について理解する(運動障害性(神経性))。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
12	嚥下障害を起こす疾患について理解する(器質性・機能的)。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
13	高次脳機能障害、認知症 etc の問題に伴う摂食・嚥下障害について理解する。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
14	摂食・嚥下障害の合併症(誤嚥性肺炎・脱水・低栄養 etc)について理解する。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。 嚥下モデルについてレポートを課す場合がある。
15	試験・解説(あるいはまとめ)	試験・講義	

## ■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

言語聴覚士のための摂食・嚥下障害学 医歯薬出版株式会社  
その他参考資料は随時配布を行う。

## ■備考

講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 嚥下障害学Ⅱ

講師:小牧 祥太郎

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:3学年

必修選択:必修

## ■科目目標

本講義では、嚥下造影検査、嚥下内視鏡検査を中心とする摂食嚥下障害の各種検査法と評価法について学び、適切な治療方針を選択できるようになる事を目標とする。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	摂食嚥下障害について復習を行う(主に嚥下時動態などの基礎について)。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。 2学年次の講義である「嚥下障害学Ⅰ」の内容について十分復習を行っておくこと。
2	嚥下評価における情報収集(基本的情報・医学的情報)、嚥下器官検査(構音器官)について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
3	嚥下器官検査(音声所見)、理学的所見、神経学的所見(反射)について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
4	神経学的所見(脳神経)、簡便な検査(水飲み検査、反復唾液飲み検査など)について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
5	呼吸動態の評価(酸素飽和度状態の見方)、嚥下誘発検査について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
6	唾液分泌検査、特殊な状況下での評価(着色水テスト等)について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
7	不顕性誤嚥を測れる検査、研究的意味合いの強い検査について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
8	嚥下造影検査の概要とその適応について、また、使用機器について学ぶ。 嚥下造影検査の読影方法を理解し、異常所見とその解釈について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
9	症例ごとの嚥下造影検査の異常所見について学び、説明を実施する。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。 グループに分かれてCase studyを実施予定であり、また、その検討内容についてレポートを課すことを予定している。
10	嚥下造影検査装置について実際の機器の見学を行う。また、その際に造影検査のリスク等について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。 診療放射線学科教員の協力のもと、嚥下造影にて使用する機器の見学を行う。
11	嚥下内視鏡検査を理解し、嚥下造影検査との観察項目の比較について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
12	研究的側面の強い検査について学ぶ。 頸部聴診法について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
13	摂食嚥下障害の重症度分類について学ぶ(藤島のグレード等を参考に)。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
14	摂食嚥下障害のリハビリテーションの概要と訓練介入の進め方について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
15	試験・解説(あるいはまとめ)	試験・講義	

## ■受講上の注意

授業活動の状況や実習室の利用状況に応じて、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

言語聴覚士のための摂食・嚥下障害学 医歯薬出版株式会社  
その他参考資料を随時配布する。

## ■備考

講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 聴覚障害学 I

講師: 成 亥 啓一

単位数: 2単位

時間数: 40時間

授業学年: 1学年

必修選択: 必修

## ■ 科目目標

聴覚障害は目に見えない、他者に気づかれにくい障害である。そのため障害についての理解や当事者の心中を推し量ることは難しい。言語聴覚士は聴覚障害に対する専門職であり、この分野における各方面からの期待は大きく、言語聴覚士を目指す本講義の受講者には聴覚領域に対して興味と関心をもってもらえることを目標の1つとしている。

受講者においては、聴覚の仕組みを理解し、その上で聴覚障害の種類と特性を知り、言語聴覚士として各種聴覚検査や助言、指導、訓練を行うための知識を身につけることが就業までの目的となる。本講義は導入の位置づけにあり、聴覚領域の講義は上位学年も含め複数の設定されていることから、まずは本講義を通して基礎的な理解を十分に得ることを目標とする。

## ■ 科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	聴覚障害の基礎知識について理解を深める (1) 耳が音を感じる仕組みと構造	GW・講義	他の講義や教科書であいまいな点を1つずつ解消していく
2	聴覚障害の基礎知識について理解を深める (2) 難聴とは？音と聴覚器と伝導路について	GW・講義	全体像から局所の理科愛に進むようにする
3	補装具や補聴援助機器から聞こえや聴覚についての理解を深める	演習	試聴前にイメージをもちギャップを楽しむ
4	聴器の発達と脳科学からの視点について理解を深める	GW・講義	発達の知識との関連性を意識して抽出する
5	頻度の高い難聴のタイプとその特徴による影響について理解を深める	GW・講義	聴器の構造と障害・症状が密接に関係していることを知る
6	聴覚障害のさまざまな原因と影響について理解を深める	GW・講義	聴器の構造と障害・症状が密接に関係していることを知る
7	聴覚の検査の種類や特徴を把握し今後の講義につなげる	講義・演習	聴器の構造や障害のタイプが密接に関係していることを知る
8	代表的な聴覚検査の体験を通して聴覚とその障害についての理解を深める (1)	演習	操作・体験から学ぶことも多いので、メモを取るなど疑問・発見を楽しむ
9	代表的な聴覚検査の体験を通して聴覚とその障害についての理解を深める (2)	演習	操作・体験から学ぶことも多いので、メモを取るなど疑問・発見を楽しむ
10	代表的な聴覚検査の体験を通して聴覚とその障害についての理解を深める (3)	演習	操作・体験から学ぶことも多いので、メモを取るなど疑問・発見を楽しむ
11	聴覚障害と視覚的コミュニケーションについて理解を深める (1)	GW・講義	体験から聴覚障害児・者の生活上の思いを想像し、考察をしてみる
12	聴覚障害と視覚的コミュニケーションについて理解を深める (2)	GW・講義	体験から聴覚障害児・者の生活上の思いを想像し、考察をしてみる
13	聴覚障害と視覚的コミュニケーションについて理解を深める (3)	GW・講義	体験から聴覚障害児・者の生活上の思いを想像し、考察をしてみる
14	日本語の音と聞こえについて理解を深める	GW・講義	日本語を詳しく知ることの重要性を知り、その科学的特徴を整理する
15	日本語の音の聞き取りづらさや聞き間違いから聴覚障害の理解を深める	GW・講義	日本語を詳しく知ることの重要性を知り、その科学的特徴を整理する
16	両耳聴の効果から聴覚の機能について理解を深める	GW・講義	聴覚のさまざまな機能についてまとめる
17	代表的な聴覚検査の体験を通して聴覚とその障害についての理解を深める (4)	演習	操作・体験から学ぶことも多いので、メモを取るなど疑問・発見を楽しむ
18	代表的な聴覚検査の体験を通して聴覚とその障害についての理解を深める (5)	演習	操作・体験から学ぶことも多いので、メモを取るなど疑問・発見を楽しむ
19	代表的な聴覚検査の体験を通して聴覚とその障害についての理解を深める (6)	演習	操作・体験から学ぶことも多いので、メモを取るなど疑問・発見を楽しむ
20	終講試験とまとめ	筆記試験	

■ 受講上の注意

授業活動の状況によって、上記の内容や順番を変更する場合があります。

■ 成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

■ テキスト参考書など

病気が見える 耳鼻咽喉科 vol.13 第1版, メディックメディア  
配付資料

■ 備考

■ 実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。



# 聴覚障害学Ⅱ

講師: 戌亥 啓一、徳永 弘樹、良久 万里子、竹松 知紀

単位数: 2単位

時間数: 40時間

授業学年: 2学年

必修選択: 必修

## ■ 科目目標

聴覚検査への理解を深める。

演習を通して聴覚検査の流れや実施方法の詳細を理解する。

・各種聴覚検査についてその目的や特徴を把握する。

・音場、幼児聴力検査、自覚・他覚的検査など目的別検査の分類に精通する。

・特に標準純音聴力検査を中心に各種検査に対する基礎的手技の習熟を目指す。

・視覚聴覚二重障害者を理解し、視覚聴覚二重障害者とのコミュニケーションスキルを高める。

・視覚聴覚二重障害者の困難やニーズに対してのサポート力を高める。

## ■ 科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	聴覚検査の種類	講義	
2	純音聴力検査について	講義	
3	純音聴力検査	演習	
4	純音聴力検査(マスキング)	演習	
5	語音聴力検査について	講義	
6	語音聴力検査(語音了解閾値検査)	演習	
7	語音聴力検査(語音明瞭度検査)	演習	
8	試験(中間)	試験	
9	視覚聴覚二重障害の定義	講義	予習・復習を可能な範囲で行う。
10	視覚聴覚二重障害者のコミュニケーション手段	講義	予習・復習を可能な範囲で行う。
11	視覚聴覚二重障害者の困難とニーズ	講義	予習・復習を可能な範囲で行う。
12	視覚聴覚二重障害者の実態	講義	予習・復習を可能な範囲で行う。
13	視覚聴覚二重障害者の移動介助方法	講義・演習	予習・復習を可能な範囲で行う。
14	視覚聴覚二重障害者の福祉サービス・関連機関との連携	講義	予習・復習を可能な範囲で行う。
15	視覚聴覚二重障害者のサポート方法・訓練	講義・演習	予習・復習を可能な範囲で行う。
16	試験(中間)	試験	
17	聴覚の機能と代償手段のまとめ①	講義	
18	聴覚の機能と代償手段のまとめ②	講義	
19	聴覚の機能と代償手段のまとめ③	講義	
20	聴覚の原因と症状のまとめ	講義・GW	

#### ■受講上の注意

検査に対する講義は概略の解説および演習を通して実施・進行していく。オーディオグラム、オーディオメータの用語・単位・原理についての理解、また各検査名とさまざまな区分についてその根拠から整理・理解していく。授業活動の状況によって、上記の内容や順番を変更する場合があります。

#### ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

#### ■テキスト参考書など

藤田郁代監修:標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第3版, 医学書院 病気が見える 耳鼻咽喉科 vol.13 第1版, メディックメディア  
聴覚検査の実際, 南山堂

#### ■備考

#### ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 聴覚障害学Ⅲ

講師:草野 愛

単位数:2単位

時間数:40時間

授業学年:3学年

必修選択:必修

## ■科目目標

聴覚障害者に対して難聴支援を行うにあたり、その対象や使用する機器は多岐にわたり、適切に使用できているか把握するための評価方法も異なる。本講義では補聴器及び人工内耳等人工聴覚器についてその目的、仕組みや特徴、調整方法、評価法などの概要について学習する。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	補聴器の構造、機能	講義	講義資料を必ず持する
2	補聴器の構造、機能(2)	講義	補聴器の仕組みを理解する
3	補聴器の機能と適合の流れ	講義	補聴器の仕組みを理解する
4	補聴器適合の流れ(2)	講義	講義資料を必ず持する
5	補聴器特性	講義	講義資料を必ず持する
6	補聴器特性の測定と調整方法	講義	講義資料を必ず持する
7	補聴器特性調整と評価の詳細、関連疾患について	講義	講義資料を必ず持する
8	伝音難聴、騒音、補聴援助システム	講義	解剖学的な知識を踏まえたうえで補聴器の違いを学習する
9	SG、CROS補聴器、人工聴覚器	講義	解剖学的な知識を踏まえたうえで補聴器の違いを学習する
10	人工内耳の構造、機能	講義	人工内耳の仕組みを理解する
11	人工内耳の機能、EAS適応基準	講義	解剖学的な知識を踏まえたうえで各人工内耳の違いを学習する
12	人工内耳の流れ、術前	講義	マッピング手法の違いを学習する
13	マッピング	講義	マッピング手法の違いを学習する
14	マッピングの流れ、装用効果の評価	講義	現行の標準化、非標準化の評価法について学習する
15	小児のマッピングハビリテーション	講義	マッピング手法の違いを学習する
16	小児のマッピング、言語指導	講義	現行の標準化、非標準化の評価法について学習する
17	言語指導と普通教育、聾学校の教育	講義	講義資料を必ず持する
18	補足事項	講義	福祉・行政の支援システムについて理解する
19	補足事項(2)	講義	
20	試験	試験	

■ 受講上の注意

配布する資料等に適宜講義内容を追記してください。

■ 成績評価の方法

レポート30点、筆記試験70点(本試験、再試験)

■ テキスト参考書など

言語聴覚士テキスト(医歯薬出版株式会社)、聴覚検査の実際(日本聴覚医学会)、その他適宜資料を配布

■ 備考

■ 実務経験

本科目は実務経験のある言語聴覚士による授業である。

# 聴覚障害学Ⅳ

講師: 成 亥 啓 一

単位数: 1単位

時間数: 30時間

授業学年: 3学年

必修選択: 必修

## ■ 科目目標

- ・聴覚障害児・者のコミュニケーション手段と情報伝達特徴の概要を理解する。
- ・乳幼児・小期聴覚障害、成人中途障害、加齢性対応の特徴について理解を深める。
- ・わが国の聴覚障害児教育について理解し、教育現場の現状を知る。
- ・鹿児島県の聴覚障害児教育について理解し、教育現場の現状を知る。
- ・聴覚障害に関わる支援、制度、補聴援助機器について理解を深める。
- ・鹿児島県の聴覚障害児・者への支援体制・関係機関について理解を深める。

## ■ 科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	乳幼児・小期聴覚障害の特徴について理解を深める (1)	講義	事前配付資料の通読及び確認
2	乳幼児・小期聴覚障害の特徴について理解を深める (2)	講義	事前配付資料の通読及び確認
3	成人中途障害、加齢性対応について理解を深める (1)	講義	事前配付資料の通読及び確認
4	成人中途障害、加齢性対応について理解を深める (2)	講義	事前配付資料の通読及び確認
5	他覚的検査について理解を深める (1)	講義・演習	事前配付資料の通読及び確認
6	他覚的検査について理解を深める (2)	講義・演習	事前配付資料の通読及び確認
7	わが国の聴覚障害児教育について理解を深める	講義・GW	時代背景の推察が重要なポイントとなる。
8	聾学校とは、その位置づけについて理解を深める	講義・GW	地域における拠点機能に加え、教育的、社会的観点からの理解が重要である。
9	鹿児島県の聴覚障害児・者への支援体制・関係機関について理解を深める 鹿児島聾学校 (1)	GW・演習	教育的、社会的観点からの理解が重要である。
10	鹿児島県の聴覚障害児・者への支援体制・関係機関について理解を深める 鹿児島聾学校 (2)	GW・演習	教育的、社会的観点からの理解が重要である。
11	鹿児島県の聴覚障害児・者への支援体制・関係機関について理解を深める 鹿児島聾学校 (3)	GW・演習	教育的、社会的観点からの理解が重要である。
12	鹿児島県の聴覚障害児・者への支援体制・関係機関について理解を深める 視聴覚障害者情報センター (4)	GW・演習	教育的、社会的観点からの理解が重要である。
13	鹿児島県の聴覚障害児・者への支援体制・関係機関について理解を深める 補聴器メーカー (5)	GW・演習	多角的な観点からの理解が重要である。
14	鹿児島県の聴覚障害児・者への支援体制・関係機関について理解を深める 補聴器メーカー (6)	GW・演習	多角的な観点からの理解が重要である。
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

## ■ 受講上の注意

授業活動の状況によって、上記の内容や順番を変更する場合があります。

## ■ 成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■ テキスト参考書など

藤田郁代監修: 標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第3版, 医学書院

## ■ 備考

## ■ 実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 言語聴覚療法管理学Ⅰ

講師:専任教員

単位数:1単位

時間数:15時間

授業学年:1学年

必修選択:必修

## ■科目目標

「言語聴覚療法管理学」では、医療、福祉、教育現場における言語聴覚士の役割を学び、自分自身が言語聴覚士として活動する際の知見を得る事を目標としている。

本講義では、ソーシャルスキルの基礎知識、職能団体の理解、臨床現場をはじめとする現役言語聴覚士の活動内容、多職種連携について基本的な事項を中心に取り上げる。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	キャリアデザインについて学ぶ	講義・演習	自身を客観的に把握するよう意識する
2	キャリアデザインの重要性を理解する(1)	演習	自身を客観的に把握するよう意識する
3	キャリアデザインの重要性を理解する(2)	演習	第1・2講で学んだソーシャルスキルを活用する
4	キャリアデザインの重要性を理解する(3)	演習	第1・2講で学んだソーシャルスキルを活用する
5	就業者から職能情報を能動的に得て職業イメージを強くする(1) 情報取得のプロセスを確認・構築する	演習	第1・2講で学んだソーシャルスキルを活用する
6	就業者から職能情報を能動的に得て職業イメージを強くする(2) 情報取得のプロセスを実行し、ソーシャルスキルを活用する	演習	第1・2講で学んだソーシャルスキルを活用する
7	就業者から職能情報を能動的に得て職業イメージを強くする(3) 情報取得のプロセスを実行し、フィードバックを実践する	演習	第1・2講で学んだソーシャルスキルを活用する
8	就業施設とそこでの活動について学ぶ	演習	

## ■受講上の注意

### ■成績評価の方法

参加・計画資料・レポートを項目としたルーブリック評価による。

### ■テキスト参考書など

適宜配布

### ■備考

### ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 言語聴覚療法管理学Ⅱ

講師:専任教員

単位数:1単位

時間数:20時間

授業学年:2学年

必修選択:必修

## ■科目目標

「言語聴覚療法管理学」では、医療、福祉、教育現場における言語聴覚士の役割を学び、自分自身が言語聴覚士として活動する際の知見を得る事を目標としている。

本講義では、ソーシャルスキルの活用方法、職能団体の具体的な役割、臨床現場をはじめとする現役言語聴覚士の活動事例、臨床施設報告、多職種連携について多くの実践例を中心に取り上げる。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	就業場所における倫理、衛生等の重要な知識を理解する。	講義	実践で生かすことが重要となる
2	就業から職能情報を得て職業イメージを強くする(1) 情報取得のプロセスを主体的に確認・構築する	GW・演習	第1講で学んだソーシャルスキルを活用する
3	就業から職能情報を得て職業イメージを強くする(2) 役割に応じて情報取得のプロセスを実行する	GW・演習	第1講で学んだソーシャルスキルを活用する
4	就業から職能情報を得て職業イメージを強くする(3) 情報取得のプロセスを実行し、フィードバックを主導する	GW・演習	第1講で学んだソーシャルスキルを活用する
5	臨床実習で活用できるソーシャルスキルの実践と応用を学ぶ(1)	GW・演習	第1講で学んだソーシャルスキルを活用する
6	臨床実習で活用できるソーシャルスキルの実践と応用を学ぶ(2)	GW・演習	学んだソーシャルスキルを活用する
7	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(1)	GW	
8	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(2)	GW	
9	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(3)	GW	
10	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(4)	GW	

## ■受講上の注意

### ■成績評価の方法

参加・計画資料・レポートを項目としたルーブリック評価による。

### ■テキスト参考書など

適宜配布

### ■備考

### ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 言語聴覚療法管理学Ⅲ

講師:専任教員

単位数:1単位

時間数:20時間

授業学年:3学年

必修選択:必修

## ■科目目標

「言語聴覚療法管理学」では、医療、福祉、教育現場における言語聴覚士の役割を学び、自分自身が言語聴覚士として活動する際の知見を得る事を目標としている。

本講義では、ソーシャルスキルの活用、職能団体の実際、臨床現場をはじめとする現役言語聴覚士の活動事例、臨床施設報告、多職種連携について実際の経験に触れる。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	臨床実習・就業に活用できるソーシャルスキルを理解する(1)	GW	
2	臨床実習・就業に活用できるソーシャルスキルを理解する(2)	GW	
3	臨床実習・就業に活用できるソーシャルスキルを理解する(3)	GW	
4	臨床実習・就業に活用できるソーシャルスキルを理解する(4)	GW	
5	就業者から職能情報を得て職能について学ぶ(1)	GW・演習	前講で学んだソーシャルスキルを活用する
6	就業者から職能情報を能動的に得て職業イメージを強くする(2) 役割分担から周囲に意図を伝え、また聴取し情報取得のプロセスを実行につなげる	GW・演習	前講で学んだソーシャルスキルを活用する
7	就業者から職能情報を能動的に得て職業イメージを強くする(3) 情報取得のプロセスを実行後に、フィードバックの報告性と内容を確認する	GW・演習	前講で学んだソーシャルスキルを活用する
8	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(1)	GW	
9	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(2)	GW	
10	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(3)	GW	

## ■受講上の注意

### ■成績評価の方法

参加・計画資料・レポートを項目としたルーブリック評価による。

### ■テキスト参考書など

適宜配布

### ■備考

### ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。



# 言語聴覚療法管理学Ⅳ

講師:原口 友子、山口 浩明、専任教員

単位数:3単位

時間数:60時間

授業学年:4学年

必修選択:必修

## ■科目目標

「言語聴覚療法管理学」では、医療、福祉、教育現場における言語聴覚士の役割を学び、自分自身が言語聴覚士として活動する際の知見を得る事を目標としている。

本講義では、就業前後のソーシャルスキル、身近な社会保障等の社会的知識、言語聴覚士会の声、鹿児島県の臨床現場の近況、臨床現場をはじめとする現役言語聴覚士の声、臨床施設報告、多職種連携について学ぶ。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	臨床実習で活用できるソーシャルスキルを理解・実践する(1)	演習	般化を心掛けることが重要となる
2	臨床実習・就業に活用できるソーシャルスキルを理解・実践する(2)	演習	前講までに学んだソーシャルスキルを活用する
3	臨床実習・就業に活用できるソーシャルスキルを理解・実践する(3)	GW・演習	前講までに学んだソーシャルスキルを活用する
4	臨床実習・就業に活用できるソーシャルスキルを理解・実践する(4)	GW・演習	前講までに学んだソーシャルスキルを活用する
5	就業後の社会人に必要な社会保障制度等に関わる知識を得る	講義	保管しておくことが必要な情報がある
6	職能団体について理解できる	講義・TBL	日本言語聴覚士協会および鹿児島県言語聴覚士協会HPを確認しておく
7	鹿児島県の言語聴覚士会の活動および鹿児島県で活躍する言語聴覚士の職域について理解する	講義・TBL	日本言語聴覚士協会および鹿児島県言語聴覚士協会HPを確認しておく
8	鹿児島県の言語聴覚士の活動について将来的な視点を持つ	講義・TBL	日本言語聴覚士協会および鹿児島県言語聴覚士会HPを確認しておく
9	鹿児島県における教育・保健・福祉分野のSTの領域について理解できる。 「子どもの発達支援を考えるSTの会」について理解できる。	講義	左記の情報をHPなどで確認しておく
10	言語聴覚士が取得できる資格(特別支援教育士、臨床発達心理士、特別支援学校自立活動教諭一種免許状)について理解できる。	講義	左記資格等の情報をHPなどで確認しておく
11	言語聴覚士から職能情報を得て職能について学ぶ(1)	GW・演習	就業後のイメージを強固にし、疑問点は積極的に解消する。
12	言語聴覚士から職能情報を得て職能について学ぶ(2)	GW・演習	就業後のイメージを強固にし、疑問点は積極的に解消する
13	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(1)	GW	
14	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(2)	GW	
15	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(3)	GW	
16	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(4)	GW	
17	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(5)	GW	
18	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(6)	GW	
19	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(7)	GW	
20	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(8)	GW	

21	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(9)	GW
22	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(10)	GW
23	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(11)	GW
24	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(12)	GW
25	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(13)	GW
26	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(14)	GW
27	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(15)	GW
28	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(16)	GW
29	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(17)	GW
30	言語聴覚療法にかかわる情報とその活用方法を学ぶ(18)	GW

---

■ 受講上の注意

■ 成績評価の方法

参加・計画資料・レポートを項目としたルーブリック評価による。

■ テキスト参考書など

適宜配布

■ 備考

■ 実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

---

# 見学実習

講師:専任教員、実習指導者

単位数:1単位

時間数:45時間

授業学年:2学年

---

必修選択:必修

---

## ■科目目標

- ・言語聴覚障害がある人の抱える問題と背景を学ぶ。
- ・言語聴覚士の役割と業務を学ぶ。
- ・見学する施設の特徴と地域における役割を学ぶ。
- ・職業倫理(守秘義務など)について学ぶ。

## ■科目内容

---

### ■学習のねらい

- (1)学内でのオリエンテーション
  - ・臨床実習マニュアルをもとに実習全般について確認および諸注意を認識し、活動方法を学ぶ。
  - ・臨床実習経験者からの講話および対話から具体的な事項を学ぶ。
- (2)実習施設でのオリエンテーション
  - ・施設の組織、管理運営の概要、職務規程の説明(勤務時間、休憩時間、電話・PC使用、個人情報に関する規則、更衣室の使用、喫煙、清掃、戸締りなど)
  - ・部署、部門の概要と業務(運営規則、職員構成、職員と学生の任務と責任など)
  - ・実習に伴う諸注意(安全面、衛生面、個人情報、器具、備品、図書取り扱いなど)
  - ・その他
- (3)実習参加・活動
  - a. 指導者は、学生―指導者―教員連絡表(臨床実習マニュアル書式⑦)を参照し、学生の個々の能力と経験を考慮した上で基礎的かつ広範な知識・技術を身に付ける機会を与えられる。
  - b. 指導者は個別指導以外に、可能であれば以下のような場面の見学機会を与える。学生は実習の一環としてこれらに参加する。スタッフミーティング、症例検討会、医師による回診、手術見学、症例発表、文献抄読等の課題提示、他の関連部門の見学など
- (4)臨床活動(見学→模倣)
  - 学生は、見学を通して言語聴覚療法の詳細な説明を受ける。「何が行われていたのか」積極的な質問や調べ学習が求められる。
  - 進歩に応じて自ら考え判断していく機会があれば、自身の考えを指導者に伝達していくなど、能動的な活動を行えるよう意識していくと実習活動がより充実したものになる。
- (5)学生は実習後に実習報告を行い実習報告書の提出を行う。具体的な書式は個々の活動内容によってより適切な形式を採用する。

## ■方法

---

実習および関連する学習等

---

## ■学習上の留意点

### ■受講上の注意

臨床実習前オリエンテーションへの参加(事前通達有)及び臨床実習マニュアルの参照を行う。特に出席および欠席・遅刻・早退等への対応については十分把握すること。

### ■成績評価の方法

鹿児島医療技術専門学校言語聴覚療法学科ルーブリック評価によりNICE段階評価が行われる(臨床実習マニュアル参照)。

### ■テキスト参考書など

鹿児島医療技術専門学校 臨床実習マニュアル、その他関連分野参考書

### ■備考

### ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員、指導者による授業である。

---

# 評価実習

講師:専任教員、実習指導者

単位数:5単位

時間数:225時間

授業学年:3学年

---

必修選択:必修

---

## ■科目目標

- ①臨床の基本的態度と評価・診断技能を学ぶ。
- ②他職種との連携や言語聴覚士の臨床以外の業務について学ぶ。
- ③言語聴覚障害がある人との適切なコミュニケーションを学ぶ。
- ④指導者の指導の下、対象者の神経学的、神経心理学的特徴が明らかとなる評価法を選択し、実施することを学ぶ。
- ⑤実施した評価結果を分析することを学ぶ。

## ■科目内容

---

### ■学習のねらい

- (1)学内でのオリエンテーション
  - ・臨床実習マニュアルをもとに実習全般について確認および諸注意を認識し、活動方法を学ぶ。
  - ・臨床実習経験者からの講話および対話から具体的な事項を学ぶ。
- (2)実習施設でのオリエンテーション
  - ・施設の組織、管理運営の概要、職務規程の説明(勤務時間、休憩時間、電話・PC使用、個人情報に関する規則、更衣室の使用、喫煙、清掃、戸締りなど)
  - ・部署、部門の概要と業務(運営規則、職員構成、職員と学生の任務と責任など)
  - ・実習に伴う諸注意(安全面、衛生面、個人情報、器具、備品、図書取り扱いなど)
  - ・その他
- (3)実習参加・活動
  - a. 指導者が学生の担当する対象者の選択と割り当てをするにあたっては、学生－指導者－教員連絡表(臨床実習マニュアル書式⑦)を参照し、学生の個々の能力と経験を考慮した上で基礎的かつ広範な知識・技術を身に付ける機会を与えられる。
  - b. 指導者は個別指導以外に、可能であれば以下のような機会を与える。学生は臨床実習の一環としてこれらに参加する。スタッフミーティング、症例検討会、医師による回診、手術見学、症例発表、文献抄読等の課題提示、他の関連部門の見学など
- (4)臨床活動(見学 → 模倣 → 実施)

学生は、まず見学を通して言語聴覚療法の詳細な説明を受ける。特に実習開始から間もない時期は、「どのような障害に、どのような目的、方法で」言語聴覚療法が行われているのかイメージできるよう積極的な質問や調べ学習が求められる。

例 数回の見学後に訓練等の模倣、指導者が大丈夫だと判断した時点を「実施」とし、以降はその技術に限定して実施など、実施項目(can)を増やしていく。一定レベルに達した後は、進歩に応じて自ら考え判断していく機会を得るよう、自身の考えを指導者に伝達していくことも肝要である。
- (5)学生は実習後に実習報告を行い実習報告書の提出を行う。具体的な書式は個々の活動内容によってより適切な形式を採用する。

### ■方法

実習および関連する学習等

---

### ■学習上の留意点

### ■受講上の注意

臨床実習前オリエンテーションへの参加(事前通達有)及び臨床実習マニュアルの参照を行う。  
特に出席および欠席・遅刻・早退等への対応については十分把握すること。

### ■成績評価の方法

鹿児島医療技術専門学校言語聴覚療法学科ルーブリック評価によりNICE段階評価が行われる(臨床実習マニュアル参照)。

### ■テキスト参考書など

鹿児島医療技術専門学校 臨床実習マニュアル、その他関連分野参考書

### ■備考

### ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員、指導者による授業である。

---

# 総合臨床実習

講師:専任教員

単位数:11単位

時間数:495時間

授業学年:4学年

---

必修選択:必修

---

## ■科目目標

- ①言語聴覚士の指導者の助言・指導のもとに典型的な対象児・者に提供できる基本的言語聴覚療法を学ぶ。
- ②対象者を評価し、言語聴覚療法の実施計画を作成し、言語聴覚療法を実施することを学ぶ。
- ③対象者の障害特徴を掘り下げて調べる検査や、それに対応した療(訓練・指導・支援)の方法を考案することを学ぶ。
- ④多職種と連携してリハビリテーションを実施する方法を学ぶ。

## ■科目内容

---

### ■学習のねらい

(1)学内でのオリエンテーション

- ・臨床実習マニュアルをもとに実習全般について確認および諸注意を認識し、活動方法を学ぶ。
- ・臨床実習経験者からの講話および対話から具体的な事項を学ぶ。

(2)実習施設でのオリエンテーション

- ・施設の組織、管理運営の概要、職務規程の説明(勤務時間、休憩時間、電話・PC使用、個人情報に関する規則、更衣室の使用、喫煙、清掃、戸締りなど)
- ・部署、部門の概要と業務(運営規則、職員構成、職員と学生の任務と責任など)
- ・実習に伴う諸注意(安全面、衛生面、個人情報、器具、備品、図書取り扱いなど)
- ・その他

(3)実習参加・活動

- a. 指導者が学生の担当する対象者の選択と割り当てをするにあたっては、学生―指導者―教員連絡表(臨床実習マニュアル書式⑦)を参照し、学生の個々の能力と経験を考慮した上で基礎的かつ広範な知識・技術を身に付ける機会を与えられる。
- b. 指導者は個別指導以外に、可能であれば以下のような機会を与える。学生は臨床実習の一環としてこれらに参加する。スタッフミーティング、症例検討会、医師による回診、手術見学、症例発表、文献抄読等の課題提示、他の関連部門の見学など

(4)臨床活動(見学 → 模倣 → 実施)

学生は、まず見学を通して言語聴覚療法の詳細な説明を受ける。特に実習開始から間もない時期は、「どのような障害に、どのような目的、方法で」言語聴覚療法が行われているのかイメージできるよう積極的な質問や調べ学習が求められる。

例 数回の見学後に訓練等の模倣、指導者が大丈夫だと判断した時点を「実施」とし、以降はその技術に限定して実施など、実施項目(can)を増やしていく。一定レベルに達した後は、進歩に応じて自ら考え判断していく機会を得よう、自身の考えを指導者に伝達していくことも肝要である。

(5)学生は実習後に実習報告を行い実習報告書の提出を行う。具体的な書式は個々の活動内容によってより適切な形式を採用する。

## ■方法

実習および関連する学習等

---

## ■学習上の留意点

### ■受講上の注意

臨床実習前オリエンテーションへの参加(事前通達有)及び臨床実習マニュアルの参照を行う。  
特に出席および欠席・遅刻・早退等への対応については十分把握すること。

### ■成績評価の方法

鹿児島医療技術専門学校言語聴覚療法学科ルーブリック評価によりNICE段階評価が行われる(臨床実習マニュアル参照)。

### ■テキスト参考書など

鹿児島医療技術専門学校 臨床実習マニュアル、その他関連分野参考書

### ■備考

### ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員、指導者による授業である。

# 臨床言語聴覚療法 I

講師:高吉 進

単位数:1単位

時間数:15時間

授業学年:1学年

必修選択:選択必修

## ■科目目標

・神経心理学的検査を被検者として、体験し、検査の流れ・内容を理解する。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	神経心理学的検査演習①	TBL	検査マニュアルを予習する
2	神経心理学的検査演習②	TBL	検査マニュアルを予習する
3	神経心理学的検査演習③	TBL	検査マニュアルを予習する
4	神経心理学的検査演習④	TBL	検査マニュアルを予習する
5	神経心理学的検査演習⑤	TBL	検査マニュアルを予習する
6	神経心理学的検査演習⑥	TBL	検査マニュアルを予習する
7	神経心理学的検査演習⑦	TBL	検査マニュアルを予習する
8	単位認定試験・解説	試験・講義	講義1～7を復習する

## ■受講上の注意

各講義のねらいに合わせて、予習・復習を行ってください。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに実技20点、筆記試験80点の合計100点で60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

各種検査マニュアル

## ■備考

TBLとは、能動的学習を育成することを重視し、グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法です。

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 臨床言語聴覚療法Ⅱ

講師:高吉 進

単位数:1単位

時間数:20時間

授業学年:2学年

必修選択:選択必修

## ■科目目標

- ・失語症者とのコミュニケーション技術を身につける。
- ・失語症者の外出時に必要な会話支援を学ぶ。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	失語症者のコミュニケーション支援の概要	TBL	配付資料を予習・復習する
2	失語症者のコミュニケーション支援技法①	TBL	配付資料を予習・復習する
3	失語症者のコミュニケーション支援技法②	TBL	配付資料を予習・復習する
4	失語症者のコミュニケーション支援技法③	TBL	配付資料を予習・復習する
5	失語症者のコミュニケーション支援技法④	TBL	配付資料を予習・復習する
6	失語症者のコミュニケーション支援技法⑤	TBL	配付資料を予習・復習する
7	失語症者のコミュニケーション支援技法⑥	TBL	配付資料を予習・復習する
8	失語症者のコミュニケーション支援技法⑦	TBL	配付資料を予習・復習する
9	失語症者のコミュニケーション支援技法⑧	TBL	配付資料を予習・復習する
10	単位認定試験・解説	試験・講義	講義1～9を復習する

## ■受講上の注意

各講義のねらいに合わせて、予習・復習を行ってください。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに実技20点、筆記試験80点の合計100点で60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

## ■備考

TBLとは、能動的学習を育成することを重視し、グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法です。

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 臨床言語聴覚療法Ⅲ

講師:高吉 進

単位数:1単位

時間数:15時間

授業学年:3学年

必修選択:選択必修

## ■科目目標

・神経心理学的検査の検査技術や実践力を身につける。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	神経心理学的検査演習①	TBL	検査マニュアルを復習する
2	神経心理学的検査演習②	TBL	検査マニュアルを復習する
3	神経心理学的検査演習③	TBL	検査マニュアルを復習する
4	神経心理学的検査演習④	TBL	検査マニュアルを復習する
5	神経心理学的検査演習⑤	TBL	検査マニュアルを復習する
6	神経心理学的検査演習⑥	TBL	検査マニュアルを復習する
7	神経心理学的検査演習⑦	TBL	検査マニュアルを復習する
8	単位認定試験・解説	試験・講義	講義1～7を復習する

## ■受講上の注意

各講義のねらいに合わせて、予習・復習を行ってください。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに実技20点、筆記試験80点の合計100点で60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

各種検査マニュアル

## ■備考

TBLとは、能動的学習を育成することを重視し、グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法です。

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。



# 臨床言語聴覚療法Ⅳ

講師:川元 真由美

単位数:1単位

時間数:15時間

授業学年:3学年

必修選択:選択必修

## ■科目目標

本科目では主に呼吸リハビリテーションについて学びを深める。2018年には、日本呼吸ケア・リハビリテーション学会、日本呼吸理学療法学会、日本呼吸器学会により発表された「呼吸リハビリテーションに関するステートメント」の中で、呼吸リハビリテーションは原則チーム医療であること、また専門のヘルスケアプロフェッショナルとして言語聴覚士も含まれていることを明らかにした。特に言語聴覚士の臨床では摂食嚥下障害・発声発語障害でより呼吸ケアが重要となる。そこで呼吸の基礎的知識を踏まえ、明日から臨床で使用できる呼吸リハビリテーションおよび呼吸理学療法の目的・技術について学ぶ機会とする。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	呼吸リハビリテーション(1)	講義・演習・DVD	言語聴覚士が行う手技について説明できる。
2	呼吸リハビリテーション(2)	講義・演習・DVD	解剖・生理の視点から呼吸について説明できる。
3	呼吸リハビリテーション(3)	講義・演習・DVD	言語聴覚士の役割について説明できる。
4	呼吸リハビリテーション(4)	講義・演習・DVD	身体所見・視診のポイントがわかる。
5	呼吸リハビリテーション(5)	講義・演習・DVD	正常な呼吸パターンを理解する。
6	呼吸リハビリテーションの実際(1)	講義・演習・DVD	実技を通しポイントを身に着ける。
7	呼吸リハビリテーションの実際(2)	講義・演習・DVD	実技を通しポイントを身に着ける。
8	呼吸リハビリテーションの実際(3)	講義・演習・DVD	実技を通しポイントを身に着ける。

## ■受講上の注意

DVD・実技を通し呼吸について学びます。実技では積極的に参加をすることで実りの多い時間にしてください。授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合があります。

## ■成績評価の方法

受講態度・レポートなどを総合的に判断し、本試験・再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

参考書

言語聴覚士のための呼吸ケアとリハビリテーション 第2版(呼吸ケア&リハビリテーションシリーズ)、中山書店

呼吸リハビリテーション 基礎概念と呼吸介助手技、学研

※適宜、資料を配布します

## ■備考

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 臨床言語聴覚療法Ⅴ

講師:松尾 康弘

単位数:1単位

時間数:15時間

授業学年:3学年

必修選択:選択必修

## ■科目目標

本科目は神経心理学を基礎とし、脳画像読影の基礎を理解し、脳画像から種々の障害を導き出せるようになることを目標とする。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	画像読影に必要な基礎知識として脳解剖について理解する	講義・TBL	
2	画像読影に必要な基礎知識として画像(CT/MRI/脳機能画像)について理解する。	講義・TBL	
3	基本的な画像の見かたとして、脳部位の同定について理解する。	講義・TBL	
4	事例を通して読影を学ぶ(事例検討①)	講義・TBL	
5	事例を通して読影を学ぶ(事例検討②)	講義・TBL	
6	事例を通して読影を学ぶ(事例検討③)	講義・TBL	
7	事例を通して読影を学ぶ(事例検討④)	講義・TBL	
8	事例を通して読影を学ぶ(事例検討⑤)	講義・TBL	

## ■受講上の注意

### ■成績評価の方法

講義への参加態度(40%)・最終試験(60%)により総合的に評価する。  
本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

### ■テキスト参考書など

### ■備考

### ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 臨床言語聴覚療法Ⅵ

講師:小牧 祥太郎

単位数:1単位

時間数:15時間

授業学年:3学年

必修選択:選択必修

## ■科目目標

ヘルスプロモーションとは、「人々が自らの健康とその決定要因をコントロールし、改善することができるようにするプロセス」と定義されている。

言語聴覚士は臨床医学分野はもちろんのこと、医学に関する幅広い知識が求められ、社会医学分野における知識も必要とされる。昨今、感染症の流行や生活習慣による病も増加しており、また、超高齢社会を背景とする死因の移り行きなどについても把握しておく必要がある。

本講義では、我々の生活に身近な医学・健康問題などを取り上げ、自らの心身の健康状態の維持・改善に繋がる内容について理解を深めていく。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	エビデンスに基づいた医療、保健対策(Evidence-based Public Health(EBPH))について学ぶ。 また、上記に関する過去の言語聴覚士国家試験問題と照らし合わせ、十分な理解・解説が行えるようになる。	演習・講義	授業のねらいにおける項目について、事前に調べておくことが望ましい。
2	「飲酒・喫煙・薬物」等の生活習慣に関わる内容や、頭痛や呼吸器疾患などの身近な健康問題について理解を深める。 また、上記に関する過去の言語聴覚士国家試験問題と照らし合わせ、十分な理解・解説が行えるようになる。	演習・講義	授業のねらいにおける項目について、事前に調べておくことが望ましい。
3	「感染症」、「感染症予防」についての基本事項を学び、予防法や適切な対策法、最新の知見について学ぶ。 また、上記に関する過去の言語聴覚士国家試験問題と照らし合わせ、十分な理解・解説が行えるようになる。	演習・講義	授業のねらいにおける項目について、事前に調べておくことが望ましい。
4	「アレルギー」や「環境衛生」に関わる健康問題について理解を深める。 また、上記に関する過去の言語聴覚士国家試験問題と照らし合わせ、十分な理解・解説が行えるようになる。	演習・講義	授業のねらいにおける項目について、事前に調べておくことが望ましい。
5	「人口動態統計」について理解を深め、今後の社会情勢などを踏まえて自身の意見を述べる事が出来る。 また、上記に関する過去の言語聴覚士国家試験問題と照らし合わせ、十分な理解・解説が行えるようになる。	演習・講義	授業のねらいにおける項目について、事前に調べておくことが望ましい。
6	「母子保健」を通じてポピュレーションアプローチについて学ぶ。 「成人・老人保健」を通じて生活習慣病予防や健康管理について学ぶ。 また、上記に関する過去の言語聴覚士国家試験問題と照らし合わせ、十分な理解・解説が行えるようになる。	演習・講義	授業のねらいにおける項目について、事前に調べておくことが望ましい。
7	「医療・医療制度」を学び、「医療費」などの社会資源の活用について自身の意見を述べる事が出来るようになる。	演習・講義	授業のねらいにおける項目について、事前に調べておくことが望ましい。
8	試験・解説(あるいはまとめ)	試験・講義	

## ■受講上の注意

社会医学全般に関心を持ちながら講義内容の理解を深めること。具体的な医療・健康関連のニュースについて興味をもつ事。  
授業活動の状況に応じて、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

適宜、配布予定。

※指定テキストが必要な場合は早急に連絡をいたします。

参考書 テキスト『社会・環境と健康 公衆衛生学』医歯薬出版(株)

## ■備考

講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 臨床言語聴覚療法Ⅶ

講師:小牧 祥太郎

単位数:1単位

時間数:15時間

授業学年:3学年

必修選択:選択必修

## ■科目目標

言語聴覚士は、発声発語障害患者や摂食嚥下障害患者などの運動障害患者に対して、リハビリ介入を行う上で、徒手的(患者の身体に触れる)な介入が必要となる事も多い。

本講義では、徒手的な介入方法の入門として、まず過去に学んだ解剖・生理学分野の復習と、それを基に運動学を学ぶ。そこから、対象者への適切な徒手的介入方法と運動療法についての理解を深める。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語聴覚士が行なえる患者介入について学ぶ。 また、徒手的な介入を行う意義を理解する。	講義・演習	特になし
2	身体・筋肉の名称の復習を行い、リハビリテーション場面で多用される専門用語の確認を行う。 また、筋肉については大まかな動きを理解する。	講義・演習	特になし
3	筋肉の働き(主な働きや反対(拮抗する)の働き)と筋緊張についての理解を深める。 また、運動学的用語を理解する。	講義・演習	動きやすい服装の準備を指示する事がある。
4	運動を行うために必要な支持基底面について理解を深め、適切な移乗動作(ベッドから車椅子への移乗など)を理解し、必要な介助方法など学ぶ。	講義・演習	動きやすい服装の準備を指示する事がある。
5	ベッド上での背臥位における姿勢調整法を学び、嚥下障害患者への介入時の適切なポジショニングについて理解を深める。	講義・演習	動きやすい服装の準備を指示する事がある。 嚥下障害学に関して復習しておくことが望ましい。
6	発声発語障害患者に対して発声発語器官(主に口腔構音器官)に対する徒手的介入法を学ぶ。	講義・演習	動きやすい服装の準備を指示する事がある。 Dysarthriaに関して復習しておくことが望ましい。
7	障害背景に応じた徒手的介入方法や運動療法の選択を考える。 (Case Studyを含む。例:脳性麻痺症例に対するポジショニングなど)	講義・演習	動きやすい服装の準備を指示する事がある。
8	試験・解説(あるいはまとめ)	試験・講義	

## ■受講上の注意

実技形式で実施する事が多いため、動きやすい服装の準備を指示する事がある。  
授業活動の状況や、施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合もある。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

適宜、配布を行う。

## ■備考

講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 臨床言語聴覚療法Ⅷ

講師:小牧 祥太郎

単位数:1単位

時間数:15時間

授業学年:3学年

必修選択:選択必修

## ■科目目標

現在、情報社会が進み医療現場でも情報の利活用が叫ばれている。

本講義では実際に言語聴覚士の対象になり得るであろう患者情報の模擬データや、健康関連情報や大規模データを扱いながら情報管理・活用について学ぶ。

なお、データについては、ハンズオン(直接操作して)にてPython等のプログラミング言語の使用や、適切なソフトの選定や統計処理を施し、客観的な解釈ができるようになる。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語聴覚士が関わる対象者の健康度を計る指標について、指標の見方とデータの分析を行う。	講義・演習	コンピューター室にて行う。
2	健康情報や疫学指標の見方について、よく使用される指標の理解を深める。	講義・演習	コンピューター室にて行う。
3	疾病と要因の関連性と因果性について、統計学的な考え方をを用いてデータを分析し、客観的な判断について学ぶ(対照群を用いたデータの解釈など)。	講義・演習	コンピューター室にて行う。
4	疾病と要因の関連性と因果性について、統計学的な考え方をを用いてデータを分析し、客観的な判断について学ぶ(因子分析や回帰・分類問題等)。	講義・演習	コンピューター室にて行う。
5	発声発語障害に対する音声・共鳴・調音などのデータを実際に収集し客観的な評価法を学ぶ(機器を用いた評価の実施)。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
6	嚥下機能に対する健常者を対象に実際にデータ収集を行い、理学所見等以外の異なる視点からの評価法を学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
7	大規模な健康関連データやオープンデータを使用して、人工知能を用いたデータ解析方法を学ぶ。	講義・演習	コンピューター室にて行う。
8	試験・解説(あるいはまとめ)	試験・講義	

## ■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

適宜、配布を行う。

## ■備考

講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

希望に応じて、扱うデータや解析方法の要望には可能な限り対応する。

本講義に沿った過去の言語聴覚士国家試験問題を取り扱い、解説を行う。

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 臨床言語聴覚療法Ⅱ

講師: 成 亥 啓 一

単位数: 2単位

時間数: 30時間

授業学年: 4学年

必修選択: 選択必修

## ■ 科目目標

本講義では「音」「聴覚」をテーマにさまざまな機器を使用した狭い分野の臨床的活動および研究的領域の活動を行う。3年次までの基礎～臨床科目をベースに応用的・実践的な内容の理解や方法の体験・習得を目指す。

## ■ 科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「音」「聴覚」の関連知識を確認する。 本講義の概要および予定する取り組みを確認する。	講義	
2	「音」「聴覚」の関連知識を確認する。 グループおよび個人の課題を明示し、対応および計画を協議する(1)	GW	個人・グループでの協議から課題を抽出する
3	「音」「聴覚」の関連知識を確認する。 グループおよび個人の課題を明示し、対応および計画を協議する(2)	GW	個人・グループでの協議から課題を抽出する
4	実施内容の確認	講義・GW	機器操作等にかかわる知識を確認しておく
5	グループ・個人の策定された計画の準備を図る(1)	GW・演習	個人とグループの活動比重の偏りに留意する
6	グループ・個人の策定された計画の準備を図る(2)	GW・演習	個人とグループの活動比重の偏りに留意する
7	グループ・個人の策定された計画の準備を図る(3)	GW・演習	個人とグループの活動比重の偏りに留意する
8	計画内容の実施と状況把握・理解(1)	GW	予行練習をしておく
9	計画内容の実施と状況把握・理解(2)	演習	記録、確認を確実にを行う
10	計画内容の実施と状況把握・理解(3)	演習	記録、確認を確実にを行う
11	計画内容の実施と状況把握・理解(4)	演習	提出レポートの内容を充実したものとする
12	計画内容の実施と状況把握・理解(5)	演習	提出レポートの内容を充実したものとする
13	計画内容の実施と状況把握・理解(6)	演習	提出レポートの内容を充実したものとする
14	計画内容の実施と状況把握・理解(7)	演習	提出レポートの内容を充実したものとする
15	計画内容の実施と状況把握・理解(8)	GW	提出レポートの内容を充実したものとする

## ■ 受講上の注意

### ■ 成績評価の方法

参加、各種作成資料、実行の各項目についてルーブリック評価を行う。

### ■ テキスト参考書など

指定なし

### ■ 備考

### ■ 実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 地域言語聴覚演習Ⅳ

講師: 成亥 啓一

単位数: 2単位

時間数: 30時間

授業学年: 4学年

必修選択: 選択必修

## ■科目目標

リハビリテーションは医療分野をはじめ福祉、教育など社会全般にその活動が広がっている。別の視点として「地域」という枠組みがあり、ここで必要な要素はやはりリハビリテーション全般に共通するものであるが、「地域」という視点を持ちリハビリテーションを考え、携わることに重要な意義がある。

「地域言語聴覚演習Ⅳ」では、「地域言語聴覚演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」での取り組みを引継ぎ活かす方向性を見出す者、または新たな視点で取り組みを行いたい者が選択し活動する科目である。それらを踏まえ、より社会のニーズを捉えた視点および行動を求め、最終的にその成果を見ることができることが本講義の目標である。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を獲得するため、調査・検討を行う(1)	演習・GW	社会活動全般の資料を参照することが役立つ。
2	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を獲得するため、調査・検討を行う(2)	演習・GW	社会活動全般の資料を参照することが役立つ。
3	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ(1)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
4	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ(2)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
5	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ(3)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
6	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ(4)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
7	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ(5)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
8	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を獲得するため、調査・検討を行う(3)	演習・GW	社会活動全般の資料を参照することが役立つ。
9	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を獲得するため、調査・検討を行う(4)	演習・GW	社会活動全般の資料を参照することが役立つ。
10	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ(6)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
11	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ(7)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
12	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ(8)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
13	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ(9)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
14	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ(10)	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
15	実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で検証を行うとともに多様な意見を得る機会とする	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。

## ■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番を変更する場合もある。

## ■成績評価の方法

ルーブリック評価

## ■テキスト参考書など

## ■備考

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 地域言語聴覚実習

講師:専任教員

単位数:2単位

時間数:90時間

授業学年:2学年、授業学年:3学年、授業学年:4学年

必修選択:選択必修

## ■科目目標

本講義は言語聴覚士養成課程における「評価実習」「総合臨床実習」を拡大して実施する希望を持った学生が受講する選択科目である。上述の臨床実習では医療機関での活動時間が多く設定されているため、それ以外の領域での活動機会が相対的に得られないことから、本講義ではそれらを補完する位置づけを有している。よって、実習の目的としては上述の科目と相違なく、また内容も求める目標も相応のものとなっている。受講希望者とはオリエンテーションの際に十分に実習領域に対する要望や意見を聴取し、担当教員との調整の下、実習先・方法を決定していく。

## ■科目内容

### 学習のねらい

#### (1)受講時オリエンテーション

- ・臨床実習マニュアルをもとに実習全般について確認および諸注意を認識し、活動方法を学ぶ。
- ・必要に応じて臨床実習経験者からの講話および対話から具体的な事項を学ぶ。

#### (2)実習担当者とのオリエンテーション

- ・施設の組織、管理運営の概要、職務規程の説明(勤務時間、休憩時間、電話・PC使用、個人情報に関する規則、更衣室の使用、喫煙、清掃、戸締りなど)
- ・部署、部門の概要と業務(運営規則、職員構成、職員と学生の任務と責任など)
- ・実習に伴う諸注意(安全面、衛生面、個人情報、器具、備品、図書取り扱いなど)
- ・その他

#### (3)実習参加・活動

- a. 指導者が学生の担当する対象者の選択と割り当てをするにあたっては、学生－指導者－教員連絡表(臨床実習マニュアル書式⑦)を参照し、学生の個々の能力と経験を考慮した上で基礎的かつ広範な知識・技術を身に付ける機会を与えられる。
- b. 指導者は個別指導以外に、可能であれば以下のような機会を与える。学生は臨床実習の一環としてこれらに参加する。スタッフミーティング、症例検討会、医師による回診、手術見学、症例発表、文献抄読等の課題提示、他の関連部門の見学など

#### (4)活動(見学→模倣→実施)

学生は、まず見学を通して言語聴覚療法の詳細な説明を受ける。特に実習開始から間もない時期は、「どのような障害に、どのような目的、方法で」言語聴覚療法が行われているのかイメージできるよう積極的な質問や調べ学習が求められる。

例 数回の見学後に訓練等の模倣、指導者が大丈夫だと判断した時点を「実施」とし、以降はその技術に限定して実施など、実施項目(can)を増やしていく。一定レベルに達した後は、進歩に応じて自ら考え判断していく機会を得るよう、自身の考えを指導者に伝達していくことも肝要である。

- (5)学生は実習後に実習報告を行い実習報告書の提出を行う。具体的な書式は個々の活動内容によってより適切な形式を採用する。

## ■受講上の注意

外部での実習前にオリエンテーションへの参加(事前通達有)及び臨床実習マニュアルの参照を行う。特に出席および欠席・遅刻・早退等への対応については十分把握すること。

## ■成績評価の方法

鹿児島医療技術専門学校言語聴覚療法学科ルーブリック評価による段階評価を行う。

## ■テキスト参考書など

鹿児島医療技術専門学校 臨床実習マニュアル、言語聴覚療法技術ガイド  
その他関連分野参考書

## ■備考

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員、指導者による授業である。



# 言語聴覚療法各論 I

講師:桑木 共之

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:3学年

必修選択:選択必修

## ■科目目標

基礎医学の知識を整理し、これを元に病態、診断、治療法を学んで応用を身につける。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	オリエンテーション:自己紹介と授業の進め方、学習の意義	講義	
2	STの歴史と心構え	講義	
3	医用工学	講義	
4	生殖、成長と老化	講義	
5	感覚神経(聴覚を中心として)	講義	
6	運動神経(呼吸を中心として)	講義	
7	心と身体の健康とその破綻-1 自律神経・内分泌系による身体の調節	講義	
8	心と身体の健康とその破綻-2 脳の構造と精神機能	講義	
9	心と身体の健康とその破綻-3 心と身体の結びつき	講義	
10	心と身体の健康とその破綻-4 ストレス	講義	
11	心と身体の健康とその破綻-5 ハピネス	講義	
12	基礎医学の総復習-1(国試問題を例として)	講義	
13	基礎医学の総復習-2(国試問題を例として)	講義	
14	基礎医学の総復習-3(国試問題を例として)	講義	
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

## ■受講上の注意

今まで学習した解剖学、生理学を復習しておく事。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

適宜配布

## ■備考

## ■実務経験

# 言語聴覚療法各論Ⅱ

講師:専任教員

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:4学年

必修選択:選択必修

## ■科目目標

「言語聴覚療法各論Ⅱ～Ⅷ」は、言語聴覚士にとって必須の基礎・専門知識について知識と理解を深め、4年間の集大成につなげる講義である。本講義は卒業後の言語聴覚士としての活動に向けた知識の整理、確認を目標としており、実際にこれまでに履修した各論の資料、教科書、ノートが重要な資料となる。これらをベースに個別学習、グループ学習等、適宜形態を用いて講義を進めていく。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	基礎医学分野の知識を再確認する(医学総論・解剖学・生理学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
2	基礎医学分野の知識を再確認する(医学総論・解剖学・生理学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
3	基礎医学分野の知識を再確認する(医学総論・解剖学・生理学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
4	基礎医学分野の知識を再確認する(医学総論・解剖学・生理学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
5	基礎医学分野の知識を再確認する(病理学・内科学・小児科学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
6	基礎医学分野の知識を再確認する(病理学・内科学・小児科学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
7	基礎医学分野の知識を再確認する(病理学・内科学・小児科学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
8	基礎医学分野の知識を再確認する(精神医学・リハビリテーション医学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
9	基礎医学分野の知識を再確認する(精神医学・リハビリテーション医学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
10	基礎医学分野の知識を再確認する(精神医学・リハビリテーション医学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
11	基礎医学分野の知識を再確認する(臨床神経・形成外科・耳鼻咽喉科学科)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
12	基礎医学分野の知識を再確認する(臨床神経・形成外科・耳鼻咽喉科学科)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
13	基礎医学分野の知識を再確認する(臨床神経・形成外科・耳鼻咽喉科学科)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
14	基礎医学分野の知識を再確認する(歯科、口腔外科学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

## ■受講上の注意

「言語聴覚療法各論Ⅰ～Ⅷ」の受講者は各論に対する個々の習熟の程度を判断し科目選択することが望まれる。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

適宜配布

## ■備考

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 言語聴覚療法各論Ⅲ

講師:専任教員

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:4学年

必修選択:選択必修

## ■科目目標

「言語聴覚療法各論Ⅱ～Ⅷ」は、言語聴覚士にとって必須の基礎・専門知識について知識と理解を深め、4年間の集大成につながる講義である。本講義は卒業後の言語聴覚士としての活動に向けた知識の整理、確認を目標としており、実際にこれまでに履修した各論の資料、教科書、ノートが重要な資料となる。これらをベースに個別学習、グループ学習等、適宜形態を用いて講義を進めていく。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する(呼吸発声発語系)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
2	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する(呼吸発声発語系)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
3	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する(呼吸発声発語系)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
4	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する(呼吸発声発語系)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
5	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する(神経系の構造・機能・病態)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
6	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する(神経系の構造・機能・病態)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
7	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する(神経系の構造・機能・病態)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
8	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する(神経系の構造・機能・病態)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
9	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する(神経系の構造・機能・病態)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
10	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する(聴覚系の構造・機能・病態)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
11	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する(聴覚系の構造・機能・病態)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
12	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する(聴覚系の構造・機能・病態)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
13	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する(聴覚系の構造・機能・病態)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
14	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する(聴覚系の構造・機能・病態)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

## ■受講上の注意

「言語聴覚療法各論Ⅰ～Ⅷ」の受講者は各論に対する個々の習熟の程度を判断し科目選択することが望まれる。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

適宜配布

## ■備考

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 言語聴覚療法各論Ⅳ

講師:専任教員

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:4学年

必修選択:選択必修

## ■科目目標

「言語聴覚療法各論Ⅱ～Ⅷ」は、言語聴覚士にとって必須の基礎・専門知識について知識と理解を深め、4年間の集大成につながる講義である。本講義は卒業後の言語聴覚士としての活動に向けた知識の整理、確認を目標としており、実際にこれまでに履修した各論の資料、教科書、ノートが重要な資料となる。これらをベースに個別学習、グループ学習等、適宜形態を用いて講義を進めていく。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	心理学分野の知識を再確認する(認知・学習心理学)	講義・GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
2	心理学分野の知識を再確認する(認知・学習心理学)	講義・GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
3	心理学分野の知識を再確認する(認知・学習心理学)	講義・GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
4	心理学分野の知識を再確認する(認知・学習心理学)	講義・GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
5	心理学分野の知識を再確認する(心理測定法)	講義・GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
6	心理学分野の知識を再確認する(心理測定法)	講義・GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
7	心理学分野の知識を再確認する(心理測定法)	講義・GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
8	心理学分野の知識を再確認する(臨床心理学)	講義・GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
9	心理学分野の知識を再確認する(臨床心理学)	講義・GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
10	心理学分野の知識を再確認する(臨床心理学)	講義・GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
11	心理学分野の知識を再確認する(生涯発達心理学)	講義・GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
12	心理学分野の知識を再確認する(生涯発達心理学)	講義・GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
13	心理学分野の知識を再確認する(生涯発達心理学)	講義・GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
14	心理学分野の知識を再確認する(生涯発達心理学)	講義・GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

## ■受講上の注意

「言語聴覚療法各論Ⅰ～Ⅷ」の受講者は各論に対する個々の習熟の程度を判断し科目選択することが望まれる。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

適宜配布

## ■備考

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 言語聴覚療法各論Ⅴ

講師:専任教員

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:4学年

必修選択:選択必修

## ■科目目標

「言語聴覚療法各論Ⅱ～Ⅷ」は、言語聴覚士にとって必須の基礎・専門知識について知識と理解を深め、4年間の集大成につなげる講義である。本講義は卒業後の言語聴覚士としての活動に向けた知識の整理、確認を目標としており、実際にこれまでに履修した各論の資料、教科書、ノートが重要な資料となる。これらをベースに個別学習、グループ学習等、適宜形態を用いて講義を進めていく。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(音声学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
2	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(音声学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
3	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(音声学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
4	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(音響学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
5	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(音響学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
6	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(音響学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
7	音声・言語・聴覚医学の知識を再確認する(聴覚心理)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
8	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(聴覚心理)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
9	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(聴覚心理)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
10	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(言語学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
11	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(言語学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
12	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(言語学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
13	社会福祉・教育分野の再確認をする(社会保障制度・関係法規、リハビリテーション概論)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
14	社会福祉・教育分野の再確認をする(社会保障制度・関係法規、リハビリテーション概論)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

## ■受講上の注意

「言語聴覚療法各論Ⅰ～Ⅷ」の受講者は各論に対する個々の習熟の程度を判断し科目選択することが望まれる。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

適宜配布

## ■備考

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 言語聴覚療法各論Ⅵ

講師:専任教員

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:4学年

必修選択:選択必修

## ■科目目標

「言語聴覚療法各論Ⅱ～Ⅷ」は、言語聴覚士にとって必須の基礎・専門知識について知識と理解を深め、4年間の集大成につなげる講義である。本講義は卒業後の言語聴覚士としての活動に向けた知識の整理、確認を目標としており、実際にこれまでに履修した各論の資料、教科書、ノートが重要な資料となる。これらをベースに個別学習、グループ学習等、適宜形態を用いて講義を進めていく。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	失語症・高次脳機能障害分野の再確認をする(失語症)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
2	失語症・高次脳機能障害分野の再確認をする(失語症)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
3	失語症・高次脳機能障害分野の再確認をする(失語症)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
4	失語症・高次脳機能障害分野の再確認をする(失語症)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
5	失語症・高次脳機能障害分野の再確認をする(失語症)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
6	失語症・高次脳機能障害分野の再確認をする(失語症)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
7	失語症・高次脳機能障害分野の再確認をする(失語症)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
8	失語症・高次脳機能障害分野の再確認をする(高次脳機能障害)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
9	失語症・高次脳機能障害分野の再確認をする(高次脳機能障害)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
10	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする(高次脳機能障害)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
11	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする(高次脳機能障害)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
12	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする(高次脳機能障害)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
13	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする(高次脳機能障害)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
14	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする(高次脳機能障害)	講義、GW	グループワークと声別学習を適宜切り替えて行う
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

## ■受講上の注意

「言語聴覚療法各論Ⅰ～Ⅷ」の受講者は各論に対する個々の習熟の程度を判断し科目選択することが望まれる。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

適宜配布

## ■備考

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 言語聴覚療法各論Ⅶ

講師:専任教員

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:4学年

必修選択:選択必修

## ■科目目標

「言語聴覚療法各論Ⅱ～Ⅷ」は、言語聴覚士にとって必須の基礎・専門知識について知識と理解を深め、4年間の集大成につなげる講義である。本講義は卒業後の言語聴覚士としての活動に向けた知識の整理、確認を目標としており、実際にこれまでに履修した各論の資料、教科書、ノートが重要な資料となる。これらをベースに個別学習、グループ学習等、適宜形態を用いて講義を進めていく。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語発達障害学分野の再確認をする(言語発達障害学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
2	言語発達障害学分野の再確認をする(言語発達障害学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
3	言語発達障害学分野の再確認をする(言語発達障害学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
4	言語発達障害学分野の再確認をする(言語発達障害学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
5	言語発達障害学分野の再確認をする(言語発達障害学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
6	言語発達障害学分野の再確認をする(言語発達障害学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
7	言語発達障害学分野の再確認をする(言語発達障害学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
8	発声発語・嚥下障害分野の再確認をする(構音障害、音声障害)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
9	発声発語・嚥下障害分野の再確認をする(構音障害、音声障害)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
10	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする(構音障害、音声障害)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
11	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする(構音障害、音声障害)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
12	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする(構音障害、音声障害)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
13	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする(吃音)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
14	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする(吃音)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

## ■受講上の注意

「言語聴覚療法各論Ⅰ～Ⅷ」の受講者は各論に対する個々の習熟の程度を判断し科目選択することが望まれる。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

適宜配布

## ■備考

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 言語聴覚療法各論Ⅷ

講師:専任教員

単位数:1単位

時間数:30時間

授業学年:4学年

必修選択:選択必修

## ■科目目標

「言語聴覚療法各論Ⅱ～Ⅷ」は、言語聴覚士にとって必須の基礎・専門知識について知識と理解を深め、4年間の集大成につなげる講義である。本講義は卒業後の言語聴覚士としての活動に向けた知識の整理、確認を目標としており、実際にこれまでに履修した各論の資料、教科書、ノートが重要な資料となる。これらをベースに個別学習、グループ学習等、適宜形態を用いて講義を進めていく。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする(嚥下障害)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
2	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする(嚥下障害)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
3	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする(嚥下障害)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
4	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする(嚥下障害)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
5	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする(嚥下障害)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
6	聴覚障害学分野の再確認をする(聴覚障害)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
7	聴覚障害学分野の再確認をする(聴覚障害)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
8	聴覚障害学分野の再確認をする(聴覚障害)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
9	聴覚障害学分野の再確認をする(聴覚障害)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
10	聴覚障害学分野の再確認をする(聴覚障害)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
11	聴覚障害学分野の再確認をする(補聴器・人工内耳)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
12	聴覚障害学分野の再確認をする(補聴器・人工内耳)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
13	聴覚障害学分野の再確認をする(補聴器・人工内耳)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
14	聴覚障害学分野の再確認をする(視覚聴覚二重障害)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

## ■受講上の注意

「言語聴覚療法各論Ⅰ～Ⅷ」の受講者は各論に対する個々の習熟の程度を判断し科目選択することが望まれる。

## ■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

## ■テキスト参考書など

適宜配布

## ■備考

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。



# 言語聴覚研究入門

講師:専任教員

単位数:1単位

時間数:20時間

授業学年:1学年

必修選択:選択必修

## ■科目目標

高度専門士を目指す学生としてとして研究法を理解することは重要である。「言語聴覚研究Ⅰ・Ⅱ」につながる研究活動の基礎を理解したい。

①適切な用語を使用し文章表現ができる ②論文の構成を理解する ③既存の論文や教科書を検索する方法を学ぶ ④引用・参考を活用できるようになる ④事実を基に考察できるようになる ⑤適切な用語を使用し発表ができる 以上を本講義の目標とする。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	研究について概要を理解する、研究の流れを把握し、今後の活動をイメージする	講義・演習	あいまいな点を指導者に確認するためリストアップする
2	担当指導者との調整を行い、段階を踏んだ具体的な流れを知る	講義・演習	担当指導者との連絡手段を確認する
3	担当指導者との調整を重ね、情報収集、テーマ設定のための活動を進める	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
4	企画書の作成、計画立案を通して、研究の流れを把握する	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
5	情報収集とデータ収集の方法を活動を通して知る(1)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
6	情報収集とデータ収集の方法を活動を通して知る(2)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
7	情報の分析と活用の具体的流れを経験し、図表作成および文章化する(1)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
8	情報の分析と活用の具体的流れを経験し、図表作成および文章化する(2)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
9	情報をまとめ、適切な形式で表現する手段と方法を知る(1)	演習	担当指導者と積極的な調整を図る
10	情報をまとめ、適切な形式で表現する手段と方法を知る(2)	演習	担当指導者と積極的な調整を図る

## ■受講上の注意

本講義は担当指導者との個別指導を中心に実施される

## ■成績評価の方法

発表内容およびその他代替と認められる実績にて評価する。

## ■テキスト参考書など

適宜使用

## ■備考

## ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 言語聴覚研究 I

講師:専任教員

単位数:2単位

時間数:40時間

授業学年:3学年

必修選択:選択必修

## ■科目目標

担当指導者の指導のもと研究活動を行い、信頼性と妥当性にそった研究計画の立案と実行を行う。学内発表までの過程を通して1つの研究テーマを形にする。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	担当指導者との調整を行い、研究概要を共有する	講義・演習	担当指導者との連絡手段を確認する
2	担当指導者との調整を行い、段階を踏んだ具体的な計画を共有する	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
3	担当指導者との調整を重ね、情報収集、テーマ設定のための活動を進める(1)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
4	担当指導者との調整を重ね、情報収集、テーマ設定のための活動を進める(2)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
5	論文検索サイトを活用して情報収集を行うとともに情報の整理を進め方向性を絞っていく(1)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
6	論文検索サイトを活用して情報収集を行うとともに情報の整理を進め方向性を絞っていく(2)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
7	論文検索サイトなどを活用して情報収集を行う(1)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
8	論文検索サイトなどを活用して情報収集を行う(2)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
9	企画書の作成、計画立案を通して、研究概要を具体的に表現できるようにする(1)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
10	企画書の作成、計画立案を通して、研究概要を具体的に表現できるようにする(2)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
11	中間発表に向けた具体的な発表形式および内容の準備を行う(1)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
12	中間発表に向けた具体的な発表形式および内容の準備を行う(2)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
13	学内発表を行い多様な意見を得るとともに指導者と調査を行い今後の計画を検討する。また、他社の発表を聴講することを通して多様な研究を認識する	演習	担当指導者と積極的な調整を図る
14	学内発表を行い多様な意見を得るとともに指導者と調整を行い今後の計画を検討する。また、他社の発表を聴講することを通して多様な研究を認識する(2)	演習	担当指導者と積極的な調整を図る
15	情報の分析と活用から仮説を検証し、図表作成および文章化する(1)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
16	情報の分析と活用から仮説を検証し、図表作成および文章化する(2)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
17	検証からさらに上布を収集・統合し発展的な展開を描く(1)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
18	検証からさらに情報を収集・統合し発展的な展開を描く(2)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
19	情報をまとめ、適切な形式で表現(発表)する(1)	演習	担当指導者と積極的な調整を図る
20	情報をまとめ、適切な形式で表現(発表)する(2)	演習	担当指導者と積極的な調整を図る

■ 受講上の注意

本講義は「言語聴覚研究入門」を履修した後に受講することが望ましい。  
本講義は担当指導者との個別指導を中心に実施される。

■ 成績評価の方法

発表内容およびその他代替と認められる実績にて評価する。

■ テキスト参考書など

適宜使用

■ 備考

■ 実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

# 言語聴覚研究Ⅱ

講師:専任教員

単位数:3単位

時間数:60時間

授業学年:4学年

必修選択:選択必修

## ■科目目標

「言語聴覚研究Ⅰ」を履修した後、担当指導者の指導のもと研究活動を行い、学内発表の後、学外発表を見据えた活動を行う。

## ■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	担当指導者との調整を行い、研究概要を共有する	講義・演習	担当指導者との連絡手段を確認する
2	担当指導者との調整を行い、段階を踏んだ具体的な計画を共有する	講義・演習	短脳指導者と積極的な調整を図る
3	担当指導者との調整を重ね、情報収集、テーマ設定のための活動を進める(1)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
4	担当指導者との調整を重ね、情報収集、テーマ設定のための活動を進める(1)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
5	論文検索サイトを活用して情報収集を行うとともに情報の整理を進め方向性を絞っていく(1)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
6	論文検索サイトを活用して情報収集を行うとともに情報の整理を進め方向性を絞っていく(2)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
7	論文検索サイトなどを活用して情報収集を行う(1)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
8	論文検索サイトなどを活用して情報収集を行う(2)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
9	企画書の作成、計画立案を通して、研究概要を具体的に表現できるようにする(1)	講義・演習	担当教員と積極的な調整を図る
10	企画書の作成、計画立案を通して、研究概要を具体的に表現できるようにする(2)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
11	企画書の作成、計画立案を通して、研究概要を具体的に表現できるようにする(3)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
12	中間発表に向けた具体的な発表形式および内容の準備を行う(1)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
13	中間発表に向けた具体的な発表形式および内容の準備を行う(2)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
14	中間発表に向けた具体的な発表形式および内容の準備を行う(3)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
15	情報の分析を活用から仮説を検証し、図表作成および文章化する(1)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
16	情報の分析と活用から仮説を検証し、図表作成および文章化する(2)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
17	情報の分析と活用から仮説を検証し、図表作成および文章化する(3)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
18	検証からさらに情報を収集・統合し発展的な展開を描く(1)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
19	検証からさらに情報を収集・統合し発展的な展開を描く(2)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
20	検証からさらに情報を収集・統合し発展的な展開を描く(3)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る

21	学内発表を行い多様な意見を得るとともに指導者と調整を行い今後の計画を検討する。また、他者の発表を聴講することを通して多様な研究手法・視点を得る(1)	演習	担当指導者と積極的な調整を図る
22	学内発表を行い多様な意見を得るとともに指導者と超せういおい今後の計画を検討する。また、他者の発表を聴講することを通して多様な研究手法・視点を得る(2)	演習	担当指導者と積極的な調整を図る
23	学内発表を行い多様な意見を得るとともに指導者と調整を行い今後の計画を検討する。また、他者の発表を聴講することを通して多様な研究手法・視点を得る(3)	演習	担当指導者と積極的な調整を図る
24	学内発表で得た意見をもとに研究活動の保管や修正を行い、より充実した内容を目指す(1)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
25	学内発表で得た意見をもとに研究活動の保管や修正を行い、より充実した内容を目指す(2)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
26	学内発表で得た意見をもとに研究活動の保管や修正を行い、より充実した内容を目指す(3)	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
27	学会もしくはジャーナルにて研究成果を報告する過程および一般的な形式を学ぶ(1)	演習	担当指導者と積極的な調整を図る
28	学会もしくはジャーナルにて研究成果を報告する過程および一般的な形式を学ぶ(2)	演習	担当指導者と積極的な調整を図る
29	学会もしくはジャーナルにて研究成果を報告する過程および一般的な形式を学ぶ(3)	演習	担当指導者と積極的な調整を図る
30	学会もしくはジャーナルにて研究成果を報告する過程および一般的な形式を学ぶ(4)	演習	担当指導者と積極的な調整を図る

#### ■受講上の注意

本講義は原則として「言語聴覚研究Ⅰ」を履修した後に受講することを想定している。  
本講義は担当指導者との個別指導を中心に実施される。

#### ■成績評価の方法

発表内容およびその他代替と認められる実績にて評価する。

#### ■テキスト参考書など

適宜使用

#### ■備考

#### ■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。